

明治以降の「読売新聞」及び「朝日新聞」における  
「ブキヨウ」「ブキリョウ」について

教育学研究科教科教育専攻国語学専修二年 15GP202 中村奨

〈目次〉

第一章 はじめに	3
研究動機	3
第二章 接頭辞「不」「無」に関する先行研究	
第一節 語頭に接続する「不」「無」の呼称について	3
第二節 接頭辞「不」「無」が接続する語について	
第一項 接続する品詞について	4
第二項 「不」「無」両表記を有する語について	7
第三項 「不」「無」両表記を有する語の語基について	9
第三節 先行研究総括	11
第三章 新聞における「ブキヨウ」「ブキリョウ」について	
第一節 調査方法	12
第二節 読売新聞	
第一項 「ブキヨウ」の表記について	13
第二項 「ブキヨウ」の意味・用法について	22

第三項	「ブキリョウ」の表記について	47
第四項	「ブキリョウ」の意味・用法について	50
第三節 朝日新聞		
第一項	「ブキョウ」の表記について	57
第二項	「ブキョウ」の意味・用法について	64
第三項	「ブキリョウ」の表記について	91
第四項	「ブキリョウ」の意味・用法について	94
第四章 「ブキョウ」「ブキリョウ」に関する考察		
第一節	「ブキョウ」の表記・意味について	105
第二節	「ブキリョウ」の表記・意味について	113
おわりに		
		117
脚注		
		119
引用・参考文献		
		121

## 第一章 はじめに

### 研究動機

日本語の否定的な意味を持つ語群の中には、「ブキミ」「ブカッコウ」「ブキヨウ」等、「ブ」が語頭に来る一群がある。さらにそれらの中でも、「不恰好」、「不躑」等漢字で「不―」と表記される語、「無遠慮」、「無骨」等「無―」と表記される語、「不愛想」と「無愛想」、「不用心」と「無用心」等「不―」「無―」の両表記が存在する語がある。

「不」と「無」は字義が異なる以上、例えば「ブヨウジン」という語でも、「不用心」と「無用心」ではそれぞれの意味や用法に違いがあるはずである。しかし管見では、日常目にする先の語のほとんどは、そのような区別無しに使用されているように思われる。そこで本論文では、「不―」「無―」両表記を有する語に着目し、近代以降から現在に至るまでのそれらの語の表記や意味等を調査する。その調査を通して、表記や意味の変化を辿ると共に、日本人の言葉への意識の一端を探っていきたいと考えている。

## 第二章 接頭辞「不」「無」に

### 関する先行研究

#### 第一節 語頭に接続する「不」

##### 「無」の呼称について

まずは「不」や「無」等、語頭に接続し、否定やマイナスのイメージを付与する語を接頭辞と呼称することについて断りを入れておきたい。本来接頭辞とは、語基、すなわち単独で語を構成することもできる要素の前に接続してそれを意味づけるものである<sup>3)</sup>。しかし、「不作」や「無限」等、「不」や「無」以外の部分だけでは自立しない語と接続する場合が多々あるため、一概に接頭辞とは呼びがたい側面がある。しかしながら、浅学故それに代わってこれらの「不」「無」等を表現する適切な言葉が無かったため、今回は接頭辞と呼称することとした。

否定の意を表す接頭辞には、代表的なものとして「不」「無」「非」「未」「没」等がある。しかし、外来語を除き、それら否定の接頭辞が接続する語に関する研究の俎上に載せられるのは、専ら「不」と「無」の二つである。「不」と「無」が中心の研究が多い理由の一つとして、野村氏(1973)が

無と不は、結合形全体が属性概念を表わすのに用いられる度合いがほぼ等

しく、多くの語と結合する点で、似た機能を持っている。

と述べている<sup>[3]</sup>ように、「不」と「無」が接続する語に似た傾向が見られるためと思われる<sup>[3]</sup>。また、「不」と「無」にはそれぞれの音以外にも「ブ」という音が共通しているためであるとも考えられる。

## 第二節 接頭辞「不」「無」が

### 接続する語について

#### 第一項 接続する品詞について

接頭辞「不」「無」が接続する語の品詞に関する研究としては、野村氏(1973)やサトー氏ら(1982)、奥野氏(1985)、相原氏(1986)、吉村氏(1990)によるものがある。

野村氏は、昭和三十一年に発行された雑誌九十種及び昭和四十一年に発行された新聞三種から、語頭に「不・無・非・未」が接続する外来語や二字以上の漢語として用いられた語を抽出・分類している。分類の基準は以下の通りである<sup>[4]</sup>。尚、引用の際に具体例は省略した。

(1) ヽガ：ガを伴って主格に立ちうる

(2) ヽスル：スルを伴ってサ変動詞となりうる

(3) ヽナ：ナを伴って連体修飾格に立ちうる

(4) ノ：以上の(1)～(3)に該当せず、ノを伴って、性質や状態を規定する用法を持つ

(5) その他：以上の(1)～(4)に該当せず、結合系の部分としてしか用いられない

しかし、この分類基準は、明確に品詞別に区分されたものではない。従って、野村氏の結果が、接頭辞「不」「無」が接続する語の品詞の比率そのものであるとは一概には言えない。ただし、(1)を名詞、(2)を動詞、(3)を形容詞・形容動詞・副詞と捉えると、接頭辞「不」「無」が接続する語の傾向は知ることができる。以上のように考えると、野村氏の結果からは「不」は動詞や形容詞・形容動詞・副詞と接続しやすく、「無」は動詞や名詞と同程度に接続しやすいと言

うことができる。また、「無」が形容詞・形容動詞・副詞と接続しないことについては、野村氏の抽出条件の一つに

不または無で表記され「ブ」と読まれるもの

の除外が挙げられていることが関係すると思われる<sup>[5]</sup>。

サトー氏らは、『広辞苑』の第一版と第二版及び国立国語研究所による『電子

計算機による新聞の語彙調査』(1973)に見られる語を対象とし、語頭に「無・不・非・未」が接続する語を抽出し、語基を分類した。その結果、「不」は動詞と最も接続しやすく、それよりは少ないが名詞や形容詞・形容動詞・副詞とも接続することが分かった。また、「無」は圧倒的に名詞と接続しやすく、動詞や形容詞等と接続する例はごく少数に限られることも指摘された。この研究での「不」「無」両表記を有する語の分類条件に関しては、

「無」と「不」を共有しているものは辞書の説明によりいずれか一方に決定し、一語として集計

と定めている<sup>[10]</sup>。

奥野氏は、調査対象は明確ではないが、接頭辞「不・無・非」が接続する語の分類を試みている。その結果、「不」は動詞・形容詞・形容動詞と、「無」は名詞とそれぞれ接続している。更に言う、「不」は用言性を持つ語、「無」は体言性を持つ語と接続すると述べている。

しかし、これらの結果には一致を見ないところがある。特に「無」については、動詞や名詞と同程度に接続すると指摘する野村氏、圧倒的に名詞と接続しやすいと指摘するサトー氏ら、名詞を含む体言性を持つ語と接続すると指摘する奥野氏と、それぞれの結果の傾向が異なる

ことが分かる<sup>[11]</sup>。吉村氏は、この差の要因を、分析対象の範囲が異なることと品詞の認定方法が異なることの二点に求めた。特に品詞の認定方法については、次のように述べている。サトー氏らが品詞の認定方法を『広辞苑第二版』の第一義に従うとしていることについては

『広辞苑』(第二版補訂版)は、「語義がいくつか分れる場合には、原則として語源に近いものから列記」してある。したがって、第一語義をとるということは、語源をとるということである。同辞典によると、「無意識」の第一義は、「意識のないこと」、第二義は「そのことをしながら、自分のしていることに気づかない状態」、第三義は「……意識されることのない状態……」である。第一義では確かに体言ではあるが、第二、第三義では用言である。派生義とはいっても周辺のな用法ではない。これを無視してよいのだろうか。別の用法として体言・用言それぞれに分類することも考えらえたのであるまいか。

と疑問視する<sup>[12]</sup>。奥野氏の品詞の認定方法にも同様に、

奥野の場合は、結合語基に「スル・シナイ」という動詞性を認めれば「不」を使い、「ガアル・ナイ」という名詞性を認めれば「無」を使うと

言っている。(中略)前述したように、「無意識」の第二・第三義には動詞性が認められるではないか。

と述べている<sup>[9]</sup>。これらのことから、吉村氏は、「不」や「無」が接続する品詞については再考の余地があるとした。その上で、

これまでの分析の結果からはっきり言えることは、「無」は相言には結合しないということである

と結論付けた<sup>[10]</sup>。

また相原氏は、接辞「不」「無」「非」「未」がどのような系統の漢語に接続するのか分類・考察している。相原氏は、これら四つの接辞の働きを「概念性の否定」「存在性の否定」「行為性の否定」「事態性の否定」「価値性の否定」の五つに分類している。その結果、まず接辞「不」「無」は「存在性の否定」としての機能を有していると指摘する。特に「無」は、「無感覚、無声(音)、無線」等のように、存在の有無を指す場合に多く使われるという。次に「不」「無」は「行為性の否定」としての機能を有しているとしている。「行為性の否定」とは

その接辞と結合する語基や形態素の示す行為や動作が行われないことを示す

ものである<sup>[11]</sup>。この機能は「不安定、不一致、無遠慮」等が例に挙げられており、「不」「無」共に有するが、特に「不」に最も強く見られると述べている。更に、「不」「無」は「事態性の否定」としての機能があると指摘している。この例としては「不確実、不可能、無作法、無難、無所屬」等が例に挙げられている。ただし、直前に挙げた「無――」の語基に関しては

この語の多くはそのもとの語形がナ系の形容詞として機能するものであるが、中には「如意」「作法」「難」「神経」のような名詞性の語、「相応」「所屬」のような動詞性の語をもとにして形成されるものも含まれる。

と述べている<sup>[12]</sup>。最後に相原氏は、「不」「無」は「価値性の否定」としての機能を有すると指摘する。「価値性の否定」とは「事物の存在や行為そのものを否定するのではなく、そのものの形状が望ましいものではない、価値のある状況にない」という意味である<sup>[13]</sup>。この例としては「不運、不機嫌、無勢、無能」等を挙げている。これらのことから、「不」は「行為性の否定」としての機能が最も強く見られ、次点として「事態性の否定」や「存在性の否定」、「価値性の否定」の機能も有することが分かる。「無」は「存在性の否定」の機能が最も強く、「行為性の否定」や「事態性の否

定」、「価値性の否定」としての機能も見られる。相原氏の分類基準と既に述べた分類基準とを比較すると、「存在性の否定」の語基は名詞、「行為性の否定」は動詞、「事態性の否定」は形容詞・形容動詞・副詞が該当すると考えられる。ただし「無」の「事態性の否定」機能に関しては、相原氏が挙げる例の「無作法、無難、無所属、無神経」の語基はナ系形容詞ではなく、同用法の例として挙げられている「不確実、不可能」等の語基の性質と異なっている。以上のことから、接辞「不」は動詞と最も接続しやすく、次点で名詞、形容詞・形容動詞・副詞とも接続できると言える。一方、接辞

「無」は名詞と最も接続しやすく、動詞とも接続できる。ただし、「事態性の否定」、即ち形容詞・形容動詞・副詞と接続するということに関しては再考の余地があると言える。

以上の研究から、接頭辞「不」「無」が接続する語の品詞にはある程度の傾向が見られることが指摘される。

- (一) 接頭辞「不」は動詞と接続しやす  
い傾向にあり、それよりは少ない  
が形容詞・形容動詞・副詞や名詞  
とも接続することができる。
- (二) 接頭辞「無」は、名詞と接続する  
傾向が強いが、動詞とも接続でき  
る。
- (三) 接頭辞「無」は形容詞・形容動  
詞・副詞とは接続しない。

しかし、(一)及び(二)の結果については再考を要する。その理由の一つとして、例えば野村氏が調査対象を二字漢語のみ語基のみにしたのに対し、サトー氏らは一字漢語や和語も含む等、調査対象が同一ではないからである。また、「不」「無」両表記を有する語は調査対象外、もしくは現行の語義にそぐわない分類がなされていることも挙げられる。以上から、これらの結果は、現在の実態を如実に反映していると言いつてもいい。留意する必要があると思われる。

## 第二項 「不」「無」両表記を有する語について

既に述べたように、否定を表す語群の中には、「不様」と「無様」、「不器用」と「無器用」等、本来用法が異なるはずの「不」と「無」が同列に扱われ表記される語の一群が存在する。これら「不」「無」両表記を有する語については、須山氏(1974)や相原氏(1979)、高松氏(1982)がある。

須山氏は、「不」「無」両表記を有する語について次のように述べている<sup>[14]</sup>。

音の点からすれば、「無」「不」のいずれにも「ぶ」と仮名表記される音は

あり得る。それに加えるに「ぶ」という濁音が嫌悪感を催す意味を背負って「不」の変形として成り立つという事情も考えられる。

須山氏の研究からは、濁音「ブ」が嫌悪感等の心情を反映したことで「不」に「ブ」の音が加わった可能性があることが分かる。

相原氏は、『広辞苑第二版補訂版』、『辞苑』、『大言海』、『大日本国語辞典』、『日本国語大辞典』、『新表記辞典』の六書から、「不」「無」両表記を有する語の「不」と「無」の分類を試みている。その結果が以下のものである。<sup>[57]</sup>

- 「不」が優勢なもの：ブキョウ、ブキリョウ、ブショウ、ブセイ、ブショウ、ブチョウホウ、ブヨウジン
- 「無」が優勢なもの：ブアンナイ、ブサタ、ブサホウ、ブザマ、ブゼイ、ブサホウ
- 「無」と「不」とが拮抗するもの：ブスイ、ブフウリュウ

次に相原氏は、『日本国語大辞典』の出典を元に、これらの語の歴史的利用状況を調査している。その結果、「ブサホウ」、「ブザマ」、「ブスイ」、「ブヨウジン」

ンの四語を除き、古い用例には「無」が見られることから、本来の表記は「無」だった可能性が高いと指摘する。

高松氏は、「不」「無」両表記を有する語を題材に、「不」がどのような過程で「ブ」の音を持つようになったか研究している。まず、『史記抄』の中に「不道」と「無道」の二通りの表記が見られること等から、「不」の濁音発祥の時期を室町期後半と指摘する<sup>[58]</sup>。次に、「ブスキ」等の語や、従来「無(ブ)」と表記された語までが「不(ブ)」と表記されるようになった理由として、以下の三点を挙げている。一つは、接辞としての「不」と「無」の用法が曖昧になったことである。従来は「不」と「無」の用法は截然と区分されていた<sup>[59]</sup>が、学方や用字意識の低下によるものか、次第に単なる否定の接辞として認識されるようになったと述べている。二つ目は、

「ぶほうこう」を分析してみることに依って、その内部構造を確認することとする。即ち、「奉公」はこれを用言とすれば、「奉公せず」であり、体言とすれば「奉公なし―奉公するところなし」であるのが従来の規範である。それは、従って、それぞれに、「不奉公」、「無奉公」で表わされる。音は無論「フ」と「ブ」である。しかるに、その内包するところの意味は、恰も、日葡辞書の意味するが如く<sup>[60]</sup>で



あって、その境界線は常識的には甚だ曖昧模糊の感があるとしなければならぬ。そこで、それを押して行けば、極論として、「略々同じ」から「同じ」と思い込まれてしまうに至るはずなのである。さすれば、そこには、この両者の融合が生ずる。

と述べている<sup>[16]</sup>ように、「不」や「無」が接続する語基が、用言か体言か曖昧になったことである。その一因としては、和製漢語等の新語がさかんに作られたことが挙げられている<sup>[16]</sup>。三つ目は、「ブ」という音が想起させる否定の感情が強調されていたことである。高松氏は、遠藤邦基氏の言葉を借り、この意識を「濁音減価」と呼称する。

次は、「不(ブ)ー」、「無(ブ)ー」、「不ー」「無ー」両表記を有する語について語種の観点から考察している丹保健・倪永明両氏(2000)の研究を見ていく。両氏は、『大漢和辞典』『漢語大詞典』をもとに、「不(ブ)ー」、「無(ブ)ー」、「不ー」「無ー」両表記を有する語を「中国語とほぼ同じ語形、意味を持っているもの」、「中国語と意味が異なるもの」、「中国語に語形が見当たらないもの」の三種類に分類している。その結果の一部が次の引用である<sup>[21]</sup>。

(2) 「不(ブ)ー」の語形を持つ語は

(一語を除いて)総て混交漢語ま

たは和製漢語であり、純粹漢語は見られない。

(中略)

(4)(中略)「無(ブ)ー」が必ずしもマイナスイメージを持つとは限らないのに対し、「不(ブ)ー」

の全てがマイナスイメージを持つ(調査の範囲ではあるが)

以上のことから、「不ー」「無ー」両表記を有する語は、少なくとも室町期までは「無ー」で表記されることが一般的であったと考えられる。それが次第に、語数の増加・語義の複雑化・漢字意識の希薄化等によって、本来「不」が接続し得ない語も「不(ブ)ー」と表記されるようになった。そして、「減価意識」による語頭「フ」の濁音化のために「不(フ)ー」も「ブー」と読まれるようになり、「不(ブ)ー」「無(ブ)ー」両表記が存在したまま現在に至っているという可能性が指摘できる。

### 第三項 「不ー」「無ー」両表記を

#### 有する語の語基について

次に「不ー」「無ー」両表記を許容する語の語基について、その語種の特徴から見ていく。このことに関しては、前節と同じ高松氏が言及している。

高松氏は、「不」「無」両表記を有する語の語基について次のように述べている<sup>[22]</sup>。

これ(引用者注:接辞「無」と同じものとして扱われるようになった「ブ」音の「不」)が用いられるのは、主として、和語及至準和語と称すべきものに限られる(中略)云うなれば、その語が和製(和用法)の語と認められるものである。(中略)従って、近世になって、その以前の「無」が、「不」と二重表記になるものは、当然、これに類するもののみである。

このことから、「不」「無」両表記を有する語の語基には、和語もしくは和製漢語が多いことが指摘できる。しかし、語基が純粋な漢語である場合も見られる。高松氏はその例として、『大漢和辞典』をもとに「器量」、「器用」、「調法」の三つを挙げている。これらはそれぞれ、「ブキリョウ」、「ブキョウ」、「ブチョウホウ」の語基である。

そこで、純粋漢語である「器用」、「器量」に関する研究を見る。来田氏(2000)は、鎌倉時代までの「器量」には、

①「その地位や役割を全うすることができるかどうかという観点からみた、能力・力量」または「それを持つているもの、あるいは、それがすぐれているさま」

②「その方面でのすぐれた能力や技能(を持つているもの)」

③「内にもっているすぐれた能力のあらわれとしての外貌」

の三つの意味があったと指摘する<sup>[23]</sup>。それに対し、「器用」は「器量」とほぼ同義ではあったが、使用数は非常に少なかったとする。しかし室町時代には様相が逆転し、「器用」が多用されるようになり、「器量」はその意味を保持しつつも使用数が激減するようになったと述べられている。その背景としては、「器量」が文語的性格を帯びるようになったことに加え、③「外貌」としての意味が強くなったこと等が挙げられている。極少数ながら「器用」には「器量」③の意も見られるが、その意味は定着せず、主に「器量」①②の意味として用いられ、意味を拡大しながら現在にまで至っているとされる。また文法的側面から見ると、「器量」及び「器用」は共に名詞として用いられるか、「器量」もしくは「器用」+「十人」という用法のみだったという。しかし「器用」に関しては、

形容動詞化して《その地位や役割を全うするにふさわしい、すぐれた能力を持つているさまである》の意で盛んに用いられている。

とあるように、用法の拡大もまた見られたようである<sup>[24]</sup>。以上のように、鎌倉時

代までは「器量」が主に用いられ、「器用」は「器量」と用法は同じものの使用数は少なかった。しかし、室町時代には「器用」が多用されるようになり、その意味・用法が拡大し続けてきたことが分かる。一方の「器量」は、かつての意味を保持するものの、やや文語的なものとして扱われるようになったということが分かる。

### 第三節 先行研究総括

これまで見てきたように、接辞「不」は動詞を始め、様々な品詞と接続することが分かった。一方、接辞「無」は名詞と接続する傾向にあるが、動詞とも接続することができる。

その中であって、「不」「無」「無」両表記を有する語の語基は、一部を除き和製漢語ないし和語であるとされている。そのため、その否定語も漢語に見られない、もしくは本来の用法と異なるものが大半である。純粋な漢語であるはずの「器用」や「器量」でさえも、その意味・用法が拡大し現在に至っていると指摘されている。

また、例えば「ブキヨウ」という語について見ると、この語は「器用さがない」のか「器用ではない」のか曖昧である。むしろどちらでもよいとさえ言える。このように、語基が用言性を持つ

か体言性を持つのかということが重要でない場合がある。

さらに、「ブ」の語には否定的な意味が強いものが多い。これは、否定に関する感情を濁音に託す意識によるものであると言われる。

つまり、「キレイ」を否定したい場合を例に考えると次のようになる。「キレイ」の否定形を表記する際には、まずその解釈が「キレイでない」であるか「キレイさがない」であるか判断としない。

それに加え、接頭辞の「不」と「無」の違いにそれ程差を感じないため、単に否定の接頭辞としてそのどちらもが候補に挙がる。それでもしばらくの間は「不綺麗」を「ブキレイ」、「無綺麗」を「ブキレイ」と読んでいたが、否定的な意識が語頭を「ブ」と意識させることが増えてくる。結果、「不綺麗」、「無綺麗」のいずれも「ブキレイ」と読まれるようになった。「キレイ」の語自体がこのような経緯を経て「ブキレイ」になったかはその定かではないが、先行研究に従えばこのような過程になると思われる。

先行研究からは、これらの条件が重なった結果、「不」に「ブ」の音を根付かせ、用法の差が曖昧な「無(ブ)」と混乱し、「不」「無」両表記を有する語が誕生したということが言える。

### 第三章 新聞における「ブキヨウ」

#### 「ブキリョウ」について

本章では、明治時代以降に刊行された読売新聞社及び朝日新聞社二社の新聞における「ブキヨウ」及び「ブキリョウ」の二つの語について、その表記や用法を調査していく。

前章で述べた通り、「不」「無」両表記を有する語を「不」または「無」がある語に接続しているという構造でとらえたとき、その語基の語種は和製漢語や和語が大半だと言われている。極一部の例外としては、「器用」、「器量」、「調法」が挙げられている。和製漢語でないにも関わらず「不」「無」両表記があるということ、語義の広さによって品詞性が曖昧になったことや、濁音による意識の変化等の影響を強く受けていると考えられる。

「ブキヨウ」と「ブキリョウ」を調査対象とする理由の一つには、「ブキヨウ」及び「ブキリョウ」の語基が、漢語由来であるという点で特殊な存在と考えられるためである。また、「器用」と「器量」は歴史的に語義の交代が見られ、関連性の強い語であると考えられることも挙げられる。漢語としても存在する語基には他に「調法」があるが、今回はこうした、関連性のある二つの語に注目していく。

調査資料を新聞とすることに關して

は、ほぼ毎日発行されるため数量が膨大にあること、テレビやインターネット等のメディアが登場する前は特に情報を入力する手段として重宝された実績があり多くの人の目に触れてきたと考えられること、そのため字や語句の用法についてある程度の規範意識を持っていると考えられること等を鑑みたためである。

#### 第一節 調査方法

次節からは、1884年(明治七年)以降の新聞記事を公開している読売新聞社の「ヨミダス歴史館」、及び1879年(明治十一年)以降の新聞記事を公開している朝日新聞社の「聞蔵Ⅱビジュアル」を使用し、両新聞社それぞれのデータベース検索機能を用いて該当した記事と、該当した記事以外でも該当記事から使用が見られる記事<sup>[25]</sup>から「ブキヨウ」「ブキリョウ」の使用例を抽出し、その表記や意味・用法を調査していく。

引用の際の凡例は以下の通りである。

- 一、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、旧字体は新字体に直した。
- 二、「ブキヨウ」、「ブキリョウ」の使用部分は、**太字と傍線**で強調した。
- 三、記事の要旨という特性上、特殊な表現である可能性等を考慮し、特に見出しでの「ブキヨウ」、「ブキ

リョウ」の使用には「(見出し)」と注を付した。

四、本論文中で言及している場合を除き、引用の最後に記事の年月日を記した。

五、引用中の「(中略)」は全て引用者によるものである。

六、記事内の人物を本論文内で呼称する際、敬称は省略した。

## 第二節 読売新聞

読売新聞社の提供している「ヨミダス歴史館」では、創刊号から現代までの新聞記事の検索・閲覧が可能である<sup>[26]</sup>。本節では、1874年から1989年までの記事を観覧できる「明治・大正・昭和版」と、1986年から現在までの記事を観覧できる「平成版」の二つのカテゴリを使用する。

### 第一項 「ブキョウ」の表記について

「明治・大正・昭和版」のカテゴリでは、「不器用」で検索したところ百九件、「無器用」で検索したところ九件の記事が該当した。加えて、検索結果には該当しなかったものの「ブキョウ」の使用が見られた記事が二件確認された。一

件目は、1875年十一月三十日の記事に

「一昨日の投書の中に「無器用」と仮名ぶきょうをふつたのは校合の間ちがい」とあるこ

とから、同年同月二十八日の記事を確認

したところ、「何もあてなきぶ働無器用

の中にも」とあり、該当した結果の二日

前の記事で確認されたものである。また

同じく、検索結果以外の1975年十一月

十二日の記事でも「不器用」が確認され

たため、これら二件を加える。一方、

「不器用」の検索結果において、検索結

果には挙げたが記事本文での使用が確

認できなかった例が五件見られた。ま

た、「不器用」の検索結果に該当したも

のの本文では「無器用」や「ぶきよ

う」、「ぶきつちよう」で表記している

記事や、「不器用」と「無器用」のどち

らの検索結果とも重複する記事等も見ら

れた。以上を総合すると、読売新聞の

「明治・大正・昭和版」では、「不器

用」が九十三件、「無器用」が二十一件

見られるということになる。これらの検

索結果をもとに、本項では「ブキョウ」

の表記を、次項では「ブキョウ」の意味

を検証していく。

「ブキヨウ」の使用が見られる中で最も古い記事は

何もあてなきぶ働**無器用**の中にも恥をかく罰当たります金づかい色で張りしも不了簡

(1875年十一月二十八日)

という記事であり、その後「無器用」の使用が数件続く。

一昨日の投書の中に「**無器用**」と仮

名をふつたのは校合の間ちがい

**無器用**」で有ろうと外より申されまし

た揃いも揃って**無器用**ゆえつい心づきませんで

(1875年十一月三十日)

生来の赤い毛や白髪ですら薬を用いると彼の通りだから人も生れつき愚だの**無器用**だのといってヒを投ずに何でも身の薬という薬を服したなら

(1876年二月十七日)

しかし、それ以降から1960年頃までは、基本的に「不器用」表記が多く使用されるようになる。以下には「不器用」の使用が見られるうちの一部を引用する。

靴形職を習いに行つて居るうち**不器用**だとして寅吉に厳しく叱られたのを遺恨に思い寅吉の家と其隣りの家へ火を付けた科で

(1880年一月二十八日)

先ごろハンケチ縫の役に就きし**不器用**なるのみならず黴毒が発して眼病となり

(1889年二月十四日)

米国の外交は**不器用**なり恰も熊が巨大なる掌を以て敵に一撃を与えもし甘く成功せざる時は

(1910年一月十三日)

政府の商売は**不器用**さ(見出し)

政府の商売は商人と違つて眼から鼻へ抜ける様では困る何処までも**不器用**のことさ

(1921年四月二十七日)

手先が**不器用**な兒でも工業家になれるか

(1933年四月十八日・見出し)

**不器用**な指揮棒(見出し)

はつきりいうと、近衛の世渡りない

しは政治は、彼のバトンを持つ手と  
同様ななだ**不器用**である

(1950年十二月十一日)

僕は一つの作品を書くことによって  
蘇ったのである 「**無器用な天使**」が  
それだ

(1929年一月二十六日)

**不器用**さについては六代目も生存中  
『お前にはおれの真似は出来ねえ』と言  
い切っていた。

(1953年六月四日)

ここで、「不器用」表記が優勢になって  
から1960年までに「無器用」が使用さ  
れた三件の記事について見てみる。一件  
目は、1900年一月十二日の「**無器用医**  
学」を見出しとする記事である。しか  
し、見出しでは「無器用」が使用されて  
いるのに対し、

いや是は大変我れ元来**不器用**にて碁  
将棋は更なり花トランプをも知らず

と、一つの記事で「無器用」と「不器  
用」が併用されている。二件目は

匂いのふんとする安い粉煙草をくゆ  
らしながら徒弟の**無器用**な手もとを打  
成っていたが

(1926年六月十一日)

という記事で、加藤武雄の連載小説「彼  
女の貞操」を掲載したものである。三件  
目は、

という記事で使用されている。この記事  
は作家の堀辰雄を取材した記事であり、  
「無器用な天使」とは1929年に彼が発  
表した作品である<sup>[27]</sup>。このように、1960  
年までは「不器用」が一般的であり、  
「無器用」が使用される場合は表記に統  
一性が見られない記事の場合か、新聞社  
外の人物の用字意識によるものであると  
言える。

しかし、1960年に入ると「無器用」が  
優勢になる。以下に一部を引用する。

**無器用**な私を勇気づけた夫(見出し)  
この通りすべて**無器用**で、はたがじ  
れつたくてつい手代わりしてくれ、  
(中略)ますます**無器用**が高じてくる。  
(中略)生来どんなに**無器用**でも周囲の  
もっていきようで

(1960年四月六日)

**無器用**でも一級品(見出し)  
“ボクは**無器用**な俳優だ”というの  
が口ぐせだが

(1964年七月二十五日)

**無器用**な人たち(見出し)

フランス人は、何事でもかなり無器

(1969年五月一日)

用な人種なのではないか。(中略)いい  
オトナが**無器用**に鉄のタマをころがし  
ているのを見ると、(中略)**無器用**さこ  
そ、フランスの文化をささえてきたバ  
ックボーンなのかもしれない。いいか  
えれば、この**無器用**さのためにこそ、  
フランスはいつでも

(1965年三月十二日)

“天才？僕は**無器用**”(見出し)

ぼくは**無器用**ですよ。

(1967年十一月九日)

**無器用**な男の子を鍛えすぎる夫

(1968年八月一日・見出し)

動作がにぶくて**無器用**な子……など  
動作がのろいというのは、二つの原因  
による。一つは、手先や身のこなしが  
**無器用**なこと。(中略)**無器用**なことが  
原因なら、これは練習をすればある程  
度まで

(1968年十二月十九日)

**無器用**にも、それなりの味

(見出し)

手先の器用、**無器用**に関係ないこと  
です

**無器用** 運動がにがて(見出し)

動作がのろい。よくころぶ。手先が  
**無器用**。(中略)遊びを抑えてばかりい  
れば、いきおい子どもは**無器用**にな  
り、からだのうごきもにぶくなりま  
す。(中略)子どもがハシを使えないの  
は当然で、それをもって**無器用**とい  
うのは

(1971年八月十八日)

“**無器用**打者”とは呼ばせない

(見出し)

もう**無器用**な打者というイメージは

(1972年四月二十八日)

この「無器用」の優勢は1972年頃まで  
続く。「無器用」表記が優勢になってい  
る間に「不器用」が使用されたのは、  
農民をつかまえて詳細に実情をき  
き、ロシア的な**不器用**な冗談をとば  
す。日本の「母なる大地」への敬意だ  
ろう。

(1966年五月二十八日)

超短波は、すぐお隣の波長域である

短波にくらべるときわめて“**不器用**”  
である。



(1967年六月二十二日)

軽妙さやクスグリが不得手らしい上月は、いい意味で**不器用**な大型歌手であることが、二部にはいるとよくわかった。

(1971年四月八日)

これら三件のみである。この三件は、いずれも「**不器用**」が優勢の時期に「**無器用**」が使用されていた場合と異なり、小説等社外の人間による記事ではなく新聞社内の人間が書いた記事に見られる。

このように、読売新聞では創刊以降、「**無器用**」と「**不器用**」が優劣関係を逆転させ合いながら1972年頃にまじりつつている。ところが、1972年頃を境に「**不器用**」が優勢になり、それ以降「**ブキヨウ**」表記は「**不器用**」に統一される流れが見え始める。

**お互い**不器用**で先述のどれ一つ満足にこなす事も出来ず、「大変だなア」の一言。**

(1972年九月二十六日)

私、料理がぜんぜんだめなんです。それに**不器用**で。

(1974年二月十一日)

手先の**不器用**さ(見出し)

大人たちの導き方で、**不器用**な子供ばかりにはならないと思います。

(1974年五月二十三日)

案外“**不器用**”なレンジ あたため

直しが一番得意

(1974年六月二十七日・見出し)

**不器用**でも自分に正直に(見出し)

**不器用**でも自分に正直にやっています

(1975年八月十一日)

**不器用**な現代っ子の手先の訓練によ

い遊び

(1977年十二月三十一日)

そして、この統一の流れが見られて以降、「**無器用**」が使用されるのはごく少数の記事に限られる。「明治・大正・昭和版」で1972年以降に「**無器用**」表記が見られるのは

**無器用**な私にはこれが結構合っている

(1975年三月十三日)

「ぶきよう」は「器用でない」(不器用)とも「器用さがない」(無器用)ともとれるから

(1975年十二月二十二日)

世の中が便利になればなるほど、**不器用**になっていく点がいっぱいあるのではないだろうか。

(1983年九月八日)

の二件のみである。一件目は読者による投書の一文である。二件目は、当用漢字音訓表の改定を受け、「ブキョウ」等「不―」「無―」両表記を有する語が辞書や新聞でどのように表記されるようになったかについて書かれた記事である。「明治・大正・昭和版」では、これ以降は「不器用」表記のみが見られる。以下に一部を引用する。

醜く**不器用**で友達できない

(1979年二月十八日・見出し)

「元来**不器用**な方ですから演技派とは程遠いけど、私の映画に対する姿勢が評価されたと思うと、とってもうれしいですね」

(1985年二月二十五日)

彼のもって生まれた**不器用**さが彼を救った。**不器用**さは誠実の表れで、誠実さのない**不器用**など意味をなさぬものである。

(1980年九月二十四日)

**不器用**、ウソよ

(1986年五月九日・見出し)

「器用」「**不器用**」はまさに十人十色だが、「現代っ子の**不器用**ぶり」は、やはり少々重症のようである。

(1982年三月三日)

選手として、監督として、かれは「偉大な**不器用**」であった。

(1988年十月四日)

**不器用**でドジな役

(1987年二月七日・見出し)

十年過ぎたところから、その**不器用**な姿が小津監督の目に止まった。

(1989年十二月十七日)

次に、「平成版」での「ブキョウ」表記について確認する。「平成版」で検索した結果、「不器用」の使用数は2870件(2016年十二月十五日現在)、「無器用」の使用は四十三件(2016年十二月十五日現在)該当した。現在の読売新聞においては「不器用」表記が一般的となつていると言える。以下に一部を引用する。

何事につけ、ぶつかったうえじゃな  
いとわからない**不器用**者なんですね。

(1987年一月十八日)

内田は、一発に頼る、どちらかとい  
えば**不器用**なファイター。

(1988年七月十日)

変化球をうまく使い、少ない球数で  
投げぬいた仲田に比べ、桑田の投球は  
単調で、**不器用**にも見えた。

(1992年五月七日)

当時、学内には留年した団塊の世代  
の先輩たちがいて、社会のルールに乗  
れず**不器用**に生きていた。

(1993年七月十七日)

子供たちは明らかに**不器用**になって  
おり、また完成できないと「不良品  
だ」とねじこむ親も増えているとい  
うことだった。

(1997年九月十一日)

人間関係のつくり方が**不器用**な私  
は、これまで社会とも人間とも、ごく  
ごく薄くつき合ってきた。

(2000年六月十三日)

武蔵の**不器用**な生きざまは、まさに  
バガボンドであり、見方によってはバ  
カボンドだ。

(2003年四月十五日)

**不器用**だから、たくさんのことはで  
きない。どれもこれも中途半端になる  
のなら、将来も続けられる仕事に専念  
しようって思ったんです

(2005年八月十二日)

結婚後、妻の**不器用**さに驚いた夫は  
「謙遜(けんそん)じゃなかったの  
か」と言う。

(2006年七月十一日)

「人の思いに愚直に応えようとする。**不器用**なんです」と母は言う。

(2008年四月十五日)

要領のいい姉に比べ、私は**不器用**で、子供の頃はいつも損な役回りだった。

(2009年八月九日)

日の当たらない場所で生きる男の役は「性に合っている」という。『**不器用**』っていうと格好いい感じがして恥ずかしいけど、自分と重なるのかもしれない」

(2011年六月三日)

リーグ通算21勝を誇る右腕は「自分はいい投手ではない」が口癖。「試合中に投げ方がわからなくなる」ほど**不器用**でもある。

(2016年九月十八日)

最後に、「平成版」で「無器用」が使用されている記事について確認する。しかしながら「平成版」で「無器用」が使用されている記事を実際に閲覧できるのは、四十三件の内、以下の十二件のみである。「平成版」の「無器用」は、寄稿

や川柳・俳句、作文等、新聞社外の人物の識字意識によるものに多く見られる。

そう言えば、多少**無器用**でも、神秘的なカリスマ性を漂わせるあたり、原節子を思わせないでもない

(1987年一月七日)

日本の若手とは対照的な**無器用**な棒さばきから、かえって音楽の真実が浮かび上がったともいえる。

(1998年八月三日)

前者の記事は女優の鷺尾いさ子からの寄稿であり、後者の記事は音楽評論家の松本勝男からの寄稿である。

**無器用**を 看板にして 楽に生き  
(2002年三月十日)

**無器用**に 生きて寒夜の 月仰ぐ  
(2003年一月二十九日)

これらの用例も、前者は川柳、後者は俳句としてそれぞれ読者から寄せられたものを掲載した記事に見られる。

**無器用**な私にとっては 一大決心だった

(1998年十二月二日)

これは、小・中学校作文コンクールの文部大臣奨励賞作品を掲載したものである。「無器用」表記は、本の発売を宣伝したり内容を紹介したりする広告欄・書評欄にも多く見られる。

**無器用**を武器にしよう 田原総一郎  
(1994年二月十九日)

この「無器用」は、「週間ベストセラ―」という広告欄に掲載された本の題名の一部である。

花田俊典氏（九州大大学院教授）が言うように、近代という（時代の桎梏を超えることができず）、ただ、自らに誠実に、〈身命をかけて**無器用**に〉生きるしかなかった者が放つ魅力に、葦平もまたひかれたのだろう。  
(2003年十二月九日)

この用例は、作家の火野葦平が新聞に連載した小説を収めた『中津隊 増田宋太郎伝記』という本が刊行されたことを告知する記事である。この記事自体を書いたのは読売新聞社の記者と思われるが、〈内にある「無器用」は、論考からの引用である。〉

**無器用**で、いわゆるうまい短編ではけっしてないのだが  
(2004年九月十二日)

人生の起点から無産、無資格、**無器用**といているから  
(2011年二月十三日)

これら二つも本の紹介・批評文の一部である。前者は東海大学の教授によるものであり、後者は東京大学の教授が書いたものである。また、後者については「無産、無資格、無器用」と、「無」が語頭に來る語の一つとして「無器用」と表記したとも考えられる。また、後者の書評に見られた表記と似たものとして

「無作法・**無器用**・無教養」の三重苦と自嘲（じちょう）しつつ、二年にわたってけいこに励んだてんまつを、とつつきやすい入門書にまとめた。  
(1997年十月二十六日)

というものがある。この用例でも、「無作法・無器用・無教養」と、「無―」表記で統一しようとした意図が伺える。次の用例は、この用例は、「本よみうり堂」という書評欄に見られる。

人間臭さや**無器用**な女性関係に共感する著者。題材となったコント以上に、かつて大きな影響力を誇った戦後派知識人である清水幾太郎を知る意味でも好適の書。  
(2014年八月二十四日)

「本よみうり堂」は、各界の読書人に読書委員、書評委員を委嘱し、日曜日に署名原稿として掲載するという仕組みである<sup>[8]</sup>。ため、新聞社外の人物が書いた書評の可能性が高い。次の用例は、国際識字年である1990年の一年間に読売新聞社が行った活動を報告する記事の中に見られる。ただし例外的に、この記事は読売新聞社の記者が書いたものである。

中国人にとって、国際識字年は新しい角度から「文化を振興し、無器用者（非識字者）は恥」とする希望をもたらしてくれた。

(1990年十二月二十二日)

これらのことから、一つの例外を除いて、「平成版」で見られた「無器用」は、社外の人物の用字意識による記事で見られた。この例外が生じた理由は不明だが、校閲の際の見落としによるもの等が考えられる。

以上見てきたように、読売新聞では1972年九月二十六日の記事以降、「ブキヨウ」の表記は基本的に「不器用」で統一されていると言うことができる。また、「無器用」で表記されている記事は、基本的に新聞社外の人物の用字意識が反映されていると思われる。

## 第二項「ブキヨウ」の意味・用法について

読売新聞の記事に見られる「ブキヨウ」は、大きく二つの意味に分けることができる。まずは「明治・大正・昭和版」での用例から検証していく。

「ブキヨウ」の用例を俯瞰すると、まず否定的な意味が多く見られるように思われる。そこで、「ブキヨウ」の否定的な意味を「ブキヨウ(一)」と仮称する。この「ブキヨウ(一)」は、文脈によって三つの用法に分類することができる。

「ブキヨウ(一)」の一つ目の用法は、ある人物や事物の多芸でない、要領がよくないという気質・性質を指すものである。この用法は、古くは1876年三月十七日の記事に見られる。

生来の赤い毛や白髪ですら薬を用いると彼の通りだから人も生れつき愚だの無器用だのといってヒを投ずに何でも身の薬という薬を服したなら(中略)かもしよりも末長く世の中で珍重されましよう

この記事は、読者からの投書を掲載したものである。投稿者によると、知人女性に、白髪染粉を使って髪に艶を出したように、生まれつきの「ブキヨウ」を諦めずに色々と試せば事態は好転するという。この「ブキヨウ」とは、「生れつき」の

ものであり、「愚」と同列のものであることから、「愚」と似た性格や気質のことであると云える。次は、ある少年が奉公に出されたものの、仕事が上手くできず奉公先の主人に叱られる毎日を通り越すうち、そのことを苦に川へ身を投げてしまふという事件の記事である。

内田新太郎の方へ奉公に行ったが**不器用**な生れゆえ職業も碌に出来ぬので毎日新太郎に叱られるを辛い事と思つて居ると

(1879年五月三日)

この記事からは、「ブキヨウ」な生まれのために仕事の技術の上達が芳しくなかったことが分かる。つまり、生まれつきの「ブキヨウ」は仕事の技術の上達に悪く作用するものだと言える。よつて、この記事の「不器用な生まれ」とは、物覚えが悪い、要領がよくない気質を指すものであると考えることができる。同様の事件としては他に

少し鈍な性質にて(中略)至つて情が強く人のいう事を更に用いぬゆえ両親も持て余して居た処(中略)遠慮も無く小言をいふとお吉は直ぐに顔を腫らしどうせ私は**不器用**ですと云いさま(中略)

二丁目の河岸へ新造の死骸が流れ寄たとおとといの新聞に記して有るのがどうやらお吉らしいゆえ

(1882年十月二十九日)

十三歳の時七年の年期にて同家へ雇われしが朋輩が皆一人前の職工となりしに自分は生来の**不器用**にて仕事か思う様に上達せぬを恥じ寧ろ自殺せんと

(1911年九月二十八日)

等がある。いずれの事件でも、持つて生まれた「ブキヨウ」な気質のために叱られたり仲間に遅れをとつたりする内に、将来に希望が持てなくなり自殺に及んでいる。時代が下るとこういった事件は見られなくなるが、「ブキヨウ」には依然としてこの用法が見られ続ける。

来春三日を期し大加留多会を開くと檄(中略)いや是は大変我れ元来**不器用**にて碁将棋は更なり花トランプをも知らずましてや歌加留多などの通を知る由もなし(中略)大晦日の夜は借金取る来るよりも苦おしく打萎れおりけり(中略)私は読手を致しようとか拔かずいふ(中略)読出す、えくと何だ、……めぐり、あい、てみ、しようれ、くとも、分らぬ、分らぬ間に――席にある男女は一同思わずどつと笑う

(1900年一月十二日)

この物語は、ある医者が良家の催すカルタ大会に招待される話である。医者は、元来「ブキヨウ」だからとカルタ大会への出席に気乗りせずでしたが、妻の助言

に従い、当日は読み手として参加する。しかし、読み方があまりにも覚束ないため、結局周囲から笑われてしまう。ここでの「ブキヨウ」も、「元来」とあることから、カルタの読み方そのものに対応してではなく、慣れないことに全く対応できない医者の性格を表していると言えらる。次の用例は、米穀法の実施が延期し続けていることを批判した記事である。記事には、延期の原因として「今二十七日の枢密院会議で可決されても御裁可を経なければならぬ」、「倉庫は大体の調査は終わっているが、未だ借入契約は締結していない」等が挙げられている。当時の農商務省大臣は、取材に対し、

政府の商売は商人と違って眼から鼻へ抜ける様では困る何処までも不器用のことさ

(1921年四月二十七日)

と答えている。これは、「眼から鼻へ抜ける」、つまり迅速かつ的確な商人達と違い、政府とは、煩雑な手続きや業務の遅延とは切り離せない体質であるということを述べているのである。この用例の「ブキヨウ」も、そうした小回りの利かない体質を指していると言ふことができる。次は、二つの電波の性能を比較した記事である。

超短波は、すぐお隣の波長域である短波にくらべるときわめて“不器用”

である。(中略)短波のような“小まわり”は到底期待できない

(1967年六月二十二日)

記事によると、短波というものは上空の電離層で反射し、「“身をくねらせ”て”発信地点より遙か遠くの地上に戻ってくるため、日本と欧米諸国との通信に重宝している。一方、超短波は電離層をつきぬけてしまうため、従来は用途が限定的だと言われてきたという。つまり短波に比べて超短波が「ブキヨウ」と言われるのは、電離層で反射できない、即ち小回りの利かない性質だからであると言える。次の用例は、従来までと違った役柄に抜擢された女優、沢口靖子に取材したものである。

眼鏡ばかりか、今回はボサボサの髪、化粧もせいぜい口紅程度。機能的な服とサンダルで飛び回る、自然体の女性を演じる(中略)「ドジで不器用なところは地の私に似ているし、キレイキレイじゃない素顔っぽさが出せれば」と大張り切り。

(1987年二月七日)

この「ブキヨウ」は、「自然体」や「ドジ」と同列であることから、登場人物の「ドジ」と似た役柄を指しているものであると言える。これらの用例から、「ブキヨウ」には、ある人物や事物の「愚鈍な、多芸でない、要領がよくない」等の



気質・性質を指す用法があると言うことができる。この用法を「ブキョウ(一)―①」と呼ぶこととする。この用法は、

“ボクは**無器用**な俳優だ”というのが口ぐせだが「だから、かけもちができません。

(1964年七月二十五日)

天才だなんて……。いやですね。それじゃあ、涙も流さない、努力もしない人間みたいで。(中略)ぼくは**無器用**ですよ。一つことをやるのにも、人の倍くらいかかっちゃう。(中略)シリたたかれて練習して、打てるようになって

(1967年十一月九日)

**無器用**な男の子を鍛えすぎる夫

(見出し)

一つ違いの弟は器用なせいか、兄よりもじょうずにやります。兄の方はベそをかきながら、ふらふらになるまでやらされています。

(1968年八月一日)

**お互い不器用**で先述のどれ一つ満足にこなす事も出来ず、「大変だなア」の一言。

(1972年九月二十六日)

わたくしはよほど勘がわるいとみえて、(中略)車を止めようとして、クラッチを踏まずにブレーキだけ踏んでエンジンストを起こしたときには、(中略)自分の**不器用**さがいやになり

(1977年十二月十六日)

控室でもしきりに両手こぶしを振り回して悔しさを表現する(中略)ボクサーの中でもひとときわ神経質な男である。(中略)「ぼくは、本当は**不器用**な男です。もつと攻め方を研究して、次はいい試合で勝ちたい。」

(1978年一月三十日)

**醜く不器用**で友達できない(見出し)

私は醜く、**不器用**で無知な女性。うまく人と話もできません。

(中略)

人生を少しは楽しみたいと思いますので、クラブに加入しました。それでも、いつも一人でポツンと壁を背にして座っているだけ。

(1979年二月十八日)

七階から飛び降り自殺をはかってみたり、ケンカして警察に留置されたり(中略)「無謀で大胆」だそうだが、そ

の実、生きるのに**不器用**なナイーブな女なのである。(中略)自分自身、血で歌っているようなところがありますね

(1980年十二月二日)

等の記事にも見られる。

続いて、「ブキヨウ(一)―①」以外の用法について検証する。

日本人の苗代はきれいに短冊形にできているが、朝鮮人のはいかにも**不器用**にきたならしく、馬糞形とも謂うようになつていた。これだから、朝鮮人のは実収が三分の一にもならないとい

う。

(1913年六月十日)

この記事は、当時の朝鮮の都の一つである開城の様子や、そこへの移民の暮らしを報じたものである。記事では、日本人と朝鮮人がそれぞれ作った苗代の形が対称的に描かれている。日本人の苗代が「きれい」であるのに対し朝鮮人の苗代は「不器用にきなたらし」ということから、この「ブキヨウ」は、「きたならし」い出来になるような作り方を指していると言える。次の用例は、六代目菊五郎の息子である歌舞伎役者の尾上九朗右衛門について書かれた記事である。

**不器用**さについては六代目も生存中

『お前にはおれの真似は出来ねえ』と  
言い切っていた。

(1953年六月四日)

そこでこの「ブキヨウ」に関する記述を探すと、九朗右衛門は「大根」だの“頭デッカチ”だの」と評判の役者であるという記述が見られる。「大根」とは、芸の下手な役者のことを指すものである。また「頭デッカチ」も、理屈ばかりで実力が伴っていない様を言うものである。これらの評判から、この「ブキヨウ」は、演技が下手である様を指していると言ふことができる。次の「ブキヨウ」の用例は、投書の中に見られる。

小学校二年の孫の女の子が(中略)鉛筆を削るときはナイフを使うように言われ(中略)その使い方が**不器用**で、指を切るのでは、とはらはらしていたが

(1978年十二月九日)

見る者を「はらはら」させるナイフの使い方とは、手や指を切りかねない使い方が考えられる。つまり「使い方が「ブキヨウ」とは、ナイフの使い方が下手であるということを表していると言える。次の用例は、読者からの相談及び相談への返答を掲載したものである。相談者は、定年を迎えた自身の父について次のように述べている。

小柄な母が家事や育児に汗水たらして必死に頑張っているのに父はそしらぬ顔。それでいて、急に「子育てはこ

うあるべきだ」などととんちんかんかな注文を出すなど、要するに母との生活というもののリズムがつかめないらしいのです。

(1982年四月十二日)

そして、その相談に対し回答者は

あいかわらず定年後も**不器用**に生きる日本男子の一つの典型(中略)タテマエをふりかざして周囲を疲れさせたりするのです。

(1982年四月十二日)

と返答している。この回答者の言う「不器用に生き」るとは、家事の手伝いをしない、育児に対外的外れな持論を展開する、外聞の良い一般論で周囲を疲れさせる等といった行為を指している。これらの行為は、良し悪しの観点で言えば悪いものであると言える。しかし「母との生活というもののリズムがつかめないらしい」等の表現から、相談者の父親は悪意でこれらの言動をしているわけではないと考えられる。ただし、人付き合いにおいて周囲を疲れさせるということは上手い付き合い方ができているとは言えない。よってこの場合の「ブキョウ」も、巧拙の観点から見て、その行為が「下手だ、上手でない」ということを指していると考えた方が良好だろう。これらの用例から、「ブキョウ(一)」には、巧拙の観点から行為や事物のやり方・出来を指

す用法があることが分かった。この用法を「ブキョウ(一)―②」と呼称することとする。他に「ブキョウ(二)―②」が見られる用例としては以下の例が該当する。

米国の外交は**不器用**なり恰も熊が巨大なる掌を以て敵に一撃を与えもし甘く成功せざる時はノサノサと逃げ行くに似たりと独人メンゲ氏云う

(1910年一月十三日)

為る事なす事がザツで**不器用**な所から殊に繊細な筆致を貴ぶ主人半古画伯の気に入らず又一通りならず強情な点が奥様の気に入らない相であるが

(1911年七月十七日)

はつきりいうと、近衛の世渡りないしは政治は、彼のバトンを持つ手と同様はなはだ**不器用**である。(中略)近衛がしばくその周囲のごたごたで新聞の社会面の好餌となるのはこのためである。

(1930年十二月十一日)

三億円事件 **不器用**な左手書き  
(見出し)

字形の特徴は、全部が左手書きで、全体に角張っていることだ。特

に片仮名では直線的である点が目立ち、筆圧は日本人の平均(二百<sup>ㇿ</sup>)を百<sup>ㇿ</sup>も上回っている。

(1975年十一月十二日)

ら、この用例の「ブキヨウ」は特に手の使い方の巧拙に言及しているものであると言うことができる。なお、同小説には見たところ、此の新しい徒弟はひどく無器用だった。

「熱心ではあるが不器用」で一向に芽が出ない

(1989年十二月十七日)

次に、「ブキヨウ(一)」の三つ目の用法について検証していく。「ブキヨウ」の用例を見ていくと、「手先」や「指先」、「手元」等の語と共に用いられている例が散見される。

つい一週間ばかり前から、此の靴屋の爺さんには一人の徒弟が出来た。

(中略)安い粉煙草をくゆらしながら徒弟の無器用な手もとを打ち成っていたが(中略)爺さんは、(中略)『怠屈したかな?慣れ無え仕事だでのう。』と、愛撫するように云う

(1926年六月十一日)

この用例は、新聞に掲載されていた連載小説の一部である。この物語には、一週間前來たばかりの徒弟と、靴直し屋の店の主人が登場する。引用部は、慣れない仕事に苦勞する弟子と、それを見守る主人の描写である。この「無器用な手もと」とは、不慣れが原因のぎこちない手つきを表していると考えられることか

という一文も見られるが、徒弟の様子として「もどかしいばかりにのろくしていた」「彼はひどく頭も悪いらしく」「若い徒弟は、爺さんの問いから、三十秒も間を置いてから答える。彼の鈍いあたまはそれだけの簡単な問いの意味もすぐにははつきりとうつつて来ないらしい」等の描写があることから、こちらの「ブキヨウ」は徒弟の性格や氣質を指していると解釈できる。つまり、「無器用な手もと」の「ブキヨウ」とは違い、こちらは「ブキヨウ(一)―①」の用法であると言える。次の用例は、ある親から送られてきた相談を掲載した記事である。

手先が不器用な児でも工業家になれるか

(1933年四月十八日・見出し)

親は、記事の見出しにある「手先が不器用な児」について「手工図画が下手で、今まで甲という成績をとったことがなく、乙もやつと位」であると紹介している。「手工」とは、明治十九年から昭和十六年まで小学校や中等学校に設置されていた、現在の図画工作科や技術科、家

庭科等の源流となった科目である<sup>[29]</sup>。その内容には、紙細工や粘土細工等による動植等の再現、木材や金属を用いた日用品の製作等、手を使って何かを作り上げるといったものが見られる<sup>[30]</sup>。つまり、この記事の見出しの「ブキヨウ」も、特に手を使った作業が下手な様を表していると言うことができる。次の用例は、ぬいぐるみ人形作りに打ち込む川崎プツペに取材した記事である。川崎は、人形作りの長所について

この人形づくりのよさは、余りぎれや古洋服など手近の材料で手軽にできること。それに手先の器用、無器用に関係ないことです。

(1969年五月一日)

と述べ、人形作りを奨励する。この発言から、人形作りは手先が「ブキヨウ」な人でもできることが長所の一つであると考えることができる。そこで記事にある作り方の手順を一部抜粋すると、「中に詰め物をする」、「はだ布をかぶせる」、「組み立てる」等、手を使った比較的細かい作業が見られる。つまり川崎は、これらの手を使った細かい作業を敬遠しがちな人を「手先が「ブキヨウ」な人」の特徴と考えていると言うことができる。細かい作業を敬遠する理由としては、苦手だから、面倒だから、興味が無いから等が考えられる。しかし、ぬいぐるみ人形作りを奨励する立場上、興味は

あるが手先が「ブキヨウ」だから手を出さないという人々を第一に想定すると思われる。よって、手先が「ブキヨウ」な人が人形作りを敬遠する理由は、手を使った細かい作業が苦手だからであると考えることができる。これらのことから、この用例で「手先」と共に用いられている「ブキヨウ」もまた、手を使った細かい作業が下手だ、苦手だということを指していると言うことができる。また、この用法は以下の記事にも見ることができ

子どもたちの手が不器用になったということは、よく聞く話である。(中略)くっひもが結べない、ぞうきんがしぼれないといった子が多い。給食にときどき米飯が出るが、はしの使い方の下手な子が多いと担任の先生もいう。

(1979年四月三十日)

手先が不器用に(見出し)

七〇年代に入ってから、さらに「子どもたちの手先が不器用になった」と指摘されるようになった。

(1979年十二月二十六日)

ぞうきんのしぼり方がぎこちない。ご飯の時はしの持ち方も気になる。

包丁の使い方などもてんでなくなってない。(中略)

「確かに、指先の**不器用**な子が激増しているといわれ、やがて人類の進歩に何らかの後遺症が出るのではないかと心配しています」

(1982年三月三日)

訪問先の諸外国で見かけるのは、気の毒なほど指先が**不器用**な西欧人の姿だ。(中略)最近、外国人の不器用さを笑ってはられない現象が起きている。入園して来る子供たちの指先が、どうも怪しくなっているのだ。はしを持つ時に(中略)かなりの子供たちが二本まとめて握ってしまう

(1983年十月十四日)

「最近の子供は手先が**不器用**になっているというが、このままでいいのかなあ」(中略)

日本の経済を發展させた要因は多いが、日本人の手先が器用だったことも大きかったと思う。それが最近の子供ときたら、鉛筆を上手に削れないというし、果物の皮もナイフで満足にむけないという。

(1984年八月四日)

いまの子供は手先が**不器用**だなどといわれていますが、私はそうは思いません。公園では、子供たちが自分で組み立てた無線操縦カーを走らせていますし、わが家でも三歳の孫がバイオマンなどのプラモデルを、やすやすと組み立ててしまいます。テレビやラジカセの操作もでき、歌ったりしゃべったりして楽しんでいる状態です。

(1986年五月九日)

いずれの用例でも、「ブキヨウ」は「手先」や「指先」という語と共に用いられ、雑巾が絞れない、箸をしつかりと持てない等、手や指を使った作業が下手な様を形容している。

しかし、「手先」等の語と共に用いられていない「ブキヨウ」でもこの用法で使われている例が多く見られる。

之からの児童の遊戯と親達への注意**器用不器用**も親の注意如何にある

(見出し)

竹細工で指を切ったりするのを見ては不要科目のように思われるが、然し一步を進めて人間の**器用不器用**を考察するも筋肉が脳の命令通りに働くか否かに依るのである(中略)**器用不器用**にすることが子供の将来の生活に何れだけの損害を与えるか

(1920年五月八日)

この記事は、親が安易に子供達の遊びに干渉するべきではないと主張する教育評論家によって書かれたものである。この記事にある「ブキヨウ」とは、「筋肉が脳の命令通りに働」かないことで陥る状態のことであるため、動作に関連したものであると言える。そのため、「要領が悪い、愚鈍だ」等の性質・性格を表す「ブキヨウ(一)―①」の可能性は除外できる。またこの記事の筆者は、「ブキヨウ」の例として、女学校を出る年齢になっても自分の帯が結べない子供を挙げている。確かに、帯の結び方が下手なのは日常生活で困ることと言える。しかし、帯の結び方が下手だということだけで「将来何れだけの損害」を被るか考えると、筆者がこの記事で言わんとする程の大損害は被り得ないと思われる。筆者の言う「損害」とはむしろ、人生のあらゆる場面での苦労を指していると考えられる。つまり、帯が結べないことは、「ブキヨウ」なために起こり得る苦労や困難の一例に過ぎない。よってこの場合の「ブキヨウ」は、手や指を使った細かい作業が苦手な様を表す「ブキヨウ」と言うことができる。次の記事は、特派員のニューヨークでの暮らしが書かれたものである。

### 不器用？多い間違い

(1976年八月十六日・見出し)

当時のニューヨークでは、間違い電話が大変に多かったと言われている。記者は、その原因を「最近プッシュホンが流行。米国人の指は太いからどうも番号を押し間違えるらしい」と推察している。このことから、見出しの「不器用？」は「自身の太い指を上手く使えないのか」という意味を表していると考えられる。次の記事は、当時一時的に流行した手巻き煙草に関する記事である。

**不器用人間**は、小さなローラーが二本ついた「シガレット・ローリング・マシーン(たばこ紙巻き器)」(四百円)で巻く。

(1982年十二月三日)

記事では、終戦直後に闇市で手に入れた有り合わせの材料で手作りされた煙草について懐古的に述べられている。また、記事内には手巻き煙草の作り方が写真付きで解説されていることから、一部の人を除き、手巻き煙草は手作りできるものであると考えられていると思われる。つまり、機械に頼らないと手巻き煙草を手作りできないようなことを「「ブキヨウ」人間」と表現していると言うことができる。よってこの記事での「ブキヨウ」も、手巻き煙草を自らの手で作る技術が無い様を指していることが分かる。以上見てきたように、「手先」等の語と共に使われる場合に加え、それらと共に使われない場合でも同様の用法である場

合があると言える。これらのことから、

「ブキヨウ」には、特に手や指そのものの動かし方についてや、手や指を使った細かい作業をこなす技術に乏しい様をいう用法があると言いうことができる。この用法を「ブキヨウ(一)―③」とする。この用法は、広義には「ブキヨウ(一)―②」に内包されると思われるが、特に「手先」に関連した語句や文脈と共に用いられることが非常に多いため、別に扱う。「ブキヨウ(一)―③」は、以下のよ  
うな記事にも見られる。

先ごろハンケチ縫の役に就きし処不  
器用なるのみならず黴毒が發して眼病  
となり昨今は鼻緒縫をなし居るが

(1889年二月十四日)

**無器用**さも現代つ子の特性だ。たと  
えばクツひもがきちんと結べない。ふ  
ろしきの使い方がわからない。鉛筆を  
ナイフで削れない。ハサミがうまく使  
えない。だから一番困るのが工作の時  
間だ。一つの箱をつくるにも、のりし  
るにのりを指でのばしてつくるのでな  
くセロハンテープや接着剤でベタベタ  
とくつつけて「ネコがとりもちを使つ  
たような」箱をつくりあげる。折り紙  
もきちんと折れないので、肥満児的な  
ツルができあがる。

(1972年三月三十一日)

さらの中へアズキを二十粒ずつ入  
れ、(中略)はしてはさんで茶わんに移  
す。(中略)**不器用**な現代つ子の手先の  
訓練によい遊び

(1977年十二月三十一日)

子供の**不器用**心配(見出し)

日本の経済を發展させた要因は多い  
が、日本人の手先が器用だったことも  
大きかったと思う。それが最近の子供  
ときたら、鉛筆を上手に削れないとい  
うし、果物の皮もナイフで満足にむけ  
ないという。

(1984年八月四日)

子供たちがナイフで鉛筆を削った  
り、シャツのボタンをかけたたりするテ  
ストを受けた。(中略)その結果は、現  
代つ子の**不器用**さを改めて浮かびあが  
らせた。

(1985年十月四日)

**不器用**な人もワンタッチで(見出し)

卵の殻を散らかさずにすむ「おもし  
ろタマゴカラむきシール」(中略)「最  
近の子供は殻が上手にむけなくて、卵  
を食べたがらないので、卵に親しみを  
持つてもらうために作ってみた」

(1985年十二月十七日)



**不器用**、ウソよ(見出し)

公園では、子供たちが自分で組み立てた無線操縦カーを走らせていますし、わが家でも三歳の孫がバイオマンなどのプラモデルを、やすやすと組み立ててしまいます。テレビやラジカセの操作もでき、歌ったりしゃべったりして楽しんでいる状態です。

(1986年五月九日)

**不器用**な子供 責任は親に(見出し)

「箸(はし)が上手に持てない」「ナイフで鉛筆が削れない」「クツのひもが結べない」。(中略)不器用な子を抱える親たちは、今からでも遅くはない、自分が親から受けた特訓を、愛児のために伝授すべきである。

(1988年三月三日)

これまで見てきたように、「明治・大正・昭和版」での否定的な意味の「ブキヨウ」には、

・「ブキヨウ(一)―①」……ある人物や事物の気質・性質を指すもの

・「ブキヨウ(一)―②」……巧拙の観点から行為や事物のやり方・出来を指すもの

・「ブキヨウ(一)―③」……特に手や指そのものの動かし方についてや、手や指を使った細かい作業をこなす技術の巧拙についていうもの

という三つの用法が見られた。これら三つの用法の根底には、物事の処理が下手だ、要領が悪いという共通の意味がある。よって「ブキヨウ」には、一つの大きな意味として「物事の処理が下手だ、要領が悪い」というものがあると言うことができる。

一方、否定的な意味の印象が強いように思われる「ブキヨウ」にも、否定とは異なる意味で使用されている一群があるように思われる。この意味を便宜的に「ブキヨウ(二)」と呼称する。この意味は近年にならないと見られないが、似たものは、古くは1875年十一月三十日の記事に見られる。

一昨日の投書の中に「**無器用**」と仮名をふったのは校合の間ちがい」

「**無器用**」で有ろうと外より申されまして揃いも揃って**無器用**ゆえつい心づきませんで

この記事は1875年十一月二十八日の

何もあてなき**ぶ働無器用**の中にも

恥をかく罰当たります金づかい色で張りしも不了簡

という記事の訂正文を掲載したものであ

る。訂正記事では、元の記事の「無器

用」という語のルビを「ぶきよう」とし

ていたのを「ぶき」と改めるとしてい

る。しかし、その直後にまた「揃いも揃

って**無器用**ゆえつい心づきませんで

と、再び「無器用」のルビを「ぶきよ

う」と振っている。一つの記事内で、し

かもルビの振り方に関する話題でありな

がら訂正前の振り方を繰り返すのは、最

早意図的と見ていいだろう。先述のよう

に、同時期に使われていた「ブキヨウ」

の大多数は、それを悲観し命を絶つ者も

いるほどのものであったことを鑑みる

と、この記事の「ブキヨウ」は、その否

定的な意味と異なった使われ方と言え

る。しかし、この記事の「ブキヨウ」は

完全に肯定的な意味とまでは言えず、

「要領が悪い」という「ブキヨウ」の意

味はそのままに、単にそれを開き直った

程度の意味合いにとらえられる。「ブキ

ヨウ」が肯定的な文脈で使用され始めるのは

**無器用**でも一級品

(1964年七月二十五日・見出し)

という、俳優の三国連太郎への取材記事

である。三国は自身を役の掛け持ちがで

きない「**無器用**な俳優」と謙遜するが、

記事は見出しの通り、三国を「一級品」

と称賛するものである。「無器用でも

」とあることから「ブキヨウ」自体が肯

定的な意味を表しているとは言えない

が、従来の否定的な文脈とは明らかに異

なる使用がなされているのは確かであ

る。

**無器用**にも、それなりの味

(1969年五月一日・見出し)

軽妙さやクスグリが不得手らしい上

月は、いい意味で**不器用**な大型歌手で

あることが、二部にはいるとよくわか

った。

(1971年四月八日)

**不器用**でも自分に正直に

(1975年八月十一日)

同じくこれらの記事からも、「それなり」の「いい意味で」「でも」といった語と共に用いられているが、肯定的な文脈において「ブキヨウ」が用いられるようになってきていることが分かる。

時期をほぼ同じくして、「ブキヨウ」そのものが決して否定的ではない意味で使われている例が見られるようになる。

河上君は酒をひとつ飲むのでも、小器用な人ではなく、はなはだ無器用だが、とうとうこの無器用を自分のものにしたな、という気がする(中略)吉田松陰という青年のそばに、無器用な河上君が立っているという感じで、独特のものだ

(1968年十二月十九日)

この記事の引用は、河上徹太郎が『吉田松陰』という作品で野間文芸賞を受賞した際の祝辞の一部である。一つ目の「ブキヨウ」は、「小器用な人」という表現と対称的に用いられていることから、要領がよくない気質・性質等を指す「ブキヨウ(一)―①」の用法と言える。しかし、二つ目の「ブキヨウ」は一見直前の「ブキヨウ」と同一のものであると思われるが、果たしてそうだろうか。ここで、この「ブキヨウ」を自分のものに「するとはどういうことかについて考えてみる。祝辞の続きには、

読んでいくうちに、そくそくとして心にせまってくるものがあり、論文ではなくて文学だという印象が強烈だ。河上君の年来の主張である“硬文学”の成果だ

とある。つまり、「ブキヨウ」を自分のものに「するとは、河上が目指した“硬文学”を大成させるための努力が結実したということを表している。そして努力が実った結果、作品が「そくそくとして心にせまってく」る素晴らしいものになったのである。河上が目指した「硬文学」については、遠山一行氏が「必ずしも文学を専門の職業とする人によって書かれるものではなく、従って、文学という審美的な観念にはとらわれず、直接に社会や人間の諸事象にいとむものである」と指摘している<sup>[31]</sup>。また遠山氏は、「小説家の想像力には限界があり、一定の型の中で働かねばならぬもので、その型を外すと作品として空疎なものになるのだから、その意味で却って不自由なものであって、むしろ史実の奔放な行動性の方が現実的・人間的で、想像(創造)の上で自由である」という河上の言葉を引用している。つまり河上は、一般の作家達が目指す技巧的かつ審美的な文学とは対極の、実直な飾らない文学を追究したと言える。よって、「ブキヨウ」を自分のものに「するとは、自身の目指した文学の「素朴さ、実直さ」を体得したという意味にも解釈できる。これ

らのことから、この記事に見られる二つ目の「ブキヨウ」は、河上の要領のよくないと言われる気質を指しているのではなく、素朴さや実直さを表していると言いうことができる。最後の「ブキヨウ」も、二つ目の「ブキヨウ」を体得した河上のことを指しているため、否定的な意味「ブキヨウ（一）」を超えて、素朴な様や実直な様を意味していると言える。次の記事は、監督らが俳優の真田広之について語ったものである。

度胸一番！不器用さの魅力（見出し）  
不器用さの魅力があるんですね。

（1981年十月四日）

記事によると、高所から飛び降りる場面の撮影をした際、役者から我々は“芸”の人で、飛び降りのようなサーカスじみたことはスタントマンにやらせるべきだという議論が噴出したという。しかし監督らは、こういった発言するのは「演技派を自認する役者」だったと回顧する。それに対し、真田は師匠の「きたえ抜かれた肉体の創造美、それがアクション」という教えを信条としており、その肉体ひとつで撮影をこなす姿が魅力であると述べられている。この記事の「ブキヨウ」が、真田の信条を貫いた生き様を指しているのは明白である。このことから、「ブキヨウ」は「小細工をしな

健が出演するテレビコマーシャルに関するものである。

小細工を捨て、不器用に生きること  
：男のあらまほしき生きざまなのかもしれない  
（1984年九月三十日）

この用例でも、「ブキヨウ」に生きることに「小細工を捨て」ることが同列に扱われている。また、「ブキヨウ」な生き方に対し「あらまほし」述べられていることから、「ブキヨウ」な生き方に憧れの感情が伺える。これらことから、「ブキヨウ」は、「小細工をしない」ということに類する肯定的な意味を持っているということが指摘できる。この意味は、以下の記事にも見られる。

ただ前進あるのみ 会心“不器用相撲”（見出し）  
琴風の相撲は立ち合いの変化や、強力な投げ技もなく、ただ前に出るだけ。師匠の渡ヶ嶽親方が「変に器用だったらここ（大関）まで来なかったらう」というくらいだ。  
（1984年十一月十七日）

「生」への不器用さ描く（見出し）  
その作品で感じられた人間の「生」に対する不器用ともいえる真摯な問いが、この「風漂花」にもある

(1987年九月二十四日)

これらの用例から、否定的な意味とは異なる「ブキヨウ(二)」には、小細工をしない、実直だ、素朴であるという肯定的な意味が見られる。

次に、「平成版」でもこれらの意味・用法が見られるか確認する。

私はやはり、インテリじゃない。何事につけ、ぶつかっただうえじゃないとわからない**不器用**者なんですね。

で、小説の第一作、「チェンマイの首」(講談社)も、バンコクのスラムや、ゴールドントライアングルと呼ばれる麻薬栽培地帯などを一か月ほど、ねちこく取材してきました。

(1987年一月十八日)

この記事は、作家の中村敦夫に取材したものである。中村は、東南アジアを台座にした小説を書くために、実際に現地へ赴き取材したという。ここでの「ブキヨウ」は、「インテリじゃない」という人の性質・気質を表すことと同列に扱われている。また、「何事につけ、ぶつかっただうえじゃないとわからない」、「ねちこく取材してきました」等の表現からも、時間をかけないと物事への対応ができない性格だと言うことができる。これらのことから、この「ブキヨウ」は、中村の性格・気質を指していると言える。

次の用例は、ある女性に取材した記事である。

結婚後、娘が生まれ、商売と子育ての両立に役者の道はあきらめざるを得なかった。「**不器用**だから、たくさん

のことはできない。どれもこれも中途半端になるのなら、将来も続けられる仕事に専念しようって思ったんです」

(2003年一月二十二日)

女性は高校時代に演劇に興味を持ち、それ以来ずっと舞台や脚本を研究し続けた。しかし、結婚して娘が生まれたことを期に、役者の道を諦めざるを得なかったという。ここでの「ブキヨウ」とは、複数のことを同時にこなすことのできない要因として使用されている。複数のことを同時にできないというのは、そのような能力が無いためと考えられる。よってこの「ブキヨウ」も、女性の多芸ではない、要領がよくないという性格・気質を指していると言える。次の用例は、女性からの人生相談と、その相談への回答を掲載した記事である。

これまで仕事中心の生活をしてきたため友人とも疎遠。自由な時間はできましたが、孤独でむなしさを感じています。

今は再就職を考えています。ただ、**不器用**な性格で、対人関係をうまくつ

くれないために自信が持てず、一歩が踏み出せません。

(2008年六月六日)

相談者は、対人関係を上手く作れないことの原因は「ブキョウ」な性格にあると考えていることが分かる。よってこの記事で使用されている「ブキョウ」も、人物等の性格・性質を指す用法と言える。以上見てきたように、「平成版」でも「ブキョウ(一)―①」の用法は継続して使用されていると言える。この「ブキョウ(一)―①」用法は、以下の記事にも見られる。

キャンパスの屋内プールで毎日のように泳いだ。アルバイトも、スイミングクラブの指導員やプールの監視員。

そして夏の合宿では一日一万メートル――。

(中略)

初めは弁護士を志していた。が、水泳以外は、結局「だったら」と過ごすことになる。

(中略)

「私は**不器用**なんで、複数のことを一度に出来ないんですよ」

(中略)

入社後は、様々な「ネタ」を追い続けた。障害児教育、国家機密法反対キャンペーン、難病の子供たち。しかし、やがて**不器用**ゆえに「頭の切り替えがうまくいなくなる」。

退社を決意したのは、入社七年目。三十歳だった。

(1995年十月十四日)

妹夫婦は、若さだけを頼りに4歳の一人息子を連れて名古屋駅前の地下に店を持った。

マツチやちらしを配り、店で働き、息子を育てる。無我夢中だったのか、愚痴は口にしなかった。

子どものころから社会的で順応性もあり、土地にすっとなじんで行く様子は、**不器用**な私にはうらやましい限りだった。

(2000年八月十九日)

ライチョウは、一部のワシタカと同様、環境変化に合わせて自分の生き方を変えることができない**不器用**な鳥。そんな種は今後も減る可能性が高い。ありのままを見て記録しなければ

(2007年一月十八日)

要領のいい姉に比べ、私は**不器用**で、子供の頃はいつも損な役回りだった。母が仕事をしていたので、私たち姉妹は帰宅後、家事をすることになっていた。

(2009年八月九日)

次に、「平成版」で「ブキヨウ(一)―②」の用法が見られるか検証する。

中一の息子は最近おしゃれになってきた。というのは、鏡に向かうことが多くなった。自分の顔を見つめては、ヘアスタイルを気にしている。そろそろしゃれっ気が出てきたな、と思いがら成長を感じる。人の髪形も気にする。それに人の目も気になる年ごろのようだ。今まで何も文句を言わず、私の**不器用**な散髪でも喜んでいたのに……。

そうやって一つずつ自分への意識を始め、自分の個性を表現していくのだろう。整髪した息子の顔は一段と生き生きして見える。

(1990年六月二十四日)

この用例は、思春期の息子を持つ母親からの投書を掲載した記事である。この投書にある「ブキヨウ」な散髪」とは、髪形に無頓着だった頃は喜ばれるが、髪形を気にするようになってからは受け入れがたいものであるということが分かる。よってこの「ブキヨウ」は、散髪の出来上がりが「巧みでない、洗練されていない」ということを指すものであると言うことができる。次の用例は、転倒事故で骨折した男性からの投書である。

二か月ほど前にバイクの事故で足の骨を折り、現在、リハビリ生活を送っている(中略)

二本の松葉づえを片方のわきにまともてはさみ、もう一方の手でつり革につかまるという態勢は不安定なので、できれば座りたいのだが、こちらが目の前にいようが、いまいが、おかまいなしに優先席に平気で座っている人の多いこと。

また、つえについて**不器用**に優先席に歩み寄ると、目の前で座られてしまい、仕方なく空いている隣の席に、と思ったらそこにも座ろうとしている人がいた……という経験もある。

(1998年六月十七日)

この男性は、怪我をしている上に使い慣れない松葉杖を使って歩いていることから、ぎこちない歩き方をしていると言うことができる。よってここでの「ブキヨウ」は、怪我をしていない時に比べてぎこちない歩き方を指していると考えられる。次の用例は、ある映画の宣伝文である。

東京と大阪で俳優養成学校を主宰し、深田恭子らを育てた塩屋監督。森口らを半年がかりで演技指導し、「自分を表すのが**不器用**な森口は手ごわかったが、大切な人への思いを作文に書くなどして『感情の堰』を開き、野生や本能を引き出していった」という。

「演技を繰り返す、体で覚えるうちに不安と恥ずかしさが消えていった」と森口。父と家で大げんかする場面では、豊川の額を柱にぶつける迫力の演技で、父へのいらだちや歯がゆさを爆発させている。

(2005年四月五日)

この記事からは、森口が、塩屋監督による演技指導によって迫力のある演技ができるようになったことが分かる。「自分を表すのが「ブキョウ」」な森口が、「野生や本能を引き出す」された結果よい演技ができるようになったのだから、森口は「野生や本能」の引き出し方が下手だったことが読み取れる。よってこの「ブキョウ」も、「野生や本能」の下手な引き出し方を指していると言える。このように、「平成版」にも「ブキョウ(一)―②」の用法が見られると言うことができる。この用法は、以下の記事でも見られる。

私の社長室はガラス張りで、**不器用**にパソコンを操っている私の姿が、スタッフから丸見えになる。横には等身大のドーベルマンのぬいぐるみがある。犬の名はソラリスという。

(1996年九月二十五日)

人間関係のつくり方が**不器用**な私は、これまで社会とも人間とも、ごくごく薄くつき合ってきた。

(2000年六月十三日)

自身へのリコール運動について発言。「言われなき理由での解職請求は甚だ遺憾だ」と批判し、「私のやり方に**不器用**な部分があったかもしれないが、市政を私物化したことも、公約違反をしたこともない。公平無私に取り組んできた」と語気を強めた

(2007年八月二十八日)

次に、「ブキョウ(一)―③」の用法が見られるか確認する。

**不器用**と言われて久しい現代っ子に、はしやはさみなどの使い方を教える教室が盛況だ。遊びとしての面白さを体験させることで、手先を使うことに興味を持たせるのがねらい。本来なら親から子へ伝えられた技術だが、いまは自信のない親が多いため基本から教える指導書も出た。

東京・代々木の幼児教室「大原とめ研究会」。童謡のテープが流れる部屋で、子供たちがはさみで粘土を切っている。親指に力をこめる正しい持ち方を身につけるためだ。針に糸を通して、布を縫う練習も繰り返す。半年後に



は、直線縫いで母親のワンピースを仕上げる子もいるとか。

(1995年九月二十日)

この記事では、「ブキヨウ」と言われる現代っ子は、正しいはさみの持ち方を知らないとされている。加えて、はさみだけではなく箸や針の使い方も指導もされているということから、それらを用いるために共通して必要な、手や指の使い方が下手だということが分かる。よって、この記事の「ブキヨウ」は、下手な指や手の使い方を指すものだと言うことができる。次の用例は、シンガーソングライターの谷山浩子に取材した記事である。

手先が**不器用**で、卵を割ったり、靴ひもを結んだりするのも苦手な子どもだったという。ただ歌が好きで、小学生のころから遊びで詞と曲を作っていた。中学校のころには「裏門から走ると30秒」の場所にあったレコード会社に自作の曲を持ち込むほど。

(2006年八月七日)

この記事では、「ブキヨウ」の具体例として、卵を割ったり、靴ひもを結んだりするのが苦手だと言うことが挙げられている。一方、様々な曲を作ったりレコード会社に曲を持ち込んだりする等、何事にも困難を覚えるような要領の悪い人物とは考えられない。よってこの「ブキヨウ」も、手や指の使い方についていうも

のであるとすることが出来る。次の用例は、ある女性からの投書を掲載した記事に見られる。

**不器用**なので家事が不得手です。裁縫は靴下を繕うのがやっと。アイロンをかけずに済むようにワイシャツは形状安定、ハンカチはハンドタオルです。掃除や洗濯は家電で何とかならず、裁縫も「追放」できるでしょう。  
(中略)

きんぴらゴボウは千切りどころか、「百」切りとでも呼びたくなるような有り様です。包丁なしでも簡単に料理できないか、頭を悩ませながら台所に立っています。

(2016年七月三十一日)

この女性は、「ブキヨウ」を家事が苦手な理由と考えているようである。その具体例としては、「靴下を繕うのがやっと」「きんぴらゴボウは千切りどころか、「百」切りとでも呼びたくなるような有り様」等、手を使った行為が複数挙げられている。一方、この女性は、自身の「ブキヨウ」さを補うために様々な工夫を凝らしていることが分かる。このことから、決して機転の利かない人物ではないと言いうことができる。よってこの「ブキヨウ」も、手を使う行為や作業が苦手な様を指していると言える。これらの用例から、「平成版」でも「ブキヨウ

(一)―③」の用法が見られると言うことができる。また、この用法は以下の記事にも見られる。

元来手先の**不器用**な彼にとつて、五つもあるブラウスのボタン掛けは至難の業にも近かった。

(1991年二月二十四日)

携帯電話でメールを打つ時に、誤って隣のキーを押してしまい、いらいらした経験はないだろうか。(中略)「らくらくジュエリータッチメール」は、携帯電話のキーに膨らみを持たせたシールを張り、しっかりと押せるようにしたアイデア商品だ。

(中略)

記者は手先が**不器用**なので、ピンセットを使った。時折、張る位置がキーの中央からずれるが、徐々に粘着性が増していくアクリル系の糊が使っているので、落ち着いて張り直せばいい。

(2004年十月二十六日)

私も何度も教えてもらったが、手先が不器用なせいかワントンみたいになつてしまう。あの「ヒダヒダ」がうまく作れないのだ。

皮の片方にだけ、ヒダを作るのがコツらしいが、何個も失敗して、もうあきらめてしまっていた。

(2005年八月三十一日)

手先を使う作業が一番苦手。娘時代は花嫁修業にと、和洋裁、編み物など誰もが習っていた。それらをやらずにまいのまま、見合い相手に正直に話したら「既製品に良い物がある」と一向に頓着しない。結婚後、妻の**不器用**さに驚いた夫は「謙遜じゃなかったのか」と言う。私は「もう手遅れね」と開き直った。子どもの幼稚園から絵本バッグを手作りでと通達。ぼう然としたが一念発起して、色違いの両面使用バッグを縫い上げた。厚い絵本もきちんと納まる様にマチを入れた。できればに満足して袋を返してみると三角形のマチが2本の角(つの)のように出ている。マチの入れ方が間違っていたのだ。

(2006年七月十一日)

ナイフで鉛筆を削れない、靴ひもを結べないなど、手先の**不器用**な子どもたちが増えていることから、物作りを体験できる場を設けようと、鳥取大や鳥取環境大、鳥取短大の教員や学生らが、10年前から開いている。

(2007年六月十九日)

「おひな様の装束は、三角に折った着物  
の切れ端と和紙を使い、頭の部分は  
綿棒に和紙の烏帽子を巻いた。桃色の  
布と白和紙を張った扇形の台紙に張り  
つけて完成。(中略)「手先が**不器用**な  
ので、苦戦しました。かわいらしくで  
きたので、帰ったら居間の壁に飾りま  
す」と話した。

(2010年二月十三日)

最後に、「ブキヨウ(二)」の意味が  
「平成版」でも見られるか検証する。

家族と仲間に慕われた彼の人柄に涙  
した。私は「時代おくれ」が大好きだ  
った。宮沢賢治のデクノボーの思い  
〈雨ニモマケズ〉の「ホメラレモセ  
ズ、クニモサレズ」の控え目なところ  
が重なり、流行を追わない姿勢はお遍  
路の巡礼で本当の歌を探す旅にも表れ  
ている。

彼が若いとき、この「時代おくれ」  
は似合っていなかった。中年になり、  
人生経験が増すなかで彼そのものにな  
っていった。昨年、テレビのフルオー  
ケストラの前で歌った「時代おくれ」  
を聞いたときは、自然と熱き涙がほお  
を伝った。彼の歌は、いぶし銀であ  
る。華々しいきらめきは似合わない。  
はにかみながら時代を追いかける**不器  
用**な男が、あなたに似合っている。

(2001年六月十五日)

この記事は、シンガーソングライターの  
河島英五への追悼文を掲載したものであ  
る。この用例での「ブキヨウ」は、生前  
「時代を追いかけ」ていた河島について  
言うものである。「時代を追いかける」  
とは即ち、記事本文中の「時代おく  
れ」と同義である。時代おくれとは一  
般的に悪い意味の言葉であるが、この記  
事では特別な意味合いが付与されている  
ように思われる。記事では、河島の

「時代おくれ」を「宮沢賢治のデクノ  
ボー」や「控え目」と言い換えている描  
写がある。そしてその「時代おくれ」  
を体得したとき、「自然と熱き涙がほお  
を伝」うような歌を歌えるようになった  
とされている。これらのことから、「時  
代おくれ」とは、単に当世風ではない  
という意味ではなく、時代に逆行しつづ  
も素朴で味わいがあるという意味合いで  
使われていると言える。よってこの記事  
の「ブキヨウ」は、派手で要領がいいと  
いうわけではないが、素朴で実直だとい  
う意味で使われていると言うことができ  
る。次の用例は、息子を持つ母親からの  
投書を掲載した記事に見られる。

昨年、息子が公立高校を受験した時  
のこと。(中略)受験生の禁句を連発し  
ながら注意する私の言葉を軽く受け流  
し、「あしたは早く出発する。友だち  
が足をけがしているからバス停まで補  
助する」と言った。

(中略)ようやく帰ってきた息子に話を聞くと、4人で発表を見に行き、友だちの1人だけが不合格だった。

**不器用**な息子は落ちた友だちに「ジュース飲む？」と言った後、無言で今まで一緒にいたという。

自分さえよければという風潮の最近にあつて、ハラハラドキドキとひきかえに、息子から心のあり方を教わった気がした。

(2006年二月十二日)

この記事では、母親が息子を「ブキヨウ」と形容している。そこで、この息子の「ブキヨウ」ゆえの行動を見てみると、まずは、試験当日に足を怪我した友人を補助する、というものが見られる。息子は、この行為によつて勉強の内容を忘れたり試験に遅刻したりする等、損をする可能性があるにも関わらず、友人を補助するという選択をしていることが読み取れる。また、不合格だった友人に長時間付き添っていたということも挙げられている。この行動でも、技巧的な言葉で励ますのではなく、自分なりの気遣いの言葉一つ以外は無言だったということが分かる。これらのことから、息子の行動は要領がいいものとは言えず、また損をしかねないものであると言うことができる。しかし、母親は「息子から心のあり方を教わった気がした」と感心している。つまり母親は、例え損をしたとして

も他人の為に尽くすということや、技巧的でなくとも自分にできることを精一杯やるということを望ましいと感じているのである。よつてこの「ブキヨウ」は、要領がいいわけではないが実直だ、素材だという意味で使われていると言うことができる。次の用例は、テニス選手の小椋久美子に関する記事に見られる。

「人の思いに愚直に応えようとす

る。**不器用**なんです」と母は言う。競技への姿勢はストイックそのもので、母に「練習で手を抜いている人がいた。相手に失礼や」とこぼすことがある。だから、常に全身全霊で競技と向き合う。痛みがあつても全力で練習するから故障も多く、「小椋の大丈夫は、大丈夫じゃない」と語るチーム関係者もいる。

(2008年四月十五日)

この記事での「ブキヨウ」は、小椋の母が娘を表現する際に用いられている。そこで、その「ブキヨウ」に該当する行為等について見てみる。まず小椋は、どんな相手との練習にも全身全霊で取り組むという主義の人物だということが分かる。その姿勢は、例え他人であつても練習で手を抜くことが許せないほど「ストイック」と表現されている。次に、痛みを押して全力で練習するために怪我が多いということも分かる。つまり小椋は、自分の信念を貫くためには怪我という損

すらも厭わない人物であると言える。これらのことから、この用例の「ブキョウ」も、例え損をしたとしても自分の信念や信条を貫く実直な人物だということを指していると言うことができる。以上のことから、「ブキョウ(二)」の意味は「平成版」でも使用されていることが分かった。この意味は、以下の記事にも見られる。

#### 不器用な人物像(見出し)

書物信仰の権化のような先輩は、徹底してまじめで融通がきかない。すでに「共産主義は国際社会においては全体主義の同義語となりつつあった」時代だ。「ぼく」は「世界の隠された秘密を解きあかす賢者」としての、政治を脱色したマルクスにひかれていた。しかし、先輩は共産主義の現実に絶望することもなく「間近にせまる神の国の到来」を信じている。

彼は思想にも人にも愚直に向きあう。神経の狂った恋人にどこまでも尽くし、内ゲバ殺人に危うく巻き込まれそうになる。

(1991年十月二十四日)

自然釉で国際的にも名を売った大迫みきおさん(52)(愛知県常滑市檜原)の檜原窯は、緑に恵まれた広大な庭の中にあつた。

(中略)

古常滑のほとんどは自然釉である。毎日、古常滑を見ながらそれをいかに現代に生かすかを素直に問い続けたのであろう。

五十年の日本陶芸展で最優秀の秩父宮杯を受けた窯変壺は、忘れられない作品となった。

(中略)

「穴窯で自然釉をかけ、今度は炭を敷いた電気窯で窯変を試みた」とその秘密は二度焼きにあることを明らかにした。

五十七年に檜原窯を開き、二度焼きに磨きがかかった。さらに篠竹で作った忍釉で評価は定まった。

(中略)

「常滑の土で二度焼きをやったものだから、常滑焼の伝統に反するといつて変な顔をするんだ。今ではみんなやるようになったんだわ」と二度焼きが認知されるまでかなりの曲折を経なければならなかった。

自然釉の二度焼きに固執するのは、自然釉を究めるといふより、大迫さんの一徹さと不器用さにあるのかもしれない。

(1992年九月十二日)

独り芝居の大変さと、殉教者という役割に二の足を踏んだが、脚本を読み一気に心引かれた。単に理知的な宗教家の話ではない。農家出のダミアンは

素朴で**不器用**で、愛にあふれた人間臭い男なんです。

(1995年六月八日)

『用』っていうと格好いい感じがして恥ずかしいけど、自分と重なるのかもしれない

(2011年六月三日)

才人の素顔は、努力の人だった。

「漫画のことしか考えられない、**不器用**な人でした」。妻の原ちず子さん

(62)は語る。

(中略)

デビューを果たしたのは20歳の

時。ラジオと新聞と雑誌、そして酒場が情報源だった。365日飲み歩き、人の話を吸収して、作品をイメージしていく。ただし、外出先などでアイデアが浮かんでも、絶対にメモは取らなかった。「メモしないと忘れてしまう程度のアイデアなら、読者をうならせることなんて出来ない」。それが信念だった。

「ゲバゲバ時評」などの風刺漫画で人気を博し、最盛期には月に300ページを描いた。「漫画が人生で一番大切」。妻にそう宣言し、依頼された仕事は断らなかった。

(2007年一月九日)

生きるのが下手な人。唯一、家族を宝物のように思い、これだけは守ると必死になっている人」だ。日の当たらない場所で生きる男の役は

「性に合っている」という。『**不器**

熱意はあるが、いつも空回り。誠実だけど、どこか頼りない。今作で演じる掛水史貴は、高知県に新設された「おもてなし課」で働く、憎めない若手職員だ。

「掛水は、ほんまにええやつじゃないですか。だから、僕のここが似てるとか、共感できるとか、自分から言いたくないんですよ」

役柄に共感した点は？との質問に、関西弁のイントネーションでこう答えた。まっすぐで**不器用**、ウソがつけない。重なる部分は、決して少くない。

(2013年五月八日)

以上見てきたように、「明治・大正・昭和版」と「平成版」を通して、否定的な意味の「ブキヨウ(一)」と肯定的な意味と言える「ブキヨウ(二)」が見られた。また、「ブキヨウ(一)」の三つの用法もまた、二つのカテゴリを通して使用されていることが確認できた。

### 第三項「ブキリヨウ」の表記について

「ヨミダス歴史館」の「明治・大正・昭和版」のカテゴリで「不器量」の使用例を検索したところ、十七件の記事が該当した。それに対し「無器量」の検索結果は一件のみであった。しかしながら、これら十八件を全て「ブキリヨウ」の使用例として採用することはできない。

三舎を避くる至極の**不器量**なれば

両親の心遣い一方ならず

(1891年六月二十九日)

**不器量**はもともとから覚悟していました

が

(1917年一月五日)

**不器量**が仕合で芸者屋から校長の手

に

(1922年四月二十二日)

これらは、表記こそ「不器量」であるもののルビは「ふきりよう」になっているため、「ブキリヨウ」の表記として「不器量」となっているわけではないと見なし、表記の検索結果から除外する。また

頸に大いなる瘤があつていとも醜みにくき

無塩むしおんなという女ありこの**醜婦**故あつ

て(中略) 夫より無塩とささえいへば

**醜婦**の事になりました(中略)無塩

同様肥太りて色の黒い**極醜悪**な女で

はありますけれど(中略) 只此兩人の

名前を仮りて**醜婦**と賢婦という趣

意を

(1875年七月二十七日)

お竹が余り**不容貌**ゆえとは母子と

も心附ず

(1887年一月二十九日)

濃き毛が生え鳴く声人に似たりけり

と云う**不容貌**にて

(1888年三月三日)

閻魔の顔見世 **不纏致**は流行らぬ

(見出し)

閻魔も**不纏致**では人が相手にせぬ

(1910年七月十七日)

の四件も当て字であり、ルビも「ふきりよう」であるため表記の使用例に数えない。よってこれらを除いた「ブキリヨウ」の使用数は、「明治・大正・昭和版」では1924年七月十一日から1979年九月十四日までの五件である。「無器量」が初めて見られるのは1924年七月十一日の

親の不注意から子供を**無器量**に

という本の広告の記事である。しかしこの約一カ月前にも同様の広告があり、その記事では

親の不注意から子供を**不器量**に

(1924年六月十九日)

という表記がされていた。国立国会図書館デジタルコレクション<sup>[32]</sup>で岡田道一の著したこの本の本文を見てみると、

然うであるのに親の不注意から子供

を**不器量**<sup>ふきりよう</sup>に育て上げるといふことが

間々ある。

とあることから、本の題名は「オヤノフチュウイカラコドモヲブキリヨウニ」であると考えられる。一方、GINJI 図書の書誌情報に登録されている題名は「オヤノフチュウイカラコドモヲブキリヨウニ」であり<sup>[33]</sup>、新聞記事でも「不器量」

と「無器量」の混同があったことから、少なくともこの時期には「フキリヨウ」と「ブキリヨウ」両方の音が混在していたと見ることが出来る。よって1924年六月十九日の広告は「ブキリヨウ」の例には数えず、1924年七月十一日の広告は「ブキリヨウ」の使用例に加える。四十年代及び五十年代は「ブキリヨウ」の使用が見られなかったが、六十年代には、「無器量」表記が用いられている。

オヤジはぼくがあんまり**無器量**だから里子に出したっていうんですよ

(1964年一月十六日)

「明治・大正・昭和版」においてこれ以降「無器量」表記が見られるのは、次に引用する記事で最後である。

昭和二十三年、音訓表制定前の辞書では「不細工、不器量、不調法、不祝儀、不精、不用心」と表記が安定していた。この中から四つの言葉を抜き出して、現代の国語辞典は、見出し語にどう書いているか調べてみたのが別掲の表だ。

(中略)

新潮国語辞典(8年12月)

**不器量・無器量**

(1975年十二月二十二日)

この記事は、「不―」「無―」両表記を有する語の実態を調べるべく、複数の国



語辞典での表記を引用したものである。つまりこの記事での「無器量」表記は、「ブキリョウ」を意図的に「無―」と表記したのではなく、あくまで「不―」「無―」両表記を有する語の一例として取り上げたものに過ぎない。「明治・大正・昭和版」で「ブキリョウ」が使用されている記事は次の引用で最後である。

深海魚 不器量 だけど 敬遠する主婦も減って

(1979年九月十四日・見出し)

「明治・大正・昭和版」で明確に「ブキリョウ」という語の表記として「不器量」が使われているのはこの一件のみである。

次に、「平成版」での「ブキリョウ」表記について検証する。「平成版」で「不器量」が使用されている記事は三十八件該当し、実際に使用例が確認できるのはそのうち二十七件であった。以下に一部を引用する。

宗十郎のお鹿は、不器量な顔の作りや動きを遠慮しないで演じると、哀れが濃くなる。菊五郎が万次郎の役に出て、芝居がふくらんだ。善きこと。

(1990年九月三日)

私は自分が不器量なだけに、顔のこ

年配の方でも、化粧や髪形で短所を補い、個性豊かに美しくされている人が多い

(1993年三月十二日)

太さは親指より気持ち太目、長さは中指よりちよいと長め、そして毛根がもしやもしやと生えている。言ってみれば不細工で不器量なチビである。

(1997年一月十九日)

倭のならわしでは、器が不潔であっても食わず、店の女が不器量であっても食わない。峠に列んだ店の女がみな美しいのは、そのせいである

(2001年十一月十五日)

キレイな方が友達が出来やすい。自分とは他人との交際が下手で、独りぼっちになりやすい。それは自分の不器量のせいだ、と過去を思い出して涙声になる。

(2005年五月二十三日)

五つずつ 笹に盛らるる 夏蜜柑  
器量不器量 値段違えて

(2006年九月八日)

**不器量**な女が恋しい男の近くで暮らすためには、役に立つ存在になるしかないと割り切って、妾に尽くすのである。

(2008年八月三十一日)

一方、「平成版」でも「無器量」の使用例が二件該当した。しかし実際に使用例を確認できるのは、以下に引用した一件のみである。

女主人公の「私」は、子どもの頃から祖母に「**無器量**な子だねえ。頑なで愛らしさがいつちよなか」と口癖のように言われながら、育った。

(2001年四月十七日)

この用例は、文芸批評家の松原新一による批評文の一部である。よってこの「無器用」表記は、新聞社外の人物の用字意識によるものと言える。

以上のように、読売新聞では1876年から「不器量」表記が見られるものの、少なくとも1921年四月七日の記事までは「フキリヨウ」という言葉の表記として用いられている。そのため、新聞記事からだけでは、それ以前に「ブキリヨウ」という言葉がどのように表記されていたのか、また「フキリヨウ」と「ブキリヨウ」はどういった優劣関係だったのかは確認できない。また、「フキリヨウ」には「極醜悪」や「不容貌」、「不景色」、「不縹致」の当て字が多く見られ

る。加えて「フキリヨウモノ」や「フキリヨウオンナ」のルビが振られた字として「醜婦」や「醜婦」というものも見られ、容姿に関する字が使われていることも特徴的である。明確に「ブキリヨウ」として使用されることが分かるようになってからは、一時的に「無―」表記が優勢になる、現在は「不―」表記が一般的になっている等、「ブキヨウ」と似た傾向を示すことが確認された。

#### 第四項 「ブキリヨウ」の意味・用法について

前項では、「不器量」に「ふきりょう」とルビが振ってある語や「極醜悪」等の当て字は、「ブキリヨウ」と分けて検証した。しかし、本項ではそれらの語も「ブキリヨウ」と共に検証していく。「明治・大正・昭和版」で初めて「フキリヨウ」もしくは「ブキリヨウ」が確認できるのは、1875年七月二十七日の

頸に大いなる瘤があつていとも醜ひきりょうものき  
無塩ひきりょうものという女ありこの **醜婦** 故あつて

という記事である。この記事は、無塩と徳曜について紹介するものである。無塩とは、首に大きい瘤があり大変に醜いと

言われた中国の女性であるという。またその徳曜については

此徳曜というは(中略)無塩同様肥太りて色の黒い**極醜悪**ふきりよな女ではありますけれど

と、無塩と同様に肥え太り、肌の黒い極めて「醜悪」な女であると形容されている。この記事では、醜悪な女性を「フキリヨウ」と表現していることが分かる。更に「フキリヨウ」または「ブキリヨウ」が使用されている記事を見ていく。

次の検索結果である 1876年十一月十四日の記事にも「フキリヨウ」が見られるものの、「年は四十四五で」という説明と併記されているのみで、記事内にはその詳細な描写が見られない。次の用例は、兄が、嫁の貰い手がない妹を職に就かせて縁談にこぎつけさせようとする話を掲載した記事である。

兄が憐れみ此様な**不器量**ふきりよでも手に職が有ったらまた嫁に貰って呉れる人も有ろうと

(1881年三月二日)

妹については「大痘痕のうえ色黒で頭の毛は棕櫚箒が玉蜀黍の毛の様」とあり、「フキリヨウ」が原因で縁談に恵まれないという。このことから、「フキリヨウ」は縁談に恵まれない原因となるような見た目のことを意味すると考えられる。次の記事は、おつまという女が、養女であるお竹の今後を思案する話を掲載した記事である。

お竹が余り**不容貌**ふきりよゆえとは母子とも心附ず

(1887年一月二十九日)

お竹は踊りや三味線を知らないため芸者の道を諦めざるを得ず、おつまから娼妓になるよう提案される。しかし、お竹は娼妓になるよりは世間体のいい権妻になりたいと言う。一人で口入れ屋の元に向かったお竹だったが、「背が横に高く髪は茶褐とか云う手数掛の色を帯びお負に頬はベンガラを塗た様にて鼻は其中に胡坐をかき天井がきな臭い」お竹を見た口入れ屋に「フキリヨウ」だからと追い返されてしまう。このことから、「フキリヨウ」とは、このような見た目を意味

すると言うことができる。次の記事は、  
高齢の男が見合いをするという話を掲載  
したものである。

鳴く声人に似たりけりと云う

ふきりよう  
不器量にて

(1888年三月三日)

暗がりの中行われた見合いの場では、娘  
が噂に違わぬ「莞爾とした美しさ」だっ  
たため、男は翌日結納を取り交わす。し  
かし、翌日会った花嫁は「左の目は潰れ  
右は眇にて鼻が否に遠慮して顔の真中に  
平伏し肌はシブ色にて二の腕にまで濃き  
毛が生え」た「フキリヨウ」であつたと  
いう。よつてこの記事の「フキリヨウ」  
は、このような花嫁の醜い外見を指して  
いると言える。次の用例は、

次女はよし子と名れど其体を顧さず  
無塩も三舎を避くる至極の**不器量**な  
れば両親の心遣い一方ならず

(1891年六月二十九日)

という記事である。無塩は先述のよう  
に、大変に醜い中国の女性である。記事  
の内容は、その無塩が三舎を避ける、つ

まりおそれ憚る程の「フキリヨウ」な女  
性が縁談を受ける。しかし、相手の身分  
のために親族から反対され、女性の両親  
は「生付きたる容貌は瓦と同じく磨いて  
も玉にはならず人は外見より唯心と思  
い」ながら育てた娘に來たせつかくの縁  
談だからと、それを断ることを逡巡する  
というものである。この記事でも、「フ  
キリヨウ」は醜い無塩ですらも三舎を避  
ける程の容貌のことをいうものだと言え  
る。次の用例は、賽日にあたって閻魔像  
に参詣したことについて述べられた記事  
である。

閻魔の顔見世 **不纏致**は流行らぬ

(見出し)

閻魔も**不纏致**では人が相手にせぬ  
(1910年七月十七日)

記事では、「フキリヨウ」と表現される  
浅草仲見世の閻魔像は、「頗る出来が悪  
く参詣人も少な」かつたと述べられてい  
る。一方、不人気の浅草仲見世の閻魔像  
に対し、華嚴寺の閻魔については「仲見  
世のと違って聊か美男子だから参詣人が  
多い」と説明されている。このことか

ら、「フキリヨウ」は「美男子」と対の意味であり、「フキリヨウ」な見世物は人気が出ないということが分かる。次の記事は、ある男性からの身の上相談を掲載したものである。

婚姻の事は国許の父に依頼してあり  
ました所、非常な辛抱者の女を媒介する者がある、婚姻の当日帰郷せよとの父からの手紙で帰郷して結婚したのでした。**不器量**はもとから覚悟かくごしていましたが、奮発心がなく、馬鹿正直で、為事も其他の事も至って鈍く

(1917年一月五日)

この相談者は、父からの裏がありそうな知らせを受けた時点で覚悟を決めていたという。つまり、「フキリヨウ」なだけならまだ許せるが、その後の「奮発心がなく、馬鹿正直で、為事も其他の事も至って鈍」いことまでは我慢できないということである。この我慢できないことは、内面的なこと、性質的なことである。よって「フキリヨウ」とは、努力してもどうにもならない、内面とは反対の

外見のことを指すと言える。次の使用例は、

救われた孤児 **不器量**が仕合で芸者屋から校長の手に

(1922年四月二十二日・見出し)

という見出しである。記事によると、この孤児は両親と死に別れ芸者屋に住み込んでいたが、「お前の様な顔では芸者にはすることが出来ない」と言われ虐待されていた。そこを、この孤児が通う学校の校長が引き取ったという。この記事でも、「フキリヨウ」は外見も重要な要素である芸者になることができないような顔であるということの意味している。次の二件はある本の広告であるが、この本の内容については本論文では触れない。

親の不注意から子供を**不器量**に  
(1924年六月十九日)

親の不注意から子供を**無器量**に  
(1924年七月十一日)

次の記事は、ある家で働いていた女中が行方不明になったため捜索願が出されたというものである。

(1979年九月十四日・見出し)

このなへ女は(中略)悲しいことには生  
来の**ブキリヨウ**、どうしても嫁に貰い  
手がない

(1933年九月十日)

この記事では「ブキリヨウ」の詳細な説  
明はなされてはいないが、「ブキリヨ  
ウ」とは、女性としては「悲しい」こと  
であり「嫁に貰い手」がない原因になっ  
ているということは分かる。次に1964  
年一月十六日の記事を見てみる。この記  
事では、俳優の小瀬朗に取材したもので  
ある。長い下積みを経て主役に抜擢され  
た小瀬は、取材に対し

オヤジはぼくがあんまり**無器量**だか  
ら里子に出したっていうんですよ。

(中略) ボクを生んでくれた母親をう  
らんだこともあるくらいです。ほん  
とにへんな顔でしょう。

と答えている。小瀬は「ブキリヨウ」な  
ために役者としては大変苦労をしたとい  
う。また、その「ほんとうにへんな顔」  
に生んだ母親を恨んだと話していること  
から、この記事での「ブキリヨウ」は顔  
の造作がよくないという意味だと言え  
る。「明治・大正・昭和版」において  
「ブキリヨウ」が見られる最後の用例は

深海魚 **不器量**だけど 敬遠する主  
婦も減って

という見出しである。記事の内容は、漁  
法の進歩によって従来深海魚と呼ばれた  
魚も食卓に並ぶようになってきたため、

「開發魚」と名称を改め、深海魚といえ  
ば手に取りがたい見た目をした魚という  
印象を払拭しようとする漁協組合に取材  
したものである。このことから、この見  
出しの「ブキリヨウ」とは、深海魚の敬  
遠されがちな要因の一つである手に取り  
がたい見た目のことを意味していると分  
かる。以上のことから、「ヨミダス歴史  
館」の「明治・大正・昭和版」に見られ  
る「ブキリヨウ」は、「醜い、容貌が美  
しくない、またその様」を意味するとい  
うことが言える。

次に、「平成版」での「ブキリヨウ」  
の意味を検証する。

私は自分が**不器量**なだけに、顔のこ  
ととなると気になるのだが、近ごろは  
年配の方でも、化粧や髪形で短所を補  
い、個性豊かに美しくされている人が  
多い。

(中略)

今さら美人になどはどうつくろっ  
ても手遅れであるが、やはり私なりの  
味の出た顔になりたいと思う。

(1993年三月十二日)

この用例は、ある女性からの投書を掲載  
した記事である。女性は、自分が「ブキ

リョウ」なために顔の造作について過敏だったと自省する。また、美人になることを諦めていることも分かる。これらのことから、この「ブキリョウ」とは、容貌が美しくないことを意味していると言える。次の用例は、野菜の販売や流通に関する投書である。

**不器量**なトマト懐かしく(見出し)

最近の農産物は消費者の好みもあると思うが、特に野菜や果物において見てくれを問題にし過ぎます。(中略)形では味や栄養価は変わらないはずです。わざわざ手をかけて見た目を良くして出荷しているらしいが、それだけ価格も高くなる。むしろ形に手をかけない自然の方がうまい気がします。

(2003年五月二十一日)

投稿者は、形を人工的に矯正することで価格が高騰することを問題視している。また、「見てくれを問題にし過ぎます」「むしろ形に手をかけない自然の方がうまい気がします」等、見た目が悪い野菜も店頭に並べるべきだと主張している。このことから、見出しの「ブキリョウ」とは、見た目が悪い、形が整っていないという意味だと言える。以上のことから、「平成版」での「ブキリョウ」も「明治・大正・昭和版」と同様、「醜い、容貌が美しくない、またその様」を意味すると言えよう。

の意味の「ブキリョウ」は、以下の記事にも見られる。

宗十郎のお鹿は、**不器量**な顔の作りや動きを遠慮しないで演じると、哀れが濃くなる。

(1990年九月三日)

祇園へお連れしたのですが、舞子さんの中で、だれの目にもいちばん**不器量**な娘を『かわいいねえ、かわいいねえ』とほめていらつしやいました。励ましていたんですね。

(1993年七月十一日)

形は山の芋、自然薯に似ている。自然薯をぐんと小形にしたような。太さは親指より気持ち太目、長さは中指よりちよいと長め、そして毛根がもしやもしやと生えている。言ってみれば**細工で不器量**なチビである。

(1997年一月十九日)

酒屋の女子はかならず化粧して鮮やかな服装をし、盤や皿も清潔で新しい。倭のならわしでは、器が不潔であっても食わず、店の女が**不器量**であっても食わない。峠に列んだ店の女がみな美しいのは、そのせいである。

(2001年十一月十五日)

テレビや雑誌に出ているアイドルや水着姿の女性を見ては、「あのアイドルはかわいいなあ」などと平気で言うのです。それなら、かわいい子と結婚すればいいのに、とつい思ってしまった。

私のことは何一つほめてくれないどころか、**不器量**だとか太っているとか、気にすることばかり言います。

(2002年七月三十日)

AIさんの問いは「どうしたら、きれいになれるか」だ。

キレイな方が友達が出来やすい。自分は他人との交際が下手で、独りぼっちになりやすい。それは自分の**不器量**のせいだ、と過去を思い出して涙声になる。(中略) AIさんの素顔は瓜実顔の、いい顔立ちで、整形の必要性を認められないのだが、それでも「可愛くなりたい」と訴える。

(2005年五月二十三日)

結婚してまだ間もないころ、夫がまじめな顔で私に言った。「あんたの顔で結婚したんじゃあないよ」

(中略)

しかしわかっていても「顔より性格が好ましい」と言われて喜ぶほど女心は簡単ではないのだ。

跳び上がって喜ぶとでも思ったのだろうか。私が知らん顔していると、

「顔じゃあない……」と同じセリフを3度も繰り返したのだ。

若かった私は急に悲しくなって涙がポロポロとこぼれた。

「君の美しさにあやめられた」なんて言ってもらえるとは思わなければ、わざわざ「**不器量**」を連呼せずとも良かろうに。

(2005年十月四日)

以上のことから、読売新聞での「フキリョウ」及び「ブキリョウ」は、「醜い、容貌が美しくない、またその様」という意味で現在まで使用されているということが分かった。



### 第三節 朝日新聞

朝日新聞社の提供する「聞蔵Ⅱビジュアル」でもまた、二つのカテゴリから明治創刊号から現代までの新聞を閲覧・検索できる。「朝日新聞縮刷版」では1879年から1999年までの記事を検索でき、「朝日新聞1985〜、週刊朝日・AERA」では1985年から現代までの朝日新聞や1988年五月創刊号からの雑誌『AERA』、2000年四月からの雑誌『週刊朝日』を閲覧できる<sup>[34]</sup>。なお、「朝日新聞1985〜、週刊朝日・AERA」の検索結果からは『AERA』及び『週刊朝日』での用例は除外した。本節では、これら二つのカテゴリを利用し、「ブキョウ」と「ブキリョウ」の表記・意味を検証する。

#### 第一項 「ブキョウ」の表記について

「朝日新聞縮刷版」で「ブキョウ」という語を検索したところ、「不器用」が三十八件、「無器用」が五件該当した。「ブキョウ」の用例は、古くは次の

無器用を嘆て自殺を謀る(見出し)  
生れ付き甚だ無器用にて根から腕が  
上がらぬので日夜夫れのみ鬱ぎ居りし  
が

(1897年四月二十七日)

無器用を悔いて投身す(見出し)

弟子となりしが兎角無器用にて度々  
師の長太郎に叱咤せらるるにより

(1905年五月八日)

という二つの記事及びその見出しに見られる。そして、以降は「不器用」が使用される記事が続く。「不器用」が見られる最初の例は1911年九月二十八日の

不器用者身投せんとす(見出し)

自分のみ生来の不器用にて仕事か思  
うように上達せぬを恥じ自殺して果ん  
ものと決心し

という記事である。これ以降、1909年八月二十五日までの「ブキョウ」の表記は「不器用」のみである。

口は達者だが天下に稀な不器用

(1922年一月七日・見出し)

不精者で之に不器用者と来て居るん  
だから尚更のことだ

(1922年一月八日)

梳子の同性心中 不器用な二人  
(見出し)

両名とも**不器用**で何時迄たつても一本立ちが出来ず師匠も辛く当たるので将来を悲観し心中を計ったものである  
(1935年二月二十日)

子供の**不器用**は母親にも責任あり

(見出し)

気の毒なほど**不器用**な子供がある

(中略)**不器用**な子供はかなり沢山居るが、それは生れつきということに起因しているもの  
(1936年七月三十日)

(1936年七月三十日)

**不器用**を悲観(見出し)

江口方に奉公したが**不器用**なためいくら懸命になつても仕事がうまく行かず  
(1937年四月十日)

(1937年四月十日)

**不器用**な作家深田久弥(見出し)

名を成した中堅作家のうちでは最も**不器用**な作家の一人である。(中略)彼の**不器用**さは彼の良心だとさえ言える  
(1940年一月十七日)

(1940年一月十七日)

**不器用**な内政問題介入(見出し)

介入しようとする**不器用**な企てだと酷評した  
(1959年五月十五日)

(1959年五月十五日)

**不器用**な子と「体育」(見出し)

私は、まだ学校の生徒だったころ、やはりたいへんな**不器用**で、体育の先生がクラス担任だった関係もあって(中略)この**不器用**は、先天的なものでどうにもならないと、私は感じていますが、(中略)なんとかこの**不器用**な子を救う道はないものかしら  
(1959年七月二十九日)

(1959年七月二十九日)

「**不器用**な子と体育」に寄せて 劣

等感なくす心がけを(見出し)

自身も体育は不得手だったので、子どもの**不器用**も先天的で(中略)体育は**不器用**の見本で、学校時代その時間には雨が降るよう祈っていた(中略)日本医大の木田文夫教授は「運動の**不器用**に遺伝ということは考えられません。  
(1959年八月二十五日)

(1959年八月二十五日)

このように五十年近く「**不器用**」が使用されてきたが、これ以降の「ブキョウ」表記は一時的に「無器用」へと変わる。

**無器用**な子どもたち——二二二——

(見出し)

家の子ときたら……。何たる**無器用**！大なり小なり、今の子は**無器用**になつてきているのではなからうか？  
(1968年九月二十三日)

(1968年九月二十三日)

**無器用**な発言(見出し)

根本発言は**無器用**な発言だったと思う。

(1971年六月十六日)

鉛筆が削れない 現代っ子**不器用**の証(見出し)

現代っ子が親の世代に比べて**不器用**になったことは日常見聞する通りだ。

(1980年十月一日)

弱い握力、**無器用**な手先

(1971年八月十六日・見出し)

肉体的な共感呼ぶ**不器用**さ

(見出し)

シンガーとして**不器用**なほうだが

(1985年十一月二十二日)

しかし、「朝日新聞縮刷版」ではこの三件の記事を最後に「無器用」表記は見られず、以降の二十八件は「不器用」の方が用いられるようになっていく。以下にその一部を引用する。

**不器用**な私に厳しい世の中

(見出し)

何より**不器用**だし、と口実をくつつけて(中略)母は全く**不器用**だからとあきらめの境地。

(1974年一月二十四日)

ボールゲームなので他の選手はソツなく練習をこなす中、**不器用**さで目を引いたのが鈴木康。

(1990年三月二十三日)

**不器用**な人や無精者たちに…

(見出し)

現代っ子は**不器用**か(見出し)

抜群の器用さを誇る主人と、**不器用**な私との間に生まれた長男(小五)の**不器用**さは目を覆いたいほど(中略)器用、**不器用**は生まれつきじゃないかしら。

(1978年四月二十日)

手先の**不器用**な人やお年寄りに便利な「お助けグッズ」が目についた。そのいくつかを紹介すると――。(中略)

**不器用**な人が増えたというより、モノへの執着心が少なくなつて、扱いが雑になっているのかもしれない

(1993年九月九日)

**不器用**ウトウがつくり(見出し)

潜水の名手だが、飛ぶのは**不器用**。

(1999年六月十六日)

次に、「朝日新聞 1985」、週刊朝日・

「**不器用**」のカテゴリで「ブキョウ」表記を

確認する。「朝日新聞 1985」、週刊朝

日・「**不器用**」では、「**不器用**」が 3453 件、

「無器用」が四十一件該当した(2016年

十二月十五日現在)。こちらのカテゴリ

では、「**不器用**」の使用例が圧倒的に多

く、1970年代初頭以降の「**不器用**」優勢

の流れが続いていることが分かる。以下

にその一部を引用する。

きっと彼らは、自分のことをうまく

扱えず、心の安定を保てなくなった**不**

**器用**な十七歳なのだ。

(2000年五月十三日)

私はのろまだ、私は**不器用**だ、私は○

○が苦手だと、たくさんある欠点は、実

は簡単に張ったレッテルに納得して、努

力を怠っているだけではないだろうか。

(2002年一月十日)

器用に「安定」へと舵(かじ)を切る

のか、**不器用**に「したいこと」を追い求

めるのか。

(2004年二月十九日)

動物が**不器用**になでられたり、怒

鳴り声があつたりしても大丈夫かと

いう適性テストと、お座りができ

る、人込みの中を歩くなどの技術テ

スト――。

(2006年七月十二日)

筆者のような手先が**不器用**な人間

には、恩恵の大きいワインオープナ

ーだ。

(2008年二月四日)

便利さが**不器用**な子増やす？

(2010年二月十六日)

自分の思いをびっしり紙に書いて、

助けを求める**不器用**でまじめな姿に

「助けてあげなきゃ」と気になって仕

方がなくなった。

(2012年六月十九日)

**不器用**ながらも泳ぐ姿が愛らしい。

(2014年四月三日)

だが、五本指の靴下をさっとはけず、自分の**無器用**さに笑ってしまう。げたは夏だけにしようかと考え中だ。(2016年十月十九日)

この五件の使用例は、読者から送られた短歌が掲載された「歌壇」という記事である。

最後に、「朝日新聞1985」、週刊朝日・「**無器用**」において「**無器用**」が使用されている四十一件の記事について検証する。

余生なお **無器用**に生き 蚯蚓鳴く  
(1991年十一月三十日)

**無器用**に 励ましおれば 上京の

**無器用**な ボクの本気を 疎まれる  
(2000年六月一日)

子の発つ時は いよよ迫りぬ  
(1999年十月二十四日)

**無器用**に 生きて七十路万年 青  
(おもと) 咲く  
(2001年八月二日)

**無器用**で ただ誠実に 生きて来し  
傘寿の夫に 米寿を期待す  
(2004年五月二十八日)

**無器用**の 小回り苦手 鳥帰る  
(2004年四月二十日)

**無器用**に 羽ばたつかせ 鯉の餌を  
横取りせんと 鳩ら往き来す  
(2007年五月六日)

**無器用**で 無知で頑固は 俺に似る  
(2005年二月一日)

**無器用**で 流れに乗れぬ 男たち  
一生懸命 立ち泳ぎする  
(2008年一月二十一日)

**無器用**の 栗むく手間を いとはず  
に  
(2005年十一月七日)

スーパーの 天井ちかく **無器用**に  
とぶオニヤンマ 秋は哀しき  
(2009年十月二十六日)

**無器用**は ぶきようなりに 生きて  
いる

(2005年十一月二十三日)

(2011年二月二十七日)

**無器用**な 十指で春を 模索する  
(2008年四月九日)

**無器用**な はは直伝の 障子貼り  
(2011年十二月二十日)

鳳仙花 我に五指あり **無器用**な  
(2008年十月十三日)

**無器用**な 生き方ですが 元気です  
(2012年九月二十九日)

**無器用**に 生きし八十 路の更衣  
(2009年七月二十九日)

**無器用**に 生き木枯らしに 真向へ  
り  
(2012年十二月十九日)

**無器用**ね 自分も認め 厭になり  
(2009年十月二十八日)

**無器用**な 僕は踏まれて 伸びる麦  
(2013年二月十六日)

農一途 **無器用**に生き 天高し

(2010年九月二十二日)

**無器用**に 生きた人生 良しとする  
(2014年一月二十二日)

**無器用**に 生きる性かな 瓢垂る  
(2010年九月二十二日)

**無器用**に 生きて手品師 にはなれ  
ず  
(2015年三月十八日)

繕って **無器用**を知る 秋炬燵  
(2010年十一月三十日)

**無器用**も それなりに生き 雛飾る  
(2016年三月十七日)

**無器用**に 生き抜く君を 信じよう

**無器用**な 時代(とき)呼び覚ます  
杏(あんず)かな

(2016年八月三日)

次の四件の記事は、人生相談や投書等、  
読者らによる投稿が載せられたものであ  
る。

**無器用**な 手にも針持つ 長夜かな  
(2016年十二月十四日)

何事でも**無器用**な人間の方が修行に  
よって確実に上達するようですから、  
私は**無器用**をそう恥ずかしいこととは  
考えていません

(1988年八月十八日)

同じくこの二十四件は、読者によって送  
られた俳句や川柳を掲載する「俳壇」や  
「柳壇」という記事である。また、短歌  
や俳句、川柳に対する批評文も「無器  
用」の使用が見られる。1997年二月二十  
六日の記事に掲載された川柳「正義感  
損得抜きで 突っ走り？」は

**無器用**だけでも、一生懸命家族を  
愛してくれている姿に初めて気づき  
(1988年十二月十八日)

一句、この**無器用**さを懐かしく感じ  
ることが少し寂しい。

**無器用**で手作りの物も出来ず  
(1989年三月四日)

と批評されている。この批評文は、横堀  
五郎という選者によって書かれている。  
この選者は元教師であり、新聞社外の人  
物である。同じく2001年九月二十六日  
の新聞に載せられた川柳「誉め言葉 抜  
き働いた 夫はテレ」の批評文にも

おはしの国に生まれ育ったせいと、  
**無器用**なたちが加わったのだろう。こ  
の年になってもナイフ、フォークの使  
い勝手がいまひとつしっくりこない  
(1990年七月二十七日)

ご苦勞様へ**無器用**な夫  
(原文ママ)

また、読者以外の寄稿を掲載したもの  
もある。

と「無器用」の使用が見られる。この批  
評文も、選者の横堀によるものである。

本の書き方が**無器用**なのは咎めない  
としても、事柄が頭にすっきりはいら  
ないのは困る。

(2006年十月三日)

(2014年十月九日)

これは、作家の丸谷才一の寄稿である。「無器用」が使用される記事には、他に書評欄や作家等による連載欄がある。書評欄は、

こうした大真面目で無器用な恋愛が、もはや現実離れたものになっているからであろう

(1990年六月三日)

のように本の内容を批評する場合や、

無器用を武器にしよう 田原総一郎  
(1994年二月十一日)

二九年に発表した小説「無器用な天使」の直筆原稿のほか

(1995年五月十三日)

のように宣伝されている本の題名として「無器用」が使用されていた。また、「無器用」の使用が見られる記事には、作家の作品を掲載した連載欄もある。

真賀木は自分の顔を布団に押しつけながら、謝った。「無器用な男だか  
ら」

(1998年十月十一日)

第一核子の恰好が無器用だ。

一件目は、作家の高樹のぶ子の作品である。二件目は夏目漱石の「三四郎」の一部である。

以上見てきたように、朝日新聞では1974年一月二十四日の記事以降、「ブキヨウ」表記は基本的に「不器用」で統一されていると言える。また、「不器用」表記が一般的になって以降で「無器用」が使用される記事には、読者や作家等、新聞社の統一意識の外にある人々によって書かれたものが多い傾向にあると断言することができる。

## 第二項「ブキヨウ」の意味・用法について

本項では、朝日新聞で使用されている「ブキヨウ」の意味について検証する。「朝日新聞縮刷版」を概観すると、否定的な意味や文脈で使用される「ブキヨウ」が多く見られる。そこで、この否定的な意味の「ブキヨウ」の一群を「ブキヨウ(二)」とする。そこで、まずはこれら否定的な意味や文脈で使用されている「ブキヨウ(二)」の用法を検証していく。

「朝日新聞縮刷版」の初期の検索結果には、「ブキヨウ」であるために何らかの不利を被り、そのことを嘆いて自



殺、もしくは自殺未遂に及ぶ事件を報じた記事が見られる。

**無器用**を嘆いて自殺を謀る(見出し)

生れ付き甚だ**無器用**にて根から腕が上がらぬので日夜夫れのみ鬱ぎ居りしが(中略)塩酸二オンス程を持来たり唯一ト息に飲干せしかば

(1897年四月二十七日)

この記事には、青年は「ブキョウ」なために仕事の腕が上達しないことを嘆いて自殺を図ったとある。物覚えや仕事をこなす要領の良し悪しは、持って生まれた気質や性格に起因すると考えられる。また、「生れ付き甚だ**無器用**」という記述も見られる。よってこの「ブキョウ」は、当人の物覚えが悪い、要領が悪いという気質を指していると言える。

**無器用**を悔いて投身す(見出し)

弟子となりしが兎角**無器用**にて度々師の長太郎に叱咤せらるるにより栄助は我ながら其気働きの無きに呆れ(中略)投身したるものなりという

(1905年五月八日)

同じくこの記事でも、自らの「ブキョウ」を嘆いて自殺を図った事件が報じられている。記事内の「気働き」とは、機転が利くことや気配りができることである。つまり、しばしば師匠から気が利かない等と叱られたために、自分はなんと

機転の利かない人間なのだと考え自殺に及んだということである。この気配りのできない関係するのは、第一に、その人の性格や気質によるものが大きいと思われる。「ブキョウ」なために機転が利かないのだとすると、「ブキョウ」とは機転を利かせることに対し反対の作用を及ぼす性格や気質のことを表していることになる。よってこの記事の「ブキョウ」も、要領が悪いという性格を指していると言いうことができる。このような事件の記事は他に

**不器用**者身投せんとす(見出し)

自分のみ生来の**不器用**にて仕事思うように上達せぬを恥じ自殺して果んものと決心し

(1911年九月二十八日)

梳子の同性心中 **不器用**な二人

(見出し)

兩名とも**不器用**で何時迄たつても一本立ちが出来ず師匠も辛く当たるので将来を悲観し心中を計ったものである

(1935年二月二十日)

**不器用**を悲観(見出し)

江口方に奉公したが**不器用**なためいくら懸命になつても仕事がうまく行かず悲観したものだ

(1937年四月十日)

等が見られ、いずれも持つて生まれた「ブキヨウ」な気質によって仕事の上達しなかったということが言われている。次の記事は、読者からの投書を掲載したものである。

#### 不器用な少年(見出し)

やはりどこか牛的なところが私にはあったのでしょうか。思えば随分ボーツとしたこどもでした。(中略)私の教室に通ってくるこどもの(中略)不器用さをとても笑う気になれなかったのです。

(1987年十一月四日)

この投書は、牛に由来する「モーサン」というあだ名を持つ男性が、自分と似た少年に妙な共感を覚えるというものである。男性は、配布物を間違えられてもそれを言い出せない少年の「ブキヨウ」さを、「ボーツとしていい」て「物忘れが激し」いかつての自身と重ねている。よってこの「ブキヨウ」も、「ボーツとして」おり「物忘れが激し」という人物の性格を象徴していると言える。これらのことから、「ブキヨウ」はある人物や事物の気質・性質を形容する用法があることが分かる。よってこれらの「ブキヨウ」は、ある人や物の機転が利かない、要領が悪い、愚鈍だという性格や性質を指す用法であると言いうことができる。こ

の用法を「ブキヨウ(三)①」とする。他にこの用法が見られる記事は、

#### 不器用な子と「体育」(見出し)

私は、まだ学校の生徒だったころ、やはりたいへんな不器用で、(中略)とんだ所が子どもに似てしまったと苦笑しないわけにはいきませんでした。この不器用は、先天的なものでどうにもならないと、私は感じていますが(中略)なんとかこの不器用な子を救う道はないものかしら

(1959年七月二十九日)

「人それぞれだね。僕は、こういう行き方しかできません。(中略)宣伝マンが言った。「彼の話、記事になりますか?森君という人は、どうも話下手だね。不器用なんです。

(1976年十月二十日・原文ママ)

強くて不器用な米 失敗↓強硬策の悪循環(見出し)

今回の人質救出作戦の失敗ほど、世界や米国民の目に映る超大国アメリカの強くて面白いイメージをきわ立たせたものはない。

米国が与えた第一の印象は、やるとなったらなんでもとことんまでやるこの傾向である。(中略)

第二に、することなすこと失敗続きの**不器用**な巨人アメリカのイメージも強められた。

(1980年四月二十八日)

等がある。

次は、「ブキョウ(三)―①」以外の用法について検証していく。

**不器用**な男たち(見出し)

相互的な人間の男らしきを作り出す能力に決定的に欠け(中略)男性らしきを強制する社会(中略)の断層に落ち込んだ**不器用**な男たちの一人なのである。

(1989年九月二日)

**不器用**な内政問題介入(見出し)

この包括案は西側が現在の主要な問題の建設的な解決を妨げる目的でドイツの内政問題に介入しようとする**不器用**な企てだと酷評した

(1959年五月十五日)

庭いじり：**不器用**で仕事の虫(見出し)

屋外スポーツやビデオの活用など、余暇をうまく楽しんでいるのが三十代から四十代前半までとすれば、**不器用**で「仕事の虫」から抜け出せないのが四十代後半からの部長さんクラス。

(1990年四月二十六日)

**不器用**、じっくり練って50年(見出し)

ど**不器用**だったから当然即妙に答えられず、テレビにはあまり出なかった。でも**不器用**だったからこそ、ほかのものに手を出さず、ここまでやってこられたと思う。

(1993年三月十一日)

この記事は、当時のアメリカ・イギリス・フランス三国が旧ソ連に対し「包括案」を提案したことを報じたものである。対立している西側の国々からの提案を「ブキョウ」な企て」と「酷評」していることから、東ドイツはこの「包括案」を快く思っていないことが分かる。また、この「包括案」の名目がどのようなものであっても、問題の「建設的な解決」を妨げてしまうことや一国の内政に干渉してしまうことは望ましいこととは言えない。つまりこの記事の「ブキョウ」な企て」とは、「包括案」が東ドイツにとって望ましい結果に繋がらないものであるということを表していると言える。次の記事は、1959年七月二十九日の「不器用な子と「体育」という見出し」の記事を読んだ読者からの投書を題材にした記事である。

野川さん自身も体育は不得手だったので、子どもの**不器用**も先天的で、これからの練習でもどうにもならないのではないかと嘆いています。ですが――体育は**不器用**の見本で、学校時代その時間には雨が降るよう祈っていた少女が、(中略)三年生では主将になった(中略)というような実例はぜひぶんどく寄せられています。(中略)

日本医大の木田文夫教授は「運動の**不器用**に遺伝ということは考えられませんが、せん。

(1959年八月二十五日)

この用例では、三つの「ブキョウ」の使が見られる。一つ目の「ブキョウ」は先天的なもので、機敏な体の動きを不得意にさせる原因となる気質を指していると解釈できる。そのため、一つ目の「ブキョウ」は「ブキョウ(三)―①」の用法であると考えられる。二つ目も、体育が苦手であることが「ブキョウ」の最たる例として挙げられていることから、機敏な動きができない気質を指す「ブキョウ(三)―①」の用法であると言える。しかし、三つ目の「ブキョウ」はこれら二つの用法と異なるように思われる。三つ目の「ブキョウ」は、日本医大の教授が、運動の上手さと遺伝との関係について話す部分の記述に見られる。この教授は、

運動の下手さは親譲りの気質によるものと思われがちだが、運動の下手さと遺伝は無関係であると主張している。また「運動の「ブキョウ」と、運動という行為に限定した「ブキョウ」であるため、機敏な動きを妨げる気質そのものよりも、運動という具体的な行為の下手さを指していると考えた方がよいと思われる。よって三つ目の「ブキョウ」は、「ブキョウ(三)―①」と異なる用法と考えられる。次の用例は、沖縄返還協定の調印を間近に控える中で、当時の自治相代理の発言を報じた記事に見られる。

**無器用**な発言(見出し)

根本発言は**無器用**な発言だったと思う。

(1971年六月十六日)

この発言の要旨は次のようなものである。

沖縄には過保護に基づく欲求不満のようなものがある感じだ。沖縄は戦中戦後に大変な苦勞をしたことは確かだが、本土にも広島や長崎の事がある。よそに預けていた子供が帰ってきたのでかわいそうだといって、アイスクリームだ、キャンデーだと一度に与えたら過保護になって肥満児になるだろう。本土にも過疎県や過密県があるの

だから、あまり沖縄ばかりいうと、それらの不満も出てくる。

この発言は、様々な政党から反感を買い、当時の琉球政府の主席が調印式の出席を辞退する等、大変に物議を醸したとされている。この用例の「ブキヨウ」は、逆効果となった発言を形容している。よってこの「ブキヨウ」も、何らかの行為について下手だ、逆効果だという意味で指すものであると言える。次の用例は、モスクワオリンピックのため国内の整備を急ぐ旧ソ連の様子を紹介した記事である。

強引・不器用なソ連方式 五輪準備にもお国ぶり(見出し)

交通規制にしろ、土曜労働にしろ、当局のやり方に対する公然の批判はこの国にはない。日本なら警察の横暴とやり玉に挙げられそうな交通取り締まりの極端な強化にもタクシー運転手が陰で不平をいう程度だ。(中略)しかし、それにしても強引で、不器用なソ連方式準備が進んでいる。

(1980年七月三日)

ソ連国内整備の様子としては、通常は違反四件目から免許証を没収するところを一件目から没収するという噂が流れた。次に見かけた時までには車の塗装を修理して見ないとナンバープレートを剥奪すると注意されたりと、過激で急進的な

ものであると述べられている。また、この取り締まりの成果は公表されておらず、運転手達は皆戦々恐々としているという。見出しや本文中の「ブキヨウ」は、このような成果が不透明で国民を恐れさせるやり方を表現していると言える。こうした描写から、この「ブキヨウ」は否定的な意味を持つと考えられる。これは「ブキヨウ(三)―①」の用法とも考えられるが、「ブキヨウ」な気質だからこのようなやり方をせざるを得ないというよりは、「ソ連方式」とあることから、単に政策そのものの巧拙について言っているという解釈が妥当であろう。よって「ブキヨウ(三)―①」とは異なる用法と考えることとする。次の記事は、ある読者からの投書を掲載したものである。

不器用に過ごした五十年は、名も富も残さず、四人の子供を育てあげただけである。

(中略)

食べることにのみ追われたこの実りなき五十年に悔いが無いといえばウソになる。(中略)私は、そんな夫と共に全力投球で働いた。(中略)残り少ない余生を社会のために尽くす余力はもうない。それも悔いの一つとなっている。

(1986年二月二十四日)

投稿者は、自身の人生を「ブキヨウ」に過ごした」と振り返る。彼女の回顧する半生を見てみると、名や富を残さなかった、食することにのみ追われた、社会のために尽くす余力がない等とあることから、自身の人生を後悔が多いものと評していることが分かる。「ブキヨウ」に過ごした人生が後悔の多いものだとすると、この「ブキヨウ」は、自身の望むような結果に繋げることができない過ごし方を形容していると考えられる。よってこの「ブキヨウ」は、物事のやり方が上手くない、巧みでないということを指していると言うことができる。最後の用例は、ウトウの生態について取材した記事に見られる。

沖合から無数のウトウが帰ってくる。

くちばしには何匹ものイカナゴ。断がいの上の草場に掘った巣穴にヒナが待っているのだが、このエサを横取りしようとウミネコの大群が待ち構え、あらかた小魚を奪い取られる親鳥も少なくない。

(中略)

ウトウは(中略)潜水の名手だが、飛ぶのは**不器用**。バサリと落ちるように着地した瞬間にウミネコが襲いかかる。

(1999年六月十六日)

ウトウは断崖に巣を作り、そこにいる雛の元まで餌のイカナゴを届ける。しかしながら、飛ぶのが「ブキヨウ」なため、

ウミネコに餌を奪われることが多いという。断崖にいる雛に餌を届ける最中に餌を奪われるということは、飛んでいる最中に敵に襲われるということである。また、直前の「潜水の名手」と対比されていることから、この「飛ぶのは「ブキヨウ」とは、飛ぶのが下手だという意味に解釈できる。以上の用例から、「ブキヨウ」にはある行為や事物を巧拙の観点から評価する用法があると言いうことができる。この用法を「ブキヨウ(三)―②」と呼称する。

また、広い意味では「ブキヨウ(三)―②」に属するが、この用法には特に限定的ことについて使用される一群があるように思われる。それは次のような用例等に見られる。

子供の**不器用**は母親にも責任あり

(見出し)

驚くほど器用の子供があるかと思うと、気の毒なほど**不器用**な子供がある、どちらも持って生れた性質だろうが(中略)

**不器用**な子供はかなり沢山居るが、それは生れつきということに起因しているものの、反面には家庭の人の注意の足りなかったこともかなり大きな原因になっていると考える。

(1936年七月三十日)

これらの「ブキヨウ」は、「持って生れた性質」や「生れつきということに起因

している」等とあることから、一見すると「ブキヨウ(二二)①」の用法と思われる。しかし、本文には次のような注意が見られる。

子供は誰だって玩具其他のものをいじったり、或は壊したがったりするものだ。子供がこうすることは遊戯的本能によるもので、この本能を善導しなければ、いけないのだ。(中略)壊すことはやがては品物を構成することになるうと思うからだ。

木の葉一枚を生命化して遊ぶその子供心を叱ったりするのは、将来ブキツヨにするばかりでなく、創造力の欠けた人間にしてしまう。

ブキツツヨならブキツツヨなりに物を組み立て、表現するように奨励し必ず最後までやりとげさせるようにやらねばいけない。又母親によっては『私の家の子供は手はだめだが、算術がよく出来る』と行って平然としている人もあるが、これは間違ったことで、頭と手とはどうしたって切り離すことは出来ないものだ。

引用の二つ目と三つ目に見られる「ブキツツヨ」の意味については再考する必要がある。しかし、引用の二つ目に「ブキ

ツツヨにするばかりでなく、創造力の欠けた人間にしてしまう」とあることから、頭ごなしの叱責は「ブキツツヨ」以前の、何かを創造するための発想や意欲といった力すらも奪ってしまうということが分かる。このことから、「ブキツツヨ」とは、その何かを作り出す発想を形にする術の拙い様を指していると考えられる。また引用の三つ目からは、「ブキツツツヨ」とは手の使い方が拙い様を指していることが分かる。よつてこの場合の「ブキツツツヨ」は、何かを作り出す技術の拙い様、または手の使い方が下手な様子を指すものと考えられる。記事の要旨としては、子供が「ブキヨウ」になることの一因に、子供らしい遊びやいたずらを無闇に叱る母親の存在があるというものである。これらのことから、「ブキヨウ」は「ブキツツツヨ」と同じく、手で何かを作り出す技術の拙い様、または手の使い方が下手な様子を指していると言える。次の用例は、

弱い握力、無器用な手先

(1971年八月十六日・見出し)

という見出しに見られる。この見出しの具体例としては、「子どもたちはぞうきんやタオルなどを満足に絞れない」、「鉄棒から落ちてけがをする子も目立っている」、「前掛のひもをきちんと結べないだけではなく、リュックサックのひもさえ満足に結べない」等が挙げられている。

しかし、見出しの「ブキヨウ」はこれら一つ一つの行為の巧拙を指すというよりは、これらの行為のために共通して必要な「手先」の使い方が下手な様を指していると考えられる。次の用例は、読者からの投書に見られる。

**不器用**な私に厳しい世の中(見出し)

世をあげての節約時代。全く私は生きにくい。ボタンつけさえ決心してとりくむ。中学時代の家庭科、ズボンを縫う宿題は全部母にやってもらった。第一に目が悪いからすぐ疲れる。細かい事に熱中できないし、本を読んでも方が好き。何より**不器用**だし、と口実をくつつけて。

(中略)

母は全く**不器用**だからとあきらめの境地。

(1974年一月二十四日)

この投書では、三ヶ所で「ブキヨウ」が使用されている。引用から、投稿者はボタン付け等裁縫を苦手としていることが分かる。しかし、これだけでは「ブキヨウ」の用法は特定できない。「ブキヨウ」な気質のために裁縫が苦手なのか、裁縫等の行為が苦手なことを「ブキヨウ」としているのか、どちらとも考えられるからである。そのため続けて用例を見ていくと、三つ目の「ブキヨウ」の直前に次のような記述が見られる。

マテヨ、ミシンは機械が動いてくれるから、ヒョツとしたら、何とかなるかも。私にすれば大冒険。手はじめに、カーテンを4枚。おそろおそろハサミを持ち大奮闘。

出来上がれば、色と柄のせいで、曲がったぬい目も気にならぬ。よかったなアと胸をなでおろし、日ごろからかっている夫に大いばり。

この記述から、投稿者は初めてにも関わらず、ミシンを使ってカーテンを作り上げたことが分かる。よって、投稿者は多少なりとも初めてのことに対応できる人物であると考えられるため、見出しの「ブキヨウ」は「ブキヨウ(三)―①」の用法ではなく、ボタン付けや裁縫等、手を使った細かい作業が苦手なことを指すものであるとする。二つ目の「ブキヨウ」もどちらの用法ともとれるが、これは母にズボン縫いを頼むための口実である。投稿者は、自分より手芸が上手い母に頼もうとしていると思われるため、こちらも一つ目と同様、手縫い等が苦手であることを指していると考えられる。三つ目は、母親の心境である。直前に投稿者がミシンを使ってようやくカーテンを作り上げたことから、母親は、ミシンを使わないと縫物もできないのかと考えているものと思われる。よって三つ目の「ブキヨウ」も、手縫いのような細かい作業が下手なことを指していると言える。次の用例は「現代っ子は**不器用**



か」という大見出しの記事で、この記事には多数の読者からの投書が掲載されている。

抜群の器用さを誇る主人と、不器用な私との間に生まれた長男(小五)の不器用さは目を覆いたいほど。(中略)器用、不器用は生まれつきじゃないかしら。

(1978年四月二十日)

この投書では、「ブキヨウ」は生まれつきと考える母親が、自身の子供の様子をもとに意見を述べている。しかし、この「ブキヨウ」も「ブキヨウ(三)―①」の用法とは考え難い。第一に、長男の様子として

工作はなんでもセロテープで張りつけ、プラモデルを作れば接着剤がはみ出てダンゴになっている

と、物の作り方が下手であることが強調されているためである。第二に、長女や次女を長男と対比させ、

長女(小二)と次女(二歳)は一歳半のときから上手にハシを使い、長女は二歳と十カ月のときミシンのボビンケースをバラバラに分解して組み立て直した

と、手作業の巧拙について説明しているからである。第三には、夫も長男と対比

的に述べられていることである。長男と対比される夫は「器用さを誇る主人」と表現されているが、投稿者の夫が多芸さや要領の良さを持っている人物であるという意味では今ひとつ文脈に合わない。やはり、この「ブキヨウ」は生まれつきのもと言われているが、特に物を作ったり細かい作業をしたりすることが下手であるということを指していると考えた方がよいと思われる。次の用例は、ある本を紹介した記事に見られるものである。

鉛筆が削れない 現代っ子不器用の

証明 谷田貝 公昭著

(1980年十月一日・見出し)

本の題名は見出しの通りである。この題名からだけでは「ブキヨウ」の用法を特定しかねるため、何を「ブキヨウ」としているのか、続く紹介文からも検証する。

京浜女子大助教授谷田貝公昭氏らの「指・手腕の巧緻(こうち)性の研究」の成果が本になった。

現代っ子が親の世代に比べて不器用になったことは日常見聞する通りだ。(中略)ここ数年、子供たちに指や手の動作を行わせてみてその結果を過去の調査と比較する。顔も洗えない、ボタンがかけられない……といった実態の

観察が報告され、教育現場の先生たちの実態も詳しく述べられる。

この本は、著者らによる「指・手腕の巧緻性の研究」という調査が元になっていると言われている。この調査は、子供達に実際に「切る」「削る」「結ぶ」等、手や道具を使った動作をさせ、一定の基準から「できる」もしくは「できない」を判定し、それらの作業ができるようになる年齢を求めるといふものである<sup>[5]</sup>。

つまり、この書評欄の本も子供達の指や手の使い方、巧拙に関するものであると考えられる。また、顔を洗う、ボタンを掛ける等の動作も手を使って行うものである。それらができなくなっているということが本の主旨であることから、題名及び見出しの「ブキヨウ」とは、こうした手を使う行為や動作が上手くない、もしくはできない様を指していると言える。これらの「ブキヨウ」はいずれも、特に手や指を使った細かい作業をこなす技術や、手や指の使い方そのものの巧拙を指す用法である。先に述べたように、この用法は、広義には物事の巧拙を示す「ブキヨウ(三)―②」の用法に含まれると言える。しかしながら、この用法は特に手や指に言及するものとして高い頻度で見られたため、「ブキヨウ(三)―②」の中でも特殊な用法として扱うこととした。この用法を「ブキヨウ(三)―③」と呼称する。「ブキヨウ(三)―③」は以下の記事にも見られる。

**無器用**な子どもたち――！！！！！！！！  
(見出し)

昔は小学三、四年生になれば、自分の鉛筆ぐらいはだれでもわけなく削れたものである。(中略)それが家の子ときたら……何たる**無器用**！でもこれは単にわが子一人に限った現象ではないと思う。文化の進歩のお陰で、大なり小なり、今の子は**無器用**になってきているのではなからうか？

(1968年九月二十三日)

**不器用**は悪いことか(見出し)

「最近の子どもは、鉛筆もろくに削れない。くつのひもも結べない程**不器用**」という調査結果が、先ごろこの欄などで紹介された。(中略)

米国人は**不器用**の代表格だという。おつりの数え方でも遅くてイライラする。

(1978年七月十九日)

二、三年生の男の子が「先生、取って」とやって来る。水泳パンツのひもを固結びにしてしまい、自分でほどけないのである。

(中略)五年生がカマを使い稲刈りをした。始める前に「引いて切る」と説明したのに、三分の一はカマで茎をた

たいて切ろうとする。ゴシゴシこする姿も目立った。

運動会では、鉢巻をきちんとしばれず、徒競走の途中でほどけて落ちる子の姿が目についた。運動靴のひもがほどけ、自分で踏み、ころんだ子がいた。

(中略)

子どもたちは、昔に比べ、確実に**不器用**になっている。

(中略)

まず卵割り。(中略)ボウルのふちを卵にたたきつけて殻を割り、中身をボウルに入れられたのは五、六人。(中略)

このほか、靴のひも結び、鉛筆削り、ぞうきんしぼりでも、子どものぶきつちよぶりが予想以上だった。

(1984年十二月八日)

「**不器用**」から脱出する本(見出し)家で、自分で作れるものまで買うようになった結果、手が、本来もっている働きをしなくなった。

秋岡さんは「おにぎりや竹トンボは買うな」といい続け、重さを感じとり、長さを測る人間の手の素晴らしさを数えあげる。

(1986年三月六日)

**不器用**な人や無精者たちに… 便利なお助けグッズあれこれ(見出し)

手先の**不器用**な人やお年寄りに便利な「お助けグッズ」が目についた。そのいくつかを紹介すると――。

ネジを強引に回して溝をつぶして困った人に大助かりなのが、トーコマ(兵庫県小野市)が開発したドライバ―。(中略)**不器用**な人が増えたというより、モノへの執着心が少なくなつて、扱いが雑になっているのかもしれない

(1993年九月九日)

**不器用**な生徒に、ものづくりの感動を(見出し)

靴ひもをうまく結べない、ぞうきんを絞れない、ナイフで鉛筆を削れない、針に糸を通せない……。

子どもたちの手が**不器用**になっていることに、まず気づいたのは中学校の技術科の教師たちだという。

(中略)「手が虫歯になっている」

(中略)「**不器用**な子がこのまま増えれば、日本産業の将来は危ぶまれます。(中略)ものをつくることは手先をしなやかにするだけでなく

(1997年三月二十四日)

一方、「朝日新聞縮刷版」に見られる

「ブキヨウ」の中には、否定的な意味の「ブキヨウ(三)」とは明らかに異なる文

脈や意味で使われているように思われる一群がある。そこで、次はこの「ブキョウ」の意味について検証していく。1940年一月十七日の記事には、次のような書評が見られる。

阿部知二に苦言 **不器用な作家** 深田久弥(見出し)

深田久弥の「知と愛」は、むらな出来だ。この作家は、よく器用な作家といわれるが、それは彼の風貌を一方に思い浮べる者の錯覚で、名を成した中堅作家のうちでは最も**不器用な作家**の人である。例えばこの作家の従軍記を他の作家達の従軍記に比べて読めばよくわかる事だが、彼の**不器用さ**は彼の良心だとさえ言える。

この書評は、小林秀雄が、深田久弥を引き合いにして阿部知二を批判したものである。小林は、阿部が世の情勢の変化を受けて何度も加筆訂正を行ったことに対し、「物事に徹底出来ないかにも現代作家らしい物の考え方の癖がよく出ている」と述べている。この「現代作家らしい」とはどういうことだろうか。小林によると、現代の人々は

例えばAばかりを考えあぐねた末に  
反対のBを得るといふ風な努力をしな  
い

という。小林は、このように物事について考え抜いた末に真理にたどり着くという過程を惜しむ現代人の在り方に異を唱えているのである。特に文学については

僕は、文学というものを、もっと頑固な確信を抱いた人間が歩く道と解したい。(中略) 芭蕉は不易流行を言ったが、周知のように、両方に足を突っ込むというような易しい説き方はしなかった。問題はそれらの源にある風雅というものを極むるにあった。この古風な文学論は少しも古くなっていないように思う

と述べ、作家は一つのことを追究するところが望ましいとしている。そして小林は、深田久弥こそがこの望ましい生き方をしている作家であると言う。この「ブキョウ」は、望ましいと考えられている点で、今までの否定的な意味と異なると言える。確かに、世の変化に合わせて意見を変えることは柔軟で技巧的なことであるから、「ブキョウ」はこれと対をなすものではある。しかし小林は、そうした技巧的なことに終始しては「風雅というものを極」められないと述べているのだから、そうした生き方は本質にたどり着けない表面的なものということになる。よってここでの「ブキョウ」は、融通が利かない、要領が悪いという否定的な意味を超えて、ひたむきだ、実直だという意味で使用されていると言うことが

できる。次の用例は、自身の戦争体験をもとに半死半生の裸体のみを描き続ける画家、知念登治に取材した記事である。

生身の人間にこだわり **不器用**にひたすら描く(見出し)

以来、**不器用**に、いつも人間のからだばかりを描いている。

(1984年一月二十四日)

知念は、買い手のつかない絵を描き続ける理由について、「意識の底にある「戦争」へのこだわりが、人間を描かせるのだ」と自省する。また、食い繋ぐために図工の教鞭をとっている小学校の子供達の絵について、「うまい。ファッショナブルで、スマートで、シャープ」と評する一方「ただ何というか、泥のにおい、汗のにおいがないんだなあ。こだわりを持つていないんだ、たぶん」と述べる。

この用例では、知念の「ブキヨウ」な絵の描き方と、子供達の「ファッショナブルで、スマートで、シャープ」な絵の描き方とが対比されている。知念の「ブキヨウ」に描いた絵とは、買い手がつかず、世間から評価されないものである。しかし、知念はそれを理解した上でもなお、自分の「戦争」へのこだわりを追究し続ける。世間からの評価のために自身の「こだわり」を捨てて「ファッショナブルで、スマートで、シャープ」な絵を描くのではなく、例え売れなくとも「泥のにおい、汗のにおい」を大事にし

ながら絵を描いているのである。よってここでの「ブキヨウ」とは、損得を超越し、ただひたすらに何かを追究する様を指していると言える。次の用例は、あるドラマの登場人物に関する記事に見られる。

**不器用**に生きる男に共鳴(見出し)

周平は、妻とひとり娘とのマイホーム購入を夢見て、酒を断ち、たばこもやらず、一日中仕事に駆け回る愚直な男だ。ある日、妻の夏江(浅田美代子)がパート先のすし屋の板前と駆け落ちしてしまう。落ち込む周平を、周囲はさんざん夏江の悪口を並べたて(中略)慰めるが、周平は慰めを受けるどころか、ケンカしてしまう。長年苦勞を共にしてきた妻を、あしざまに言われることが許せなかったのだ。数日後一時の迷いからさめた妻が戻る。周平も、温かく迎え入れた。

周平は、男のメンツや外聞よりも、妻との二人三脚の再出発を選んだ。周囲の妻への悪口にも耳をかさなかった。妻への信頼からだ。彼はそうした形で家族を、人を愛するとはどういうことかを教えてくれる。**不器用**だが、ぼくとなら男である。

(1989年十一月十七日)

この記事では、いくつかの描写から、周平の人物像が伺える。例えば、「妻とひとり娘とのマイホーム購入を夢見て、酒

を断ち、たばこもやらず、一日中仕事に駆け回る」ということから、家族を非常に大切にしていることが読み取れる。また、周平を慰めようと夏江の悪口を言う人々とケンカしたことからは、周平は心から夏江を愛しているということに加え、周囲との折り合いの付け方が下手な人物だということが分かる。つまり周平は、「男のメンツや外聞」といった世間体よりも、夏江への愛を優先する人物であるとと言える。つまり見出しの「ブキヨウ」に生きる男に共鳴」とは、損をしながらも大切な物のためだけに生きる姿が一つの理想形であるということを示しているのである。よってこの見出しの「ブキヨウ」は、例え損をしても世間に迎合せず、自分の信念や信条を守り通すという実直な様子を指していると言うことができる。一方、この引用の末尾に見られる「ブキヨウ」は、見出しの「ブキヨウ」とは異なる用法である。見出しの「ブキヨウ」は、世渡りが下手であるという意味を超え実直という望ましい様子を指すのに対し、引用末尾では、望ましい様を「ぼくとつ」という語が担っている。そのためここでの「ブキヨウ」は、単に世渡りという行為の下手さを指す「ブキヨウ(三)―②」の用法と言える。次の用例は、政治家の伊東正義への追悼記事である。

頑固に不器用さを貫く(見出し)

伊東正義氏は不器用な政治家であった。器用に立ち回ることが、必ずしも悪徳でなく、むしろ評価される政治の世界で、伊東氏は頑固に不器用さを貫いた。政治が、ある面で「悪人の作業」だとすれば、伊東氏は政治家ではなかった。

(中略)

カビのにおいのする一人住まいの官房長官公邸で深夜、伊東氏が「こんな時の官房長官になるなんて、神様の配慮だったのかねえ」としみじみと語ったのを覚えている。損得でつながることが普通である政治家の世界で、これは稀有(けう)な人間関係だった。(中略)

「不器用さ」の極致は、首相の座をけ飛ばしたことである。竹下登首相がリクルート事件で退陣に追い込まれたあと、その「クリーンさ」を買われて、後継首相に、と押し上げられた時のことだ。首相になりたくなかったわけではない。話が出てから数日間、大いに悩み抜いている姿を私は知っている。一つは持病の糖尿病で耐えられるかどうか。

(1994年五月二十一日)

この記事で特筆すべきこととしては、「器用に立ち回ることが、必ずしも悪徳でなく」という記述から分かるように、器用な立ち回りが一般的に悪徳であるということが前提となっていることが挙げ

られる。そしてこのことから、伊東の人物像が明瞭に読み取れる。例えば、「伊東氏は頑固に不器用を貫いた」という描写からは、伊東が、一般的には悪徳とされるような立ち回りを一切することなく生きたということが伺える。また、「損得でつながることが普通である政治家の世界で、これは稀有(けう)な人間関係だった」という記述やその直前の発言からは、出世への野心が少ないということが分かる。「ブキヨウ」の最たる例とされる、首相の座を固辞したことから同様に、ただ自身が首相としての責務を果たせるかを気にするような真面目で実直な人柄であることが読み取れる。これらのことから、伊東のこうした一見損をしかねない生き様を指す「ブキヨウ」は、最早要領が悪いという意味に留まらず、実直だ、素朴だという意味で使用されると言うことができる。以上のことから、「ブキヨウ」には、「実直だ、素朴だ、ひたむきだ」という、半ば肯定的と言えるような意味があることが分かった。この意味を「ブキヨウ(四)」と呼ぶことにする。

3カ月の見習いを経て前座に上ったのは98年2月。「不器用で、他人にとんちやくくしないで奔放に育った」という一人っ子だ。師匠の着物がうまくたためない、お茶を出そうとしてこぼしてしまふ。寄席の最中にモップを倒したり、コップを割ったりして大きな音をたてたこともある。そのたびに「ばかやろう」という小柳枝師匠の大声や平手が飛んだ。

(中略)

「お前は怒られべた。なんで素直になれないんだ」。小柳枝師匠が口を酸っぱくして繰り返すゆえんだ。

(2002年一月二十三日)

この用例は、ある落語家に取材した記事に見られる。この落語家は、「ブキヨウ」ゆえに師匠に叱られ続けたという。そこで「ブキヨウ」さが伺える具体例を見てみると、まずは「師匠の着物がうまくなためない」「お茶を出そうとしてこぼしてしまう」といったものが挙げられている。しかしこの例だけでは、要領が悪いという気質を指す「ブキヨウ(三)―①」の用法か、手を使う作業が下手な様子を指す「ブキヨウ(三)―③」の用法か判然としない。そこで、他の具体例を見てみると、「寄席の最中にモップを倒した」「コップを割ったりして大きな音をたてた」というものがある。これらの失敗は、手を使った作業が下手だということよりも、要領が悪いという気質による

ものだと考えられる。また、師匠に「前は怒られべた。なんで素直になれないんだ」と叱責されているということからも、この落語家は、叱られないように立ち回ることができない性格の人物であると判断できる。よってこの「ブキヨウ」は、「ブキヨウ(三)―①」の用法と言うことができる。次の用例は、元大相撲力士の舞の海と、バレーボール選手の大山加奈との対談を記録した記事である。

**不器用な私**、1本に集中(見出し)

私、すごく**不器用**なんです。一つの技術を覚えるのに時間がかかる。もう五輪予選までは時間がないので、一本一本に集中して、時間を無駄にしないようにしていかないと。

○息抜きは買い物

——そんな**不器用**な自分を支えてくれているのは？

(中略)相談事は妹(未希)にするのが多いかな。高校の1年後輩で、この春から東レに入社したんです。身長177センチなんですけど、私と違って器用で何でもできるんです。

(2004年四月六日)

この記事では、見出しと本文中との合計三ヶ所で「ブキヨウ」が使用されている。二つ目の「ブキヨウ」を見てみると、一つの技術を覚えるのに時間がかかることの原因として使用されていることが分かる。このことから、二つ目の「ブ

キヨウ」は物覚えが悪いという気質を指していると言うことができる。また、見出しは「一本に集中」もこの一つの技術を覚えるのに時間がかかるということを換言していると考えられる。よって見出しの「ブキヨウ」も、二つ目の「ブキヨウ」と同じ用法と言える。三つ目の「ブキヨウ」は「器用で何でもできる妹と対比されているため、これもまた、要領が悪いという気質・性格を指していること分かる。これらのことから、この記事での「ブキヨウ」は「ブキヨウ(三)―①」の用法だと言うことができる。次の用例は、高校生からの投書を掲載した記事に見られる。

ファストフード店でアルバイトを4月に始めました。大学に入ってからお金をためたいからです。のみ込みが悪く、**不器用**なので失敗続きです。いつの間にか、「すみません」を連発してしまいます。

(中略)

なるほどその通りだと思います。すみませんは謝罪の言葉です。私は感謝の気持ちを伝えようとして、相手に謝罪していた訳です。日頃から先輩に迷惑をかけているという意識が強かったので、知らず知らずのうちに、いつもの口癖が出てしまったのでしよう。

(2005年七月二日)



この用例の「ブキヨウ」は「のみ込みが悪」いことと同列のものであり、失敗続きの原因として考えられていることが分かる。のみ込みの悪さはその人の性質に起因するものと考えられるため、この「ブキヨウ」も同様の性質を指すと言える。また「知らず知らずのうちに、いつもの口癖が出てしまった」という記述からも、体裁を取り繕うことが苦手な性格だということが分かる。よってこの用例の「ブキヨウ」も、人物や事物の要領が悪い、機転が利かないという気質・性質を指していると言える。以上のことから、「朝日新聞 1985」、週刊朝日・

「朝日新聞 1985」、週刊朝日・  
「みちこ」という名前の子がいた。  
（中略）  
その子の名が呼ばれた。と、どうい  
うわけか、私は反射的に「はい」と言  
ってしまったのだ。「失敗した。どう  
しよう」との思いが、頭の中で渦巻い  
た。

「さかねみちこちゃん」と、今度は  
私の名を呼ぶ声がした。しかし、「さ  
つき返事をしてしまったから、もう返  
事はできないのだ」と思い、黙って時  
の過ぎるのを待った。（中略）  
あのときの恥ずかしく情けない気持  
ちを思うと、笑いがこみ上げてくる。  
だが、大人から見れば何でもないこと  
が、子どもにとっては一大事なのだ。  
小学生や幼稚園児を見ていて「な  
ぜ、そんなことを気にするの」「な  
ぜ、そんなことが恥ずかしいの」と言

日ごろ、だれにも言えずに悩んだり  
考えたりしていることなど、とにかく  
すべてを放り出したくて……でも、そ  
れが出来なくて……それがたまりたま  
って理性を失い、あのような事件を引  
き起こしてしまう。そのような可能性  
は、だれにでもあるのではないだろう  
か。きつと彼らは、自分のことをうま  
く扱えず、心の安定を保てなくなった  
不器用な十七歳なのだ。

（2000年五月十三日）

いたくなることが時々ある。

そんなとき、私もまた**不器用**な子どもだったのだと、よく入園式のことを思い出し、自戒するのである。

(2005年五月十五日)

大人になっても雑事の**不器用**さは名人級だ。海外対局に向かう際、出発前

日にパスポートがないのに気づいたり、自宅の住所を覚えていなかったり。

ところが、碁盤の前に座ると一変する。棋風は着実で本格派。「スキのない碁」と評される。ときに激しくぼやくが、決まって優勢を意識してから。逆転されるのを警戒して自らを励ます。

(2000年十月十三日)

大学時代、NBAにあこがれ米国でテストを受けた。当時、日本にプロリーグはなく、第一線は日本リーグ機構の社会人チーム。「仕事をしながらバスケもやるのは、**不器用**な自分にはできない」と、本場でバスケットにかけようとした。

(2008年一月二十四日)

**不器用**だから家庭と作家の二足のわらじははけない、と独身を通した。

「作品は私の子ども」と言う。

(2011年一月七日)

次は、「朝日新聞 1985」、週刊朝日・AERA」での「ブキヨウ(三)―②」の用法について検証する。

雑事にとんちやくせず、天衣無縫な豪傑に見える。だが対局となると慎重で細心、「囲碁界で、最も用心深い男」といわれる。二面性が奇妙に同居する新名人の素顔は――。

(中略)

この用例は、棋士の依田紀基について書かれた記事である。依田は、雑事にとんちやくしない人物と述べられており、その具体例として「海外対局に向かう際、出発前日にパスポートがないのに気づく」、「自宅の住所を覚えていな」い等が挙げられている。一方、碁盤の前に座ると「着実で本格派」の棋風の人物になるとされている。ことから、依田は何事にも「ブキヨウ」な性格というわけではないと言える。よってこの記事の「ブキヨウ」は、性格・性質を指す「ブキヨウ(三)―①」の用法ではなく、雑事の悪い出来についていうものであると言うことができる。次の用例は、父母の家に住んでいる既婚女性からの投書を掲載した記事に見られる。

現在、「パラサイトファミリー」です。自分の実家に、夫と娘の3人で厄介になっています。

(中略)一つには、子どもが生まれて育て方に自信がなかったためです。そのほかの理由もありますが、自分にとって絶対的な理由も、一般的には単なる甘えでしかないと認識もしていません。

(中略)

私は、自分のペースでしか自立の道を探れないという現実には、少しあせりすぎていたことに気づきました。

私のパラサイト生活はまだ当分続きます。**不器用**に生きる私を、辛抱強く見守ってくれる両親に対し、感謝の気持ちを忘れたくありません。

いつの日か必ず、明るい笑顔でまた「行ってきます」と言えるように、強くなりたい。そして今度は、私自身が娘の帰る場所になりたいと思っています。

記事に「自分にとって絶対的な理由も、一般的には単なる甘えでしかないと認識」「自分のペースでしか自立の道を探れないという現実には、少しあせりすぎていた」「いつの日か必ず、明るい笑顔でまた「行ってきます」と言えるように、強くなりたい」等とあることから、投稿者は現在の自身の生き方を望ましくなくものと考えていることが読み取れる。この用例の「ブキョウ」は、生き方そのもの

のを望ましくないと形容していることから、生き方という行為が下手だ、上手くないということを指す用法であると言いうことができる。次の用例は、ペット同伴の訪問活動を行うための資格を認定する機関へ取材した記事である。引用部は、資格試験の一部と、その活動の成果を述べたものである。

**動物が不器用**になでられたり、怒鳴

り声があつたりしても大丈夫かという適性テストと、お座りができる、人込みの中を歩くなどの技術テスト……。こうした2段階を経て、資格認定を受けた動物と飼い主8千組が、年間100万人以上とふれあう。動物嫌いだつたお年寄りや子どもが、「そつとなどで」とリードされて触ると「あたくかくて気持ちいい」と心を開く。「動物が人の健康にもたらす効果を世界に伝えたい」

(2006年七月十二日)

この試験の目的は、動物の扱いに慣れない人に撫でられても平気であるか、雑踏の中でも歩くことができるか等を見極めることだと思われる。つまり、不慣れなごちない撫で方にも平気であることが求められているのである。よってこの記事の「ブキョウ」も、巧拙の観点から動物の撫で方という行為を形容するものであると言いうことができる。これらの用例から、「ブキョウ(三)―②」は「朝日新

聞 1985)、週刊朝日・AERA」でも変わらず用いられていることが分かる。この用法は、以下の記事にも見られる。

塩漬けされたワカメの葉の中心部の「芯」を左手に持ち、右手で両側の葉をはがしていく。

社長の母喜美子さん(82)がすすると芯を抜いていく隣では記者の手元でワカメが次々とちぎれていく。

「**不器用**だね。中国の人はうまかったよ」

(2008年三月二十三日)

越前松島水族館で、ゴマフアザラシの赤ちゃんが一般公開されている。白いふわふわの毛に包まれ、黒く丸い目で母親のアグリの姿を懸命に追う。**不器用**ながらも泳ぐ姿が愛らしい。

(2014年四月三日)

1次産業を体験する総合学習で、昨年次いで2回目。生徒たちは、指導漁業士の山根幸伸さん(56)から手ほどきを受け、作業に挑戦した。

最初は**不器用**だった専用ナイフの扱いにもすぐに慣れ、この日早朝に山根さんが宮古湾で揚げた養殖カキ約800個を、手際よくさばいた。

(2014年五月十六日)

次は、「朝日新聞 1985)、週刊朝日・AERA」における「ブキヨウ(三)―③」の用法について検証する。

手先の**不器用**な私は障子張りは大の苦手である。張り替えを一日延ばしにして、昼でも雨戸を閉めて過ごしていたが、ある時、知人から「入院なさっていたのですか」と尋ねられた。(中略)

アイロンの熱で付く、新しい様式の障子紙を4枚分買ってきた。まずは古い紙を破り、ぞうきんでふき、2、3時間置いて乾くのを待つ。以前はこれから先は夫の仕事だったが、今はすべて自分でしなければいけない。紙をカッターで切り、棧から落ちないように載せ、中温にセットしたアイロンをかけた。が、アイロンの先が水平でなかったらしい。箸でついた程度、破れず。次もまたやった。3枚目からは破らずに張れた。

(2001年四月十二日)

この記事は、ある女性からの投書を掲載したものである。この女性は、手先が「ブキヨウ」なために障子張りが苦手であると述べている。その障子張りの過程を見てみると、紙を破る、雑巾で拭く、紙をカッターで切る、棧に載せる、アイロンをかける等、細かい作業が多く見られる。中には道具を使うものもあるが、「手先」が」とあることから、道具自

体の使い方よりも、それらの行為のために共通して必要な手そのものの使い方を「ブキヨウ」と表現していると考えた方が良いだろう。障子張りに苦手意識を覚えるのは、これらの行為が不得意なためと考えられる。また実際に、何度かアイロンのかけ方を間違った描写も見られる。よってこの「ブキヨウ」とは、細かい作業をこなすための手の使い方が下手だということを示していると言える。次の記事は、息子を持つ母親からの投書である。

便利さが**不器用**な子増やす？

(見出し)

小4の息子の水筒が水漏れするようになったので買いに行ったが、便利さと不便さの間ですごく迷った。最新のワンプッシュじか飲みの方は、ふたを開けるのに力も手間もいらぬ。

子どもから今、「ひねる」という動作が失われつつある。タッチパネル全盛だ。指を動かす機会までが日々、奪われている。思えば、ほんの少し前までは水道もドアノブも、ひねらなければ使えなかった。しかし、今は軽く押す、押し上げるだけ。これが子どもの日常に影響を与えないはずがない。

わが子の友だちを見ていると、こまを回せなかったり、折り紙がきちんと折れなかったりする子がかなりいる。バリアフリーの家の子は、わが家の3

センチほどの敷居でつまずいて大転びする。

さて水筒だが、ここはあえて、不便なふた付き水筒を買った。ひねるという小さな動作が手先の器用な日本人の未来を支えてくれると信じて。

(2010年二月十六日)

この用例では、見出しに「ブキヨウ」が使用されている。この見出しの「便利さ」とは、一押しで蓋が開く飲み物や小限の動きで済むタッチパネルの普及等を象徴していると分かる。投稿者は、これらの普及によって指を動かす機会が減った結果、こまが回せない子や、折り紙がきちんと折れない子が増えたと述べている。このことから、見出しは「便利なものの普及によって手を使った作業が下手な子供が増えたのではないか」という意味だと解釈できる。よってこの「ブキヨウ」は、手の使い方が下手である様子を指していると言える。次の用例は、就学前の児童に字の書き方指導をする教室について書かれた記事である。

教え方は独特だ。まず、大きく書いた白抜きのひらがなの中を、えんぴつをぐるぐる回しながら塗りつぶしていくことで運筆を学ばせる。いまの子どもは、靴ひもを結ぶことなども減り、指先を昔ほど使わなくなったため手先が**不器用**になっている、として考えつ

いた。背筋の伸ばし方や両足のそろえ方なども徹底して身につけさせる。

(2007年九月十五日)

基本的には今も昔も子どもは変わりませんね」と話していた。

(2003年一月二十七日)

この指導者は、字形を覚えさせる前に、まず運筆の仕方を学ばせるという手法をとっている。運筆指導から始める理由としては、子供達の手が「ブキヨウ」になっているからだと言う。またその指導者は、子供達の手が「ブキヨウ」になってきている原因として、靴紐を結ぶ機会の減少等を例に、指先を使わなくなっているためと推察している。指を使わなくなれば、当然使い方が下手になると言える。よってこの用例の「ブキヨウ」も、手や指の使い方が拙い様を指していると言うことができる。以上見てきたように、「朝日新聞 1985」、週刊朝日・AERA」でも「ブキヨウ(三)―③」の用例が見られた。また、「ブキヨウ(三)―③」は以下の記事でも用いられている。

簡単に木ごまを回していた子どもも、ベーゴマになると苦戦。何回か練習するうちに回せるようになり「やったー」との歓声があがった。

山形市立第十小学校3年の伊藤壮太郎君は「こま回しは、ほかの人ができないので自慢できる」と、はりきっていた。このほかあやとりも楽しんだ。

講師役を務めた同センター職員の奥山章一さんは「昔の子どもより手先が**不器用**になっているが、吸収するのは早い。

結局おもちゃ屋さんで交換してもらった。手先が**不器用**なので苦勞しながら何とかラッピングを終えた。押し入りに奥深くしまい込みながら、ふと幸せな気持ちになった。

(2004年十二月十八日)

雨のなか、ふと折り鶴を折ろうと思いついた。きれいな折り紙でつくって失敗しても恥ずかしいので、手帳の切れ端を使って挑戦。手先が**不器用**で、折り方も心もとない。

(2005年三月二十八日)

私は小さい頃から手先が**不器用**で、工作や絵が大の苦手だった。小学校の参観日には、図画工作の作品が教室の後ろに並べられるので大変苦痛で、もつと器用だったらよかったのにとクラスメートが羨ましくて仕方なかったものだ。

(中略)

ある日のこと、中1の次男に「料理の上手なお母さんだったらよかったのにねえ」と愚痴をこぼすと、「でもお母さんは文章を書くのがうまいよ。投

稿が新聞に載るもん！」と褒めてくれた。私はその言葉に胸がジーンとなり、まるで先生に褒められた生徒のようにうれしかった。

(2007年十一月二十八日)

脳性小児まひの影響で左半身に軽いまひがあり、幼い頃から何をするにも右手のみ使っていた。そのせいでだんだんと左手の力がなくなり、両手でキーを打つことができない。(中略)

私は手先が**不器用**だし、脳も元気な人ほど発育していないが、脳は鍛えるほど大きくなると医師が言っていた。校正士の資格を取り、就職につなげたという目標もある。出来ることに挑戦する心を忘れずに日々精進したい。

(2013年十月二日)

節約から履き始めて今までは素足だったが、これからの季節は五本指の靴下をはかないといけないだろうか。だが、五本指の靴下をさっとはけず、自分の**不器用**さに笑ってしまう。げたは夏だけにしようかと考え中だ。

(2016年十月十九日)

最後に、「ブキヨウ(四)」の意味が「朝日新聞 1985〜、週刊朝日・ABRA」でも見られるか検証する。

楽しみだったのは、片思いの彼に会えること。私はマネジャーで彼は選手という少女マンガにありがちな関係で、トラックをひた走る彼に恋い焦がれた。照れくさいくらいに恋だった。

途中でみんなが席を移動し始めると、たまたまなかどうか、私は彼の横に座ることに。「今、彼女いるの?」。さっき他の人との会話に聞き耳を立てていたので答えは知っていたし、普通の同級生として口がきけるだけで十分だった。当時は意識するあまり、話がとぎれないようにネタ帳まで用意したほどで、こうして気楽に話せることがうれしかった。

あれからいくつか恋愛をし、結婚ばかりか離婚まで経験した私は、あの手この手で好きな人を振り向かせられないこともないと思う。

でも、彼に対してだけは**不器用**なままでいたい。

(2001年十二月二日)

この用例は、高校時代にマネジャーを務めた陸上部のOB会に出席した女性からの投書である。この記事の「ブキヨウ」とはどのような意味で用いられているのだろうか。まず「不器用なまま」とあることから、過去にも「ブキヨウ」だったことがあるということが分かる。そこで「ブキヨウ」だった過去の描写を探すと、「片思い」や「当時は意識するあまり、話がとぎれないようにネタ帳まで

用意した」等の記述が見られる。「片思い」という記述からは、相手に自身の恋慕の情を伝えることができなかったことが示唆される。また、「ネタ帳まで用意した」という描写からは、相手と自然に話すことができないうため、苦肉の策を用いることで何とか話そうと努力したことが伺える。またこれらのことから、投稿者は、高校時代に意中の男性と上手く話したりその後関係を発展させたりすることができなかつたことが分かる。次に、「あれからいくつか恋愛をし、結婚ばかりか離婚まで経験した私は、あの手この手で好きな人を振り向かせられないこともないと思う。」という記述について見てみる。この記述からは、この投稿者は「あの手この手」を使って恋を成就させることができるようになったことが分かる。「あの手この手」とは、様々な技術を身に付けたということであるため、「ブキヨウ」と対比されていると言える。しかし、投稿者は「普通の同級生として口がきけるだけで十分だった」と述べているように、現在のその男性を「振り向かせ」るつもりがないと思われる。また、「ブキヨウ」にしか付き合えなかったはずの「片思い」の男性との再会を楽しみにしていることも分かる。よってこの投稿者は、「ブキヨウ」を肯定的なものとしてとらえていると言える。そして、この「ブキヨウ」は技巧的と対比されているため、ここでは小細工をしながら、飾らないという意味で使われている

とすることができる。次の用例は、能登の酒造りを取材した記事である。

99年には、能登の旅館、水産業者らと組んで、東京・銀座に能登料理の居酒屋を開いた。店名は「のとだらぼち」。能登の方言で、「鈍くさいが、不器用」に正直さを貫く人」という意味だ。二十数席の店内には、能登の夏祭りを彩るキリコ灯籠（どうろう）の写真や、行事のポスターが飾られている。

（2002年五月二十九日）

この「ブキヨウ」は、能登の方言を冠した店名の説明に見られる。ここでは「鈍くさい」と対比的に用いられていることから、完全な否定の用法である「ブキヨウ（三）①」とは異なると言える。また、「のとだらぼち」という言葉は店名としても用いられていることから、悪い意味ではないと思われる。よってこの「ブキヨウ」は、単に正直さの貫き方が下手だということを指すのではなく、それを超えて下手だけその様が良いという肯定的な意味合いで使われていると言えることができる。次の用例は、元大相撲力士の初代貴ノ花の追悼記事である。

親方は若貴ブームでも、離婚や兄弟の不仲など家庭問題で騒がれた時でも、押しかける取材陣に誠実に対してきた。



たばこを立て続けに数本ふかした後、心の中で整理した言葉をとつとつと並べていく。それが希代の人気力士の美学と**不器用**さを映していた。

(2005年六月三日)

この記事での「ブキョウ」は、「美学」と並んで人気の要因として挙げられている。この「ブキョウ」の指すと思われる行為を見ていくと、話題の良し悪しに関わらず押し掛ける取材陣に誠実に対応したことや、言葉をとつとつと口にするこゝと等が該当する。前者からは、「誠実」とあるように、質問攻めを巧みにいなすのではなく、例え時間がかかっても一つ一つに丁寧に対応したということが伺える。後者も、表面上の美辞麗句ではなく、下手なりに真心のこもった言葉を口にしたというように描かれている。これらのことから、この「ブキョウ」は、巧みではないという意味を超えて、実直だ、素朴だという肯定的な意味を持っていると言える。次の用例は、演歌歌手の大江裕に取材した記事である。

大阪・堺の駅前ビルにあるレコード店。新人歌手、大江裕がミニライブで、デビュー曲「のろま大将」(日本クラウン)を聞かせた。平日の昼間なのに、店内は見物客であふれた。

(中略)

堺でのミニライブの前に緊張感が漂う大江に話を聞いた。好きな言葉を

「人にやさしく、自分にやさしく」と自らに言い聞かせるように挙げた。

「のろまでも、ええやん」。そう感じさせる愚直さ、**不器用**さも魅力に映る時代なのだろうか。

(2009年五月八日)

この用例でも、「ブキョウ」は「愚直さ」と同列に扱われている。またこの「ブキョウ」は、本来は悪い意味であるはずの「のろま」を「ええやん」と思わせるような魅力の要素であると述べられている。このことから、この「ブキョウ」も、悪い意味を超越し、それでもいいと思わせるような素朴な様、実直な姿を意味すると言いうことができる。これらの用例から、「朝日新聞」(2005)、週刊朝日・「**ABRA**」でも「ブキョウ(四)」の意味が使われ続けていることが分かった。「ブキョウ(四)」は、以下の記事にも見られる。

講演会に行く機会は多いのですが、井伏鱒二のような、**不器用**で、誠実さを感じさせる講師には、その後、めぐりあったことがあります。

兼好は、対話の仕方についてのよしあしを、次のように述べています。

「よき人の物語する(教養のある洗練された上品な人が、話をする)」時は、「人あまたあれど、一人に向きという(人がたくさんいても、その中のひとりに向かって話す)」ようにする

ので、自然にほかの人も聞くようになると思います。

(中略)

せかせかとした現代、井伏鱒二のよ  
うな、聴衆に媚びず、もの静かに語り  
かける誠実な人が、今は求められてい  
るのではないかと、思います。

(2002年一月五日)

「花束やプレゼントを差し出して、  
『おめでとう』と言ってくる夫がい  
いと思う？ それは若いうちのこと。  
まめでよく気がつき、社会的でスキの  
ない人がそばにいたとしたら、あなた  
疲れない？」と先輩。

「疲れるでしょうね」と私。何でも  
やりこなすスキのない男性は立派だ  
が、私は苦手だ。

「疲れない生活をするには、相手が  
**不器用**であつた方がいいのよ。そう  
いう人ほど一本気で、真心のある人  
だと思うわ。実はうちもそうだけ  
ど、あなたのどんな様もそのタイ  
プ。幸せなことよ」。病床にいても  
頭のさえている先輩は、ありがたい  
誕生日メッセージをくれた。

**不器用**な彼の表情や態度から、古  
女房への気持ちを感じ取っていき  
た。これからのキーワードは、以心  
伝心だ。

(2005年六月九日)

**不器用**な男の真骨頂は馬力だ。角界  
有数の稽古の厳しさを誇り、小手先で  
投げる相撲を取ると厳しく叱られる春  
日野部屋で培われた。

(中略)

書き初めに「大関」としたためた年  
男は、年初の場所を6勝9敗と負け越  
した。「稽古して、もつと体を大きく  
したい」。悔しさを払拭するには、愚  
直に鍛錬するしかない、分かっ  
てる。

(2011年一月二十七日)

だが、自分の思いをびっしり紙に書  
いて、助けを求める**不器用**でまじめな  
姿に「助けてあげなきゃ」と気になっ  
て仕方がなくなった。「夢にまで見た  
子は、あの子くらいよ」

(2012年六月十九日)

透谷は時流に流されることなく、自  
分と自分のいる時代を相対化して批評  
する人だった。それができたという意  
味で、初めての近代人だったと言っ  
ていい。

小田原文学館に立つ「北村透谷に献  
す」と彫った碑を見た。武骨でとがっ  
た石を積み上げてある。透谷という人  
の**不器用**な切れ味を表現しているよう  
だ。

(2015年三月十三日)

以上述べてきたように、朝日新聞で使用されている「ブキヨウ」には、まず否定的な意味を表す用法として次の三つがあることが指摘できる。

- ・「ブキヨウ(三二)①」……ある人や物の性格や性質を指す用法
- ・「ブキヨウ(三二)②」……ある行為や事物を巧拙の観点から評価する用法
- ・「ブキヨウ(三二)③」……特に手や指を使った細かい作業をこなす技術や、手や指の使い方そのものの巧拙を指す用法

これらの用法には、要領が悪い、物事への対処が下手だという意味が共通して見られる。よって否定的な「ブキヨウ(三二)」とは、「要領が悪い、物事への対処が下手だ」という意味であると言うことができる。他方、例え「ブキヨウ(三二)」だとしても、その「ブキヨウ(三二)」な生き方を貫く姿がかえって美化・称賛される場合がある。その場合の「ブキヨウ」は、否定の範疇を超え「実直だ、素朴だ、ひたむきだ」という肯定的な意味合いを帯びたものとして用いられている。よって「ブキヨウ」には、否定の意味以外にも「実直だ、素朴だ、ひ

たむきだ」という肯定的な意味が見られるということが指摘できる。

### 第三項「ブキリョウ」の表記について

1879年から1899年までの新聞を閲覧できる「朝日新聞縮刷版」で「不器量」の検索に該当した記事は十四件(うち記事本文内での使用が見られたのは十三件)である。しかし十三件の使用例全てが「ブキリョウ」と読まれているわけではなく、1890年四月十六日の記事から1914年二月二十一日までの記事には「ふきりょう」のルビが見られる。

好男子の**不器量**ふきりょうさ  
(1890年四月十六日・見出し)

愛子の**大不器量**だいふきりょう  
(1892年十二月九日・見出し)

勇巴津の**不器量**ふきりょう  
(1893年十月十三日・見出し)

**不器量**ふきりょうくじん  
(1899年三月三十一日・見出し)

**不器量**くらへと題する項中に

(1899年四月三日・見出し)

後釜の補充難に一遍 肘鉄砲を喰わ  
されたり **不器量**の数々(見出し)

家橋の**不器量**ばなし

(1900年八月一日・見出し)

この用例では「不器量」にルビが振られておらず、ここから初めて「ブキリヨウ」と読む可能性が出てきたと言える。その次の用例にもルビ振りは見られないが、この記事は

親の不注意から小供を**不器量**に

(1924年十一月十八日・原文ママ)

家橋の**不器量**ばなし(つづき)

(1900年八月二日・見出し)

という、読売新聞にも見られた本の広告

家橋の**不器量**ばなし(つづき)

(1900年八月四日・見出し)

である。前節第三項で述べたように、この本の本文の「不器量」には「ふきりょう」のルビが確認できる。そのため、この時期には少なくとも「フキリヨウ」と読む意識が残っていたことが伺える。次に「不器量」もしくは「無器量」の表記

望小太の**不器量**

(1900年八月三十日・見出し)

が見られる記事は、1934年八月十七日の

**不器量**更生

海軍**不器量** 松本中将転任

(1914年二月二十一日・見出し)

という見出しである。この記事は「朝日新聞縮刷版」で「不器量」表記がされている用例としては最後である。一方「朝日新聞縮刷版」では、一件のみだが「無器量」の使用も確認できる。

**無器量** 指導性はむしろ邪魔

(1981年三月四日・見出し)

次に「不器量」もしくは「無器量」が見られる用例を見ると、1921年四月七日の記事が該当する。

大鉈を振上げて 悩める市長

この用例は、当時の政治の在り方を批判する記事である。この記事では、首相には首相たる「器」があつて然るべきだと述べられている。しかし、その「器」が無い人が指導者であっても政治が存続するということは、その制度に問題があるのだと主張している。このことから、ここで「無器量」と表記されたのは、「器量」の有無という点について強調するためだと思われる。

以上のように、「朝日新聞縮刷版」では「不器量」は「無器量」より優勢であつたことが認められるが、少なくとも検索結果の「不器量」の半数が「フキリョウ」という読み方をされていたことも分かつた。

次に、「朝日新聞 1985」、週刊朝日・AERA」での「不器量」及び「無器量」の検索結果を見てみる。こちらのカテゴリでは、「不器量」が三十一件、「無器量」が三件該当した。「不器量」表記された記事の一部を以下に引用する。

まあお話の世界だから、主人公が**不器量**じゃおもしろくないわけだが、ど  
の話も美しいことと、人柄が良いこと  
が、まるで相関関係があるように書か  
れているのが何とも気持ち悪い。

(1993年九月一日)

ジョンの**不器量**からノルマンディー  
を失う。しかし、プランタジネット王  
朝は一三九九年まで英国を統治した  
(1996年五月五日)

森氏のあまりに明白な**不器量**の反動  
で、国民の多くは為政者に一層強力な  
リーダーシップやより高い道徳性を望  
むようになってしまった。

(2001年三月十一日)

だが、たいそう**不器量**で結婚相手に  
恵まれなかった。

(2004年二月十四日)

「こんな**不器量**が」素顔でステー  
ジに立って、どうなるのですか」と言  
い返したそうだ

(2007年八月十二日)

鏡に映る政治の姿の**不器量**に、与党  
も野党もたらーり脂汗を流す。

(2011年七月六日)

私は**不器量**だったからか、地味で代  
わり映えのしない洋服ばかりだった。

(2015年七月十五日)

これらのことから、「不器量」表記は「無器量」表記に比べて使用数が多いと言うことができる。

最後に朝日新聞(1985)、週刊朝日・AERA」で「無器量」で表記された記事を確認する。「無器量」表記が見られる記事には、投書や読者から送られた俳句・川柳を載せたものが多い。

**無器量**な 猫が二月の 路地急ぐ

(1998年二月十九日)

**無器量**な 南瓜ゴロリ 庭に成る

(1999年八月二十八日)

この二つは、それぞれ俳句を掲載した「俳壇」、川柳を掲載した「柳壇」という記事である。三件の用例の内もう一つの例は、投書を掲載した記事である。

一代一人(いちにん)の相伝なり。  
たとい、一子たりと云うとも、**無器量**  
(ぶきりよう)の者には伝うべからず。  
家、家にあらず。次ぐをもて家とす。  
人、人にあらず。知るをもて人とす

(2007年十一月二十二日)

投稿者は、世阿弥の「風姿花伝」からの言葉を用いている。

以上から、朝日新聞では「不器量」表記が一般的であり、「無器量」表記は、意図的なものか新聞社外の人物が表記し

た記事でのみ見られることが分かる。また1890年頃から1914年頃までは「ぶきりよう」とルビが振られていることから、当時は「不器量」を「フキリヨウ」と読む意識が強かったと言える。そして1921年四月七日の記事以降「ぶきりよう」のルビが見られなくなったため、「ブキリヨウ」と読むようになったのは少なくともそれ以後のことだと思われる。

#### 第四項 「ブキリヨウ」の意味・用法について

この項では朝日新聞で使用されている「ブキリヨウ」の意味を検証するが、読売新聞と同じく、「不器量」に「フキリヨウ」とルビが振られた用例も検証の対象とする。

「朝日新聞縮刷版」に見られる「フキリヨウ」もしくは「ブキリヨウ」で最も古いのは1890年四月十六日の「好男子の**不器量**さ」という見出しの記事である。その内容は、ある教師が、友人が懇意にしている芸者に惚れ、その芸者を口説くというものである。教師はその芸者には振られてしまうが、諦めずに他の芸者を口説き続ける。そして失敗する度に「天下の芸者を廃すべし」と考えながら、なおも懲りずに芸者を口説き続け

る。見出しの「不器量」は、教師のこうした滑稽で情けない生き方を指すものであると思われる。次の使用例は、1892年十二月九日の記事であり、その見出しは「愛子の大不器量」（ふきりよら）である。この記事

の内容は、愛子という女性が男と駆け落ちしたというものである。ところが、出前の身でありながら女と遊ぶのは一生の欠点であると考えた男に行方を晦まされてしまう。愛子は何とか上自宅へ帰ろうとするが、その道を間違え遠回りしてしまった。見出しの「不器量」は、利己的な男と駆け落ちしてしまったことと、自宅への帰路を誤ったことの二つの失態を象徴していると言える。続けて「フキリヨウ」または「ブキリヨウ」の用例を検証していく。

### 勇巴津の不器量（ふきりよら）

（1893年十月十三日・見出し）

この記事では、自他共によい腕と認める勇巴津という太夫の高座での一連の様子が述べられている。講演の最中に酔った夫婦から野次を飛ばされた勇巴津は、自身の演技で夫婦の度肝を抜いてやろうと思ひ、身に付けた衣装も震えるほどの大声を出す。その声に委縮した夫婦を見て勇巴津は勝ち誇り立ち上がるが、その際

に鴨居に頭を打ち、高座の外に倒れこんでしまう。見出しの「フキリヨウ」は、勇巴津が鴨居に頭を打ち、その拍子に高座から転げ落ちてしまった不格好な姿を指しているものと思われる。次は、

### 不器量（ふきりよら）くじい

（1899年三月三十一日・見出し）

という用例を見てみる。この記事は、三遊亭花円遊と雷門助六という二人の落語家のそれぞれの「フキリヨウ」を紹介するものである。一人目の三遊亭花円遊は、一人の母親に自分の娘を弟子入りさせて欲しいと依頼され、その支度を口実に母親らの家に向かう。花円遊は下心から、娘と共に母親の世話も引き受けようとするが、母親には「物の美事に勿附けら」れてしまう。一方の雷門助六は、世間からの人気はあるものの、常に師匠の付き人として行動を共にすることに不満を覚えている人物である。ある日助六は変装し一人で街へ出掛けるが、酒に酔って騒ぎを起こしてしまう。しかし店の女将らに馬鹿にされ、涙ぐみながら勘定を払わされる。ところが、所持金は勘定の半分もなく、勘定すら払うことができなかつたという結末を迎える。よつてこの記事の「フキリヨウ」は、下心を見透かされ女性に拒絶される姿や、酔って騒ぎを起こした挙句勘定も払えない姿等の痴態を意味すると言える。次に「フキリヨ

ウ」または「ブキリヨウ」が見られる例は

不器量ふきりようくらべと題する項中に

(1899年四月三日)

という記事であるが、これは先の「不器量くらべ」という記事の一部を訂正する文を掲載しただけである。次の用例は、

家橋の不器量ふきりようばなし

(1900年八月一日・見出し)

という記事である。また、同年の八月二日及び八月四日にもこの記事の続きが見られるため、この項では同一の用例として扱う。この一連の記事では、市川家橋という歌舞伎役者の色恋沙汰が取り上げられている。世間からの人気を独り占めする家橋は、多くの女性と浮名を流し、遂におこいという女性を娶る。しかし梅香という芸者に浮気心を抱き、おこいの目を盗んで梅香と密会しようとする。竹柴賢二と尾上梅助という二人の協力を得てどうか梅香と会うことに成功した家橋だが、梅香は他の男に操を立てており体よくあしらわれてしまう。梅香に振られた家橋は失望し、「坊主にでもなりたい」と塞ぎ込む。見出しの「フキリヨウ」とは、散々小細工したにも関わらず結局振られてしまった家橋の情けない姿を指していると思われる。またこの

八月四日の「家橋の不器量ばなし(つづき)」には、協力者の賢二と梅助が協力の見返りとして好きなだけ遊ばせてもらうという話が続く。梅助は、賢二と共に、予てから思いを寄せていたおゆうという芸者の元へ行く。有頂天の梅助だったが、賢二がおゆうと夫婦の契りを結んでいたことを知り、

当年は家橋を始めそれがしまで何うして女運が向かぬやら俳優甲斐もない程に不器量ふきりようのみが続く

と嘆き悲しむ。梅助のこの言葉からも、「不器量」が、ぬか喜びしていた自身の醜態を指していると考えられる。次の「フキリヨウ」または「ブキリヨウ」の使用例を見ると、

望小太の不器量ふきりよう

(1900年八月三十日・見出し)

という見出しに確認される。この望小太という愛称の人物は、「当世第一の気障男」と噂される政治家である。ある日、望小太は前後不覚になるほど酒に酔い、一軒の料理屋に立ち寄る。そこで気を良くした望小太は、いつも懇意にしている芸者を呼ぶよう主人に命じるが、その芸者に呼び出しを断られてしまう。強かに酔って奇声を上げていた望小太は、使いからその旨を聞いて逆上し、料理屋の女



中に関係を迫る。しかし結局女中には逃げられ、使いの小僧には嘲笑され、その上世間には悪名が広まってしまふ。この用例でも、「フキリヨウ」とは、悪名を広める程の醜態を晒したことを象徴していると言える。次の記事は、旧日本海軍の中将らが贈収賄事件に関与していたことが発覚した事件を報じた記事である。

#### 海軍 ふきりよう 不器量

松本中将転任

(1914年二月二十一日・見出し)

この記事だけでは事件の全貌は分からないが、「司法側の糾弾峻厳なる」「身荷も鎮守府長官の現職に在る高級武官に対して突然家宅搜索を為す」「緩慢の譏を免れざるは今更致方なき」等の記述から、相当な非難の目を浴びていたことが伺える。この「フキリヨウ」も、世間から厳しく非難される要因となった汚職事件のような失態を指していると考えられ、これまでの「フキリヨウ」と同じ意味であると言える。次に「フキリヨウ」または「ブキリヨウ」が見られる用例は、

大鉦を振上げて 悩める市長

後釜の補充難に一遍 肘鉄砲を喰わさ

れたり **不器量**の数々

(1921年四月七日・見出し)

という当時の東京市長に関して書かれた記事の見出し文である。まず、本文に「遠大な計画を樹立して一切の東京を現像すると意気込」んでいるとあることから、市長の計画の実現が成功するか疑問視されていることが分かる。加えて、本文からは市長が積極的に鹹首を行っていたことも分る。見出し文の「大鉦」とは、「首切り」の執行を比喻したものである。ところが道路局長等の後任がなかなか決まらず、多方面に就任を交渉したり、果ては既に辞職させた者にまで復職を要請したりしているという。このことから、見出しの「不器量の数々」とは実現が疑問視されるほどの計画や、「やっさもっさ」と揶揄される人事等を象徴していると言うことができる。ところが、この「ブキリヨウ」の意味は二通りの解釈ができる。これまでの記事のように、実現が危ぶまれる計画を立てたり辞職済みの人に復職を頼んだりする姿を「醜態、痴態」と形容していると考えられる一方、「器量」本来の意味である「その地位や役割を全うすることができるかどうか」という観点からみた、「能力・力量」を打ち消しているとも解釈できる。これは次章で考察する。このように、朝日新聞で見られる「フキリヨウ」または「ブキリヨウ」の意味の一つに、「醜態、痴態」という意味があると言える。

次に、「フキリヨウ」または「ブキリヨウ」の二つ目の意味を検証する。1934

年八月十七日に、以下のような記事が見られる。

**不器量**更生(見出し)

ダンゴ鼻でも忽ち美人に(見出し)

パリ随一の美容家として欧米に知ら

れているアントワン氏が、最近「性格

美容術」と銘打った新手法をもって、

**不器量**な婦人なら、**不器量**な程それ

だけ却て美しい容貌に変化させるとい

うので嘆きの婦人達が遙々海を越え

て、アントワン研究所を訪れるという

盛況である。アントワン氏の宣言によ

ると、**不器量**の極と美人の極の両極

は一致するのだそうで

この用例では、「不器量」は徹底的に

「美」と対称的に用いられていることが

分かる。例えば二つの見出しからは、

「不器量」から「美人」へという、変化

前の状態と変化後の状態として対称的

である。また「不器量」な程それだけ却

て美しい容貌に変化」、「不器量」の

極と美人の極の両極」等の表現からも、

「不器量」は「美」と正反対の意味で用

いられていると言うことができる。

「美」の対称的な意味は「醜い、容貌が

悪い」等であるから、「ブキリヨウ」ま

たは「ブキリヨウ」の意味の一つに、

「醜い、容貌が美しくない」というもの

があると言える。しかし、「朝日新聞縮

刷版」でこの意味が見られるのはこの一件のみである。

「朝日新聞縮刷版」で「ブキリヨウ」

が使用されている記事は次が最後である。

る。

**無器量** 指導性はむしろ邪魔

(1981年三月四日・見出し)

この見出しの記事は、政治の指導者とし

て必要なもの及び当時の政治そのもの

について論じたものである。前半は、政治

の指導者たる首相が持つべき「首相らし

さ」について述べている。この記事の主

張する「首相らしさ」とは、

ふつう「将に将たる器」などとい

う、あれである。単に頭がいいとか、

法律知識があるとか、経歴が華やかだ

とか、大きな派閥のなかにいるなどと

いう具体的に数えあげられる力にな

く、その上に「器」がある

というように、ある人物をその身分たら

しめる器や度量のことを指している。こ

れは、来田氏の指摘する、「その地位や

役割を全うすることができるかどうかと

いう観点からみた、能力・力量」という

「器量」本来の意味であると言える。後

半では、一転して政治の指導者がその

「器量」を持つ必要性について次のよう

に述べられている。

問題はその器ではない、指導者らしくない人が指導者の地位に座ったことが不都合だという点にあるのではない。逆に、そうでない人が座っても、ちつとも不都合がないということが問題なのである。

(1999年二月二十一日)

つまり見出しの「無器量 指導性はむしろ邪魔」とは、「今(当時)の政治は、本来指導者として持つべき「器量」を持っているとかえって不都合になってしまうため、本末転倒だが、その「器量」は無い方がよい」と解釈できる。よってこの記事の「ブキリヨウ」とは、「与えられた役割を遂行するための才器が無い様」を意味していることができる。

次に、「朝日新聞 1985」、週刊朝日・「AERA」での「ブキリヨウ」の意味について検証する。

この行成の女性観は、清女を意識しているように感じられます。清女の鼻が横にあぐらをかいていたかどうかはわかりませんが、こうした女性の美醜について、話せる仲は、よほど心が通じていなければ、できないことです。

先日、行成さまが真顔で、「「こうした簾越しでなく、お顔ぐらい見せなさい」とおっしゃるの。「不器量な人は好きになれないと、いわれたではありませんか」と、おこたえしたら、「そこまでおっしゃるなら、ホントに憎らしくなりますよ。じゃ、お顔を見せな

さるな」と、それ以後、わたしの姿が見えると、「顔ふたぎ」をなさるのよ。

でも、今朝、「いみじく。名残なくも見つるかな」と、いわれたわ。寝起きの顔をのぞかれたのよ。

(1999年二月二十一日)

この用例は、藤原行成と清少納言とのやりとりを紹介した記事である。この用例からは、まず行成と清少納言が女性の美醜について話したことがあるということが分かる。また、清少納言が行成の「お顔ぐらいみせなさい」という言葉に対し「ブキリヨウ」な人は好きになれないと、いわれたではありませんか」と答えていることから、この「ブキリヨウ」は顔に関する意味であると考えられる。美醜について話した相手に対し「ブキリヨウ」な人は好きになれないと、いわれたではありませんか」と答えるということから、清少納言は、行成が醜い人を好きではないと解釈していると思われる。よってこの「ブキリヨウ」は顔が醜いという意味だと言える。次の用例は書評欄に見られる。

R・ダール著『王女マメリア』

**不器量**な王女が17歳になった朝、目もくらむような美女に変身していた。美しさは力。それゆえ次第に優しさを失い……(表題作)。

(1999年二月二十二日)

「ブキリョウ」な王女が美女に変身するということから、この「ブキリョウ」とは、美しくなる前の姿、つまり見た目が醜い様を意味すると考えられる。次の用例は、青森県の名所を紹介する記事である。

浪岡町五本松にある羽黒神社。鳥居の奥の雪深い斜面を下ると、昔、**不器量**な姫が顔を洗って美人になったという伝説の「美人川」が流れている。だが、雪の下にたまった水は流れがなく、藻に覆われていた。

(2004年二月十四日)

この用例でもまた「ブキリョウ」から美人へと変化するとあるため、「ブキリョウ」とは美しくない容貌という意味であると言える。これらの用例から分かるように、「朝日新聞 1985」、週刊朝日・AERA」でも、「ブキリョウ」には「醜い、容貌が美しくない」という意味があると言っている。この意味の「ブキリョウ」は、以下の記事でも使用されている。

まあお話の世界だから、主人公が**不器量**じゃおもしろくないわけだが、どこの話も美しいことと、人柄が良いことが、まるで相関関係があるように書かれているのが何とも気持ち悪い。

(中略)

親指姫なんか、自分がちよつとかわいいと思つて、カエルが気持ち悪いだのモグラがいやだのと相手をより好みしちゃうのだ。

こういうお話を、器量のいい子もそうでない子も、みんな好きだというのは、おもしろい。

(中略)

それにしても「美人であるかどうかは問題ではない。要は中身だ」というお話こそ、もつと読まれてほしいと思うのは、私が子どもの感覚を忘れてしまった、そして**不器量**の自覚がはつきりしたおばさんだからなのだろうか。

(1993年九月一日)

彼は神経質で怒りっぽく、私は**不器量**でぐずなのに、彼は女狂いをしないで49年間、あまりけんかもしないで暮らした。

(2002年一月十六日)

「お前は**不器量**だから若さで勝負だよ」が母の口癖だった。

半世紀以上前、私は鉄の会社の厚生課厚生係に栄養士として勤めていた。母は盆暮れになると私を連れて課長さん、係長さんのお宅を訪問した。「こんな娘ですが、どなたかよい方がいらしたらお願いします」と頭を下げた。

(2002年十二月一日)

海山の守護神オヤマツミの娘だから、海を渡ってきた落人にふさわしいと思ったからだ。「山の神は**不器量**」という説もあったが「この神さんはべっぴんや」と触れまわった。「20年もしたら、うそも本当にならない」と知人は笑った。

(2004年五月三十日)

**不器量**超えて美にあこがれ 私の古傷(見出し)

子どものころ「器量が悪い」とよく言われた。色が真っ黒だったらしい。しゅうとめらにいじめられ、つらいことの多かった母は、醜い赤ん坊の私の将来を憂えて、「一緒に死んでやりた

い」とも思ったそうだ。(中略)

このことがずっと忘れられなかっただけに、私は子どもの容貌(ようぼう)を褒めることはあっても、決してけなしたりはしない。

思春期を迎えた小学5年のころ、鏡をながめながら「そんなにひどい顔立ちだろうか」と考え直したのが良かった。少々色は黒くても、少女雑誌のモデルに似ていると言われたのがきっかけだった。

とはいえ、細くなるようにウエストを縛って寝たり、白いクリームを塗っ

たりして、「美」へのあこがれは消えなかったが。

いま、腹部にドデンと贅肉を積んで、美には遠い身を恥じつつも、「美しさ」へのあこがれは捨てられずにいる。一步外へ出ると、背をしゃきっとさせて歩く私がいる。

(2004年七月十八日)

平時と変わらぬドレスで舞台上に立ち、流行歌を歌った。アイシヤドーに真っ赤な口紅、つけまつげ。「不謹慎だ」と憲兵が怒鳴ると、「こんな**不器量**が素顔でステージに立って、どうなるのですか」と言い返したそうだ

(2007年八月十二日)

女の顔は、表札だ。それなりに生き様を宿して人に向かっていく。**不器量**でも醜女でもいい。私は、顔は人生の宝だと思う。

せめてみずみずしさだけでも残して、と願い、今日も化粧水を真剣にたたきつけている。

(2009年二月二十七日)

ハンサムで快活な弟は皆に愛された。だが、**不器量**なやなせは「暗くてシャイな性格に」なり、取り柄は絵を

描くことが大好きなことぐらいだった。

(2013年十二月一日)

私には2歳違いの妹がいる。子ども時分、色白で日本人形を思わせる彼女は、母にとってかわいいう着せ替え人形だったのかもしれない。私は**不器量**だったからか、地味で代わり映えのしない洋服ばかりだった。

(2015年七月十五日)

次に、「醜い、容貌が美しくない」という意味以外の「ブキリョウ」について確認する。

夫の死後三男リチャード一世、ついで五男ジョンを英国王とし、八十を超える高齢まで彼らの王国経営を八面六臂の活躍で支えたものの、ジョンの**不器量**からノルマンディーを失う。

(1996年五月五日)

この用例は、ドニ・ド・ルージュモンの作品である「恋愛と西欧」の書評に見られる。この「ブキリョウ」は、長年守り続けた国土を失うことになった原因として用いられている。国王の使命の一つに領土の保全があるということを考え、王と、領土を失ってしまったジョンは、王としての使命を果たすだけの能力が不足していたと言うことができる。よってこ

の「ブキリョウ」は、与えられた使命や役割を遂行するだけの資質や能力が不足している様を意味していると考えられる。次の用例は、当時の首相である森喜朗が事実上の退陣を発表したことを受けた記事である。

森喜朗首相もついに抗し切れなくなったようだ。しかし、混迷の度を深める政治を作り出したのは、自民党そのものである。

(中略)

いまの政界を見渡したとき、高度の政治的倫理観、強靱な意思、政策面での識見の卓越さを備えた政治家を見いだすことは難しい。とはいえ、首相らしさの演技ぐらいはできよう。それすらできずに、失言・失態を繰り返したのが森首相である。とすれば、五人組も思惑はずれであったろう。

しかし、この結果は、選ばれた方がみが政治リーダーとしての資質を欠いていたのではない。(中略)

この間の無様な政治的迷走は、森退任後にも重大な負の遺産、禍根を残すだろう。

第一は政治家の個人的資質への過度の注目である。

森氏のあまりに明白な**不器量**の反動で、国民の多くは為政者に一層強力なリーダーシップやより高い道徳性を望むようになってしまった。

(2001年三月十一日)

この記事での「ブキリョウ」は、事実上の退陣に至った原因として使用されている。まず「いまの政界を見渡したとき、高度の政治的倫理観、強靱な意思、政策面での識見の卓越さを備え」ているべきだとされていることが分かる。また、そうでなくとも、それらを持ち合わせているように見せかける演技力だけでも持つていて欲しいと言われている。しかし「それすらできずに」とあるように、森は、首相に求められるこれらの力を持っていない、もしくは力を発揮できなかったために退陣に至ったと言いうことができる。よってこの記事の「ブキリョウ」は、求められる資質や能力を持つていない、もしくはそれらを発揮できない様を意味すると考えられる。次の用例は、当時のプロ野球選手会がストライキを決行したことに関する記事である。

「ドラゴンズファンの一人として  
は、優勝目前のストなんて冗談じゃない、という気持ちはある。でも、ファンの気持ちをないがしろにした今のままのプロ野球では先行きは暗い」

経営コンサルタントの男性（62）  
は、「経営者が不器量だ。世の中は自

由競争。参入を認めない社会はよどむ」と球団経営者に批判的。別の参加者も「選手すら満足させられないのに、お客さんを満足させられるわけがない」

（2004年九月七日）

ここでの「ブキリョウ」は、球団の経営者に対して用いられている。この引用からは、球団経営者は、選手達やファンを満足させることが要求されていることが分かる。しかし、ストライキが決行されたということから、選手達は球団に満足していないと思われる。また、このストライキが決行されたことで観客やファンは残念がっていることも伺える。よってこの球団経営者は、求められている役割をこなせていないと言いうことができる。これらのことから、この記事での「ブキリョウ」も、求められる役割を遂行するための能力が欠けている様を意味すると言える。以上の用例から、「朝日新聞 1985、週刊朝日・AERA」に見られる「ブキリョウ」には、「与えられた役割を遂行するための資質や能力に欠ける様」という意味もあることが分かった。この意味は、以下の記事にも見られる。

祖父の元首相をよりどころにした安倍氏からのバトンタッチに、室町時代の『風姿花伝』の一節が頭をよぎる

この能楽の秘伝書は、子々孫々に奥義を授ける上で、へたとえ一子たりと

いうとも、**不器量**の者には伝うべからず〜とくぎを刺した。そして、「血統が続くのが芸の家ではない。芸の神髓が続くのが芸の家である」と、勘所を突いている

「芸の家」を、「政界」に置き換えれば分かりやすい。国民にとっても、続いてほしいのは血筋ではあるまい。政治家の神髓とも言うべき、高い志や、強い責任感のはずである

きのうの記者会見で福田氏は、自民党は国民の信頼を得ていない、と繰り返し、強い責任感のはずである

(2007年九月二十四日)

スピード感も辞任ではなく復興にこそ欲しいのに、発揮場所が違う。それに、これほど誰もが当然視し、身内でも庇いようなない放言辞任も少ないだろう。

(中略)

野党の追及がわりと静かだったのは、あまりの体たらくに政敵まで情気てしまったからか。鏡に映る政治の姿の**不器量**に、与党も野党もたらりり脂汗を流す。このガマの油、何の傷にも効きそうにない。

(2011年七月六日)

には、「醜い、容貌が美しくない」という意味と、「与えられた役割を遂行するための資質や能力に欠ける様」という意味の二つが共通して見られた。また、「朝日新聞縮刷版」においては、「醜態、痴態」と思しき意味も見られた。

以上述べてきたように「朝日新聞縮刷版」と「朝日新聞 1985〜、週刊朝日・ABERA」で使用されている「ブキリョウ」



## 第四章 「ブキヨウ」「ブキリョウ」

### に関する考察

#### 第一節 「ブキヨウ」の表記・意味

##### について

前章では、読売新聞及び朝日新聞での「ブキヨウ」の表記・意味について検証してきた。

読売新聞では、「不器用」と「無器用」の混在が続いた後、一時的に「無器用」が優勢になった。しかし1972年以降、一部を除いて「不器用」表記が主流になったということが分かった。

朝日新聞でも、「不器用」と「無器用」の混在期を経て、一時的に「無器用」が優勢になるものの、1974年一月二十四日の用例以降は基本的に「不器用」で統一されているということが分かった。

これらのことから、1970年前後に「不」または「無」、もしくははその両方に関連する何らかのできごとがあったと考えられる。電子辞書版『新漢語林第二版』の「不」の項には、以下のような解説が見られる。

「不気味・不器量・無精(ブシヨウ)」など、否定を表す「ブ」の本来の表記は、おおむね「不」であった。ただ、昭和二十三制定の「当用漢字音

訓表」では「不」には「フ」はあるが「ブ」はなかった。「不気味・不器量」などを「無気味・無器量」などと書き換えることが行われた。この書き換えは現在も残っているが、昭和四十八年に「当用漢字音訓表」が改定され、「不」に「フ」と「ブ」の音が掲げられたので、これ以後、「不」を用いることが一般的となっている。なお、「音訓表」に関係なく「不精・無精」「不粹・無粹」「不様・無様(ブザマ)」などは以前から両様の表記が行われており、また「無遠慮・無作法・無愛想」などは「不」を用いることはほとんどない。

この解説と、本論文での「ブキヨウ」の表記についての調査結果とは概ね合致する。このことから、1970年代前半から「不器用」表記が一般的になったのは、「当用漢字音訓表」の改定の影響によるものと考えられる。実際に昭和四十八年六月十八日の内閣訓令を見ると、

不 フ 不当、不利、不賛成  
ブ 不作法、不用心

とある<sup>[36]</sup>。年代もほぼ合致することから、「当用漢字音訓表」の影響を受けていることは確かだと言える。しかし、一度「無」表記に書き直したのならば、「不」に「ブ」の音が認められてもそのまま「無」表記で統一すればよかった

ように思われる。特に、「ブキヨウ」は古くから「不」表記と「無」表記が混在しており、「不」表記のみが一方的に用いられていたわけではない。そうであるならば、一度「無」表記に統一したにも関わらず「不」表記に統一し直したのはなぜだろうか。

それは、「不」に統一した当時既に、「器用」に用言性が強く認められていたからではないだろうか。

第二章で述べたように、「器用」は古くは名詞として用いられ、「ブキヨウ」も「無器用」と表記されていた。これは、「無」が体言性を持つ語を否定するものだという意識が強かったからであると言われている。また、「ブキヨウ」等が「不」「無」両表記を有するようになったのは、語基の品詞性が曖昧になったこと、「不」と「無」が否定の接頭辞として混同され始めたこと等によるものだとされている。語基の品詞性が曖昧になったというに関しては、来田氏の「器用」は次第に形容動詞として用いられるようになった」という指摘と合致する。しかし、「不」と「無」が混同されるようになったという点についてはどうであろうか。第二章で述べたように、野村氏らの研究から、

- (一) 接頭辞「不」は動詞と接続しやすい傾向にあり、それよりは少ないが形容詞・形容動詞・副詞や名詞とも接続することがで

きる。

- (二) 接頭辞「無」は、名詞と接続する傾向が強いが、動詞とも接続できる。

- (三) 接頭辞「無」は形容詞・形容動詞・副詞とは接続しない。

ということが分かった。確かにこの結果から、「不」と「無」は一部似通った用法として扱われていると言える。しかしその反面、「不」と「無」本来の用法<sup>[1]</sup>がある程度使い分けられているとも言えないだろうか。つまり、「不」が主に動詞に接続することや、「無」が主に名詞に接続する傾向があることは、「不」と「無」を本来の用法で使おうという意識が失われきっていないことの表れとも考えられる。それゆえに、「当用漢字音訓表」改定当時に「用言である「器用」を否定する「ブキヨウ」の表記は「不器用」であるべきだ」と考えられたとしても辻褄は合う。しかし、本論文では「器用」の用法に関する調査を行っていない。従って「不器用」に表記を統一し直した当時、「器用」に用言性が強く認められということは推測の域を出ない。今後の課題としたい。

次に、「ブキヨウ」を意味の面から考察していく。読売新聞では、「物事の処理が下手だ、要領が悪い」という否定的な意味「ブキヨウ(一)」と、「小細工をしない、実直だ、素朴だ」という半ば肯定的と言えるような意味「ブキヨウ

「(二)」との二種類が見られた。さらに「ブキヨウ(一)」は、

術や、手や指の使い方そのものの  
巧拙を指す用法

・ 「ブキヨウ(一)―①」……ある人物  
や事物の気質・性質を指すもの

の三種類が見られた。

これらの結果から、「ブキヨウ(一)―

・ 「ブキヨウ(一)―②」……巧拙の観  
点から行為や事物のやり方・出来を  
指すもの

と「ブキヨウ(三)」、及びそれぞれの用  
法は同じものだと言うことができる。ま  
た、「ブキヨウ(二)」と「ブキヨウ

・ 「ブキヨウ(一)―③」……特に手や  
指そのものの動かし方についてや、  
手や指を使った細かい作業をこなす  
技術の巧拙についていうもの

(四)」も同一のものであると言うことが  
できる。よって「ブキヨウ」には、「要  
領が悪い、物事への対処が下手だ」とい  
う否定の意味と、「実直だ、素朴だ、ひ  
たむきだ」という肯定的な意味との二つ  
があると言える。否定的な意味はさら  
に、

という三つの用法に分けられた。

一方、朝日新聞では「要領が悪い、物  
事への対処が下手だ」という意味の「ブ  
キヨウ(三)」と、「実直だ、素朴だ、ひ

①ある人物や事物の気質・性質を指す  
もの

たむきだ」という意味の「ブキヨウ  
(四)」の二つが見られた。「ブキヨウ  
(三)」には、

②ある行為や事物のやり方や出来を巧  
拙の観点から評価・形容するもの

・ 「ブキヨウ(三)―①」……ある人物  
や事物の気質・性質を形容する用法

③手を使って細かい作業をこなす技術  
の巧拙や、手や指の使い方そのもの  
を評価するもの

・ 「ブキヨウ(三)―②」……ある行為  
や事物を巧拙の観点から評価する用  
法

という三つの用法を持つ。次に、「ブキ  
ヨウ」の意味について、次の三つの観点  
から考察していく。

・ 「ブキヨウ(三)―③」……特に手や  
指を使った細かい作業をこなす技

一つは、肯定的な意味の用法について  
である。肯定的な意味の「ブキヨウ」  
は、読売新聞と朝日新聞のいずれでも見  
られた。しかし、先述したようにこの意

味は比較的近年から使用され始めた。そのため、読売新聞の「明治・大正・昭和版」と朝日新聞の「朝日新聞縮刷版」のそれぞれで肯定的な意味が使用された例は少なく、用法の分類が困難だった。そこで、ここで出典を横断しながら分類してみた。結論から言うと、肯定的な意味の「ブキョウ」は、人の性格・氣質を指す用法と、ある行為のやり方や出来を指す用法との二つあると言うことができる。人の性格・氣質を指す用法としては、

上君が立っているという感じで、独特のものだ

(1968年十二月十九日・読売新聞)

不器用な人物像(見出し)

書物信仰の権化のような先輩は、徹底してまじめで融通がきかない。すでに「共産主義は国際社会においては全体主義の同義語となりつつあった」時代だ。

(1991年十月二十四日・読売新聞)

阿部知二に苦言 不器用な作家深田久弥(見出し)

深田久弥の「知と愛」は、むらな出来だ。この作家は、よく器用な作家といわれるが、それは彼の風貌を一方に思い浮べる者の錯覚で、名を成した中堅作家のうちでは最も不器用な作家の一人である。例えばこの作家の従軍記を他の作家達の従軍記に比べて読めばよくわかる事だが、彼の不器用さは彼の良心だとさえ言える。

(1940年一月十七日・朝日新聞)

河上君は酒をひとつ飲むのでも、小器用な人ではなく、はなはだ無器用だが、とうとうこの無器用を自分のものにしたな、という気がする(中略)吉田松陰という青年のそばに、無器用な河

伊東正義氏は不器用な政治家であつた。器用に立ち回ることが、必ずしも

悪徳でなく、むしろ評価される政治の世界で、伊東氏は頑固に不器用さを貫いた。政治が、ある面で「悪人の作業」だとすれば、伊東氏は政治家ではなかった。

(1994年五月二十一日・朝日新聞)

彼が若いとき、この「時代おくれ」は似合っていなかった。中年になり、人生経験が増すなかで彼そのものになつていった。昨年、テレビのフルオーケストラの前で歌った「時代おくれ」を聞いたときは、自然と熱き涙がほおを伝った。彼の歌は、いぶし銀である。華々しいきらめきは似合わない。はにかみながら時代を追いかける不器用な男が、あなたに似合っている。

(2001年六月十五日・読売新聞)

講演会に行く機会が多いのですが、井伏鱒二のような、**不器用**で、誠実さを感じさせる講師には、その後、めぐりあったことはありません。

(2002年一月五日・朝日新聞)

**不器用**な息子は落ちた友だちに「ジュース飲む？」と言った後、無言で今まで一緒にいたという。

自分さえよければという風潮の最近にあつて、ハラハラドキドキとひきかえに、息子から心のあり方を教わった気がした。

(2006年二月十二日・読売新聞)

「のろまでも、ええやん」。そう感じさせる愚直さ、**不器用**さも魅力に映る時代なのだろうか。

(2009年五月八日・朝日新聞)

役柄に共感した点は？との質問に、関西弁のイントネーションでこう答えた。まっすぐで**不器用**、ウソがつけない。重なる部分は、決して少くない。

(2013年五月八日・読売新聞)

等が該当する。一方、行為のやり方や出来を指す用法としては、

生身の人間にこだわり **不器用**にひたすら描く(見出し)

以来、**不器用**に、いつも人間のからだばかりを描いている。

(1984年一月二十四日・朝日新聞)

小細工を捨て、**不器用**に生きること  
：男のあらまほしき生きざまなのかもしれない

(1984年九月三十日・読売新聞)

**不器用**に生きる男に共鳴(見出し)

周平は、妻とひとり娘とのマイホーム購入を夢見て、酒を断ち、たばこもやらず、一日中仕事に駆け回る愚直な男だ。ある日、妻の夏江(浅田美代子)がパート先のすし屋の板前と駆け落ちしてしまう。落ち込む周平を、周囲はさんざん夏江の悪口を並べたて(中略)慰めるが、周平は慰めを受けるどころか、ケンカしてしまう。長年苦労を共にしてきた妻を、あしざまに言われることが許せなかったのだ。数日後一時の迷いからさめた妻が戻る。周平も、温かく迎え入れた。

周平は、男のメンツや外聞よりも、妻との二人三脚の再出発を選んだ。周囲

の妻への悪口にも耳をかきなかった。妻への信頼からだ。彼はそうした形で家族を、人を愛するとはどういうことかを教えてくれる。

(1989年十一月十七日・朝日新聞)

ウ(三)―②」に属すると考えられる。しかし、「ブキヨウ(一)―②」及び「ブキヨウ(三)―②」は具体的な行為の巧拙のみを指す用法である。以下にその一例を引用する。

店名は「のとだらぼち」。能登の方  
言で、「鈍くさいが、不器用に正直さを貫く人」という意味だ

(2002年五月二十九日・朝日新聞)

あいかわらず定年後も不器用に生きる日本男子の一つの典型(中略)タマエをふりかざして周囲を疲れさせたりする

(1982年四月十二日・読売新聞)

「近代化とはなにか、グローバル化はなにを要求してくるのか、曖昧なまま流されるのではなく不器用にぶつかって考えないと、結局自分がそのつけを払わされる」

(2014年五月十一日・読売新聞)

等が該当する。これらの用法は、否定的な意味の用法①②と全く同じだと言うことができる。

二つ目の観点は、否定的な意味の「ブキヨウ」の用法③についてである。直前に述べたように、否定的な意味の用法①と②は、肯定的な意味の用法と対応関係にある。それでは、否定的な意味の「ブキヨウ」の用法③をどのように位置付ければよいのだろうか。前章の「ブキヨウ(一)―③」及び「ブキヨウ(三)―③」の検証の際にも述べたが、これらは広義的には「ブキヨウ(一)―②」及び「ブキヨウ

一方、「ブキヨウ(一)―③」及び「ブキヨウ(三)―③」は基本的には「手先が「ブキヨウ」のようにと手や指の下手な使い方を指すが、手や指の使い方が下手だというある人物の気質や性格を指すことも多くある。以下はその一例である。

不器用人間は、小さなローラーが二本ついた「シガレット・ローリング・マシーン(たばこ紙巻き器)」(四百円)で巻く。

(1982年十二月三日・読売新聞)

本当にそう。縫い物も編み物も、**器用**な私には縁のないことだと思いついでいたけれど、やれば出来るじゃない。

(1891年三月十七日・読売新聞)

これは、「手先が「ブキヨウ」等のように、②の用法が特に手の使い方について使われることが多かったために、次第に「手先」と言わなくとも手の使い方について言うものだという暗黙の了解が生じていったのだと思われる。つまり、否定の③の用法は本来②の用法の一部でしかなかったが、あまりに手の使い方と言及する用法として使われ続けた結果、「手」の使い方が下手だ」という意味に限り①の用法の性質を持つようになったということである。用法③と別に扱ったのはこのためである。即ち、③はやはり派生的な用法であり、「ブキヨウ」は①と②の用法を基本とするということが言える。肯定的な意味の「ブキヨウ」が形容する対象が、否定の意味の「ブキヨウ」が指す対象と同じであることもその傍証である。また近代以降の国語辞書を見ると、「ブキヨウ」には①と②の用法と別に③を扱っているものも多く見られる。以下に一部を引用する。

事ヲ行フニ巧ナラヌコト。遅鈍。

(言海第四卷)

器用デナイコト。巧ミデナイコト。

(日本大辞書)

わざのつたなきこと。器用ならざること。てぎわのよからぬこと。劣手。

(辞林)

一、器用ならざること。わざのつたなきこと。手ぎわ悪しきこと。  
二、卑劣なること。同義に背くこと。さもしきこと。

(大日本国語辞典第四卷)

(器用の反)事ヲ行ウニ巧ナラヌコト。技ノ拙キコト。スルコトノ下手ナルコト。ブキツチョウ。拙劣。

(大言海第四卷)

一、手ぎわのよくないこと。  
二、人道にそむいていること。卑劣なこと。

(新版広辞林)

手先の技術がへたなこと。ぶきつちよ(う)。**廻器用**

(三省堂国語辞典第三版)

- 一、器用でないこと。わざの拙いこと。手ぎわの悪いこと。また、そのさま。ぶき。ぶきつちよ。ぶきつちよう。
- 二、道義にそむくこと。ふつごうな  
こと。また、そのさま。

(日本国語大辞典第二版第十一卷)

手先でするわざがまずいこと。また一般に、器用でないこと。ぶきつちよ。

(岩波国語辞典第七版)

一方、一部の辞書にある「道義に背くこと」という意味は、読売新聞・朝日新聞共に使用が確認できなかった。

また、肯定的な意味の「ブキヨウ」は、どの国語辞書にも確認できなかった。それでは、なぜ否定的な意味の「ブキヨウ」が肯定的な意味に転じてきているのだろうか。これが三つ目の観点である。その理由の一つには、「器用」なことへの反発があると思われる。「器用」は「要領がいい」という意味があるが、これは時に「八方美人」や「芯が通っていない」等と同義に扱われることがある。以下はその一例である。

伊東正義氏は**不器用**な政治家であった。器用に立ち回ることが、必ずしも悪徳でなく、むしろ評価される政治の

世界で、伊東氏は頑固に**不器用**さを貫いた。政治が、ある面で「悪人の作業」だとすれば、伊東氏は政治家ではなかった

(1994年五月二十一日・朝日新聞)

「したいことをして食べてゆく」、そんな理想が手に入らないことを思い知った後、人はいったいどんな道を歩むのか。器用に「安定」へと舵を切るのか、**不器用**に「したいこと」を追い求めるのか。この映画の主人公は、後者を選びながら、なおかつ「本当にしたいこと」の前で迷い、悩み、もがいてゆく。これは、そんな彼が、青臭く真つ当に迷い続けることを思い定めるまでの物語だ。

(2004年二月十九日・朝日新聞)

この用例のように、「器用」とは自分の信念を貫かないものとして考えられている側面があると言える。つまり、こういった意味の「器用」であるくらいなら、実直でありたいという価値観が生まれ、「ブキヨウ」に肯定的な意味合いを付与していったのではないだろうか。また、何かが優れている人が自らを「ブキヨウ」と称し謙遜する例も多い。

天才だなんて……。いやですね。それじゃあ、涙も流さない、努力もしない人間みたいで。(中略)ぼくは**無器**



用ですよ。一つことをやるのにも、人の倍くらいかかっちゃう。(中略)シリたたかれて練習して、打てるようになって

(1967年十一月九日・読売新聞)

現時点でスターになるにはどうしたらいい？NHKの大河ドラマに出演する事か、でもそれはそれが放映されている時だけだし、歌がうたえて(ヒット曲がもてて)、踊りが踊れて、演技モチロン、司会もこなせて、外国語の一つもしゃべれて、豊富な知識を持って、社会総合評論もできて、しかもそれを誇示するか、ケドラレズにサラッとしてるか(中略)

お互い不器用で先述のどれ一つ満足にこなす事も出来ず、「大変だなア」の一言。

(1972年九月二十六日・読売新聞)

オレ、不器用だけど……(見出し)  
オレは(相撲の)かけひきができるほどうまくないし、これからは、がむしやりにけいこをして力をつけたい。

(1978年五月二十五日・読売新聞)

不器用、じっくり練って50年

(見出し)

ど不器用だったから当然即妙に答えられず、テレビにはあまり出なかつた  
(1993年二月十一日・朝日新聞)

これらの「ブキヨウ」は、自分で自分のことを「うができない性格である」と言っている以上、「ブキヨウ(一)―①」や「ブキヨウ(三)―①」の否定的な用法ではある。しかし、それを見聞する第三者は、「ブキヨウ」だから努力するという姿に感銘を受け、また努力の結果「ブキヨウ」を克服することに感動を覚えるのではないだろうか。こうして謙遜の際に「ブキヨウ」が使われていった結果、否定の意味を超えて「実直だ、小細工しない、ひたむきだ」等という意味として受け入れられていったのだと思われる。

## 第二節 「ブキリヨウ」の表記・意味について

読売新聞では、「ブキリヨウ」の表記には「極醜悪」、「醜婦」、「不容貌」等の当て字が多く使われていた。また、1922年四月二十二日までは「ふきりよう」のルビが振られており、「ブキリヨウ」の表記としてこれらが用いられていたわけではないと思われる。明確に「ブキリヨウ」という語が見られるのは、1924年七月十一日の用例以降である。

朝日新聞でも、1914年二月二十一日の用例までは「ふきりよう」のルビが見ら

れた。そしてその次の1921年四月七日の記事から「ふきりよう」のルビが見られなくなった。そのためこの時期から「ブキリヨウ」という語の表記として「不器量」が使用された可能性が出てくる。「ブキリヨウ」と明確に読まれるようになったのは、1981年三月四日の記事の見出しに「無器量」表記が見られて以降であると言える。

両紙とも、「ふきりよう」のルビが見られなくなった時期はほぼ同じである。また、国語辞書に「ブキリヨウ」という語が初めて登場するのもほぼ同じ時期である。

(日本大辞林(1894))

ふきりよう 不器量  
一、才能の無きをいう、凡器におなじ。  
二、容貌の醜きをいう。

(帝国大辞典(1896))

ふきりよう 不器量  
一、才能の無きこと。凡器。  
二、容貌の醜きこと、美貌ならざること。

(日本新辞林(1897))

ふきりよう 不器量 不艶容  
醜、みにくき。又無能ちえなき  
(和漢雅俗いろは辞典(1889))

ふきりよう 不器量  
一、才能ナキコト。凡器。  
二、容貌ノ醜キコト。醜。  
(言海第四卷(1891))

ふきりよう 不器量  
一、才能なきこと。器量乏しきこと。  
二、容貌の醜きこと。みめよからざること  
(辞林(1907))

ふきりよう 不器量  
一、才能ノ無イコト。凡器。  
二、容貌ノ醜イコト。醜。  
(日本大辞書(1893))  
ふきりよう 不器量  
一、器量なきこと。才能乏しきこと。  
二、容貌の醜きこと。みめあしきこと。  
(大日本国語辞典第四卷(1919))

ふきりよう 不器量  
きりようのわるきをいう。

ふきりよう 不器量

一、才能ナキコト。器量ノナキコト。凡器。

二、容貌ノ醜キコト。醜。

(大言海第四卷(1936))

ふきりよう 不器量

一、器量のないこと。才能の無いこと。

二、容貌の醜いこと。顔の美しくないこと。みめのよくないこと。

ふきりよう。

(大辞典 第二十二卷(1936))

『和漢雅俗いろは辞典』から『大言海』に至るまでは「不器量」表記の見出し語は全て「フキリヨウ」のみだった。しかし、1936年刊行の『大辞典』には、「フキリヨウ」の項の中に「ブキリヨウ」とある。辞書の編纂という都合上、「フキリヨウ」の項に「ブキリヨウ」を加えることになった要因は、当然刊行よりも前にあったと考えられる。そのため、1936年以前に、「フキリヨウ」と読む意識が強かった語を「ブキリヨウ」と読ませる何らかの出来事があったと考えられる。しかし一方、「ブキリヨウ」と読むようになつた時期の一致が単なる偶然という可能性もある。これもまた、今後の課題としたい。

ただし、「不」と「無」の優劣関係は概ね「ブキヨウ」と同じ傾向を示し

た。よって「ブキリヨウ」も先に引用した『新漢語林第二版』の例に漏れないと言える。

次に、意味の面から考察する。本論文では、「フキリヨウ」も「ブキリヨウ」と同じ語の可能性が鑑み、検証の対象とした。

その結果、読売新聞では「フキリヨウ」「ブキリヨウ」共に、「醜い、容貌が美しくない、またその様」という意味で用いられていることが分かった。「フキリヨウ」の当て字は、「醜い、容貌が美しくない、またその様」という意味の意識によるものだと言える。

一方、朝日新聞では、「醜い、容貌が美しくない」という意味と、「与えられた役割を遂行するための資質や能力に欠ける様」という意味との二つが共通して見られた。しかし、「朝日新聞縮刷版」でのみ、「醜態、痴態」と思しき意味も見られた。

まずは、「フキリヨウ」及び「ブキリヨウ」の「醜い、容貌が美しくない、またその様」という意味が指す範囲や対象について考察する。これらの語が見られる用例の大半は女性に対して使われていたが、

オヤジはぼくがあんまり無器量だから里子に出したっていうんですよ。

(中略) ボクを生んでくれた母親をうらんだこともあるくらいです。ほんとうにへんな顔でしょう。

(1964年一月十六日・読売新聞)

ハンサムで快活な弟は皆に愛された。だが、不器量なやなせは「暗くてシヤイな性格に」なり、取り柄は絵を描くことが大好きなことぐらいだった。

(2013年十二月一日・朝日新聞)

のように男性に対しても使われていた。さらに、

閻魔の顔見世 不繚致は流行らぬ

(見出し)

閻魔も 不繚致では人が相手にせぬ

(1910年七月十七日・読売新聞)

深海魚 不器量だけど 敬遠する主婦も減って

(1979年九月十四日・見出し・読売新聞)

無器量な 南瓜ゴロリ 庭に成る

(1999年八月二十八日・朝日新聞)

等の用例のように、人間以外に対しても使用されている。次に、この意味の「フキリヨウ」もしくは「ブキリヨウ」が指し示す「醜い」の対象について確認しておく。先の1964年一月十六日の俳優に

取材した読売新聞の記事に見られるように、「ブキリヨウ」は顔の造作に限定して使用される場合もある。しかし、「頸に大いなる瘤がある」(1875年七月二十七日・読売新聞)、「背が横に高く髪は茶褐とか云う手数の掛た色を帯び」

(1887年一月二十九日・読売新聞)というような描写も見られる。このことから、「フキリヨウ」及び「ブキリヨウ」は特に女性について用いるが、男性や人間以外の物も対象とするとと言える。また、特に顔の造作について用いられる場合が多いが、広義的には、全身の見た目について言うものだと考えた方が適切だと思われる。

最後に、「朝日新聞縮刷版」に見られた「醜態、痴態」と思しき意味について考察する。この意味が見られる用例には、世間からの知名度が高かったり世間から高い評価を受けたりしている人物について用いられているという共通点がある。「好男子の不器量さ」(1890年四月十六日・見出し)では、この男は「好男子」呼ばれており、また社会的地位が比較的高いと思われる教職に就いている。

「勇巴津の不器量」(1893年十月十三日・見出し)の勇巴津は、世間から良い腕だと認められている太夫である。「不器量くらぐ」(1899年三月三十一日・見出し)には、娘を師事させようとする程度には名の知れていると思われる三遊亭花円遊と、「似ぬ声色を売物にして人気は落ち」ないとされている雷門助六が登

場する。「家橘の不器量ばなし」(1900年八月一日等・見出し)は、多くの女性と浮名を流し、世間から「あらゆる俳優の人気成るものを一つ纏めて背負って立つ」と言われる歌舞伎役者に関する話題である。「望小太の不器量」(1900年八月三十日・見出し)の望小太も、自称ではあるが「乃公は知名の政治家」という人物である。「海軍不器量 松本中将転任」(1914年二月二十一日・見出し)も、海軍という知名度が高い組織に関する記事である。「愛子の大不器量」(1892年十二月九日・見出し)のみ知名度や高評価に関する描写は見つからなかったが、これ以外は、高い知名度や評価の人物や組織が醜態を晒してしまうという点が共通している。この意味は、「醜い、容貌が美しくない」という意味と「他人に見られたくない姿」であるのに対し、こちらは「(情けなくて)他人に見られたくない姿」という点で異なる。一方、「与えられた役割を遂行するための資質や能力に欠ける様」とは、世間からの期待があるという点でも、「情けない姿」という点でも共通している。そのためこの意味は、広義的には「与えられた役割を遂行するための資質や能力に欠ける様」と同類だと考えられる。しかし、「与えられた役割を遂行するための資質や能力に欠ける様」

という意味は単に能力がないということに重点が置かれているのに対し、こちらの意味は「(世間からの評価を下げてしまふような)醜態、痴態(を演じた)」という意味合いが強い。よって、厳密に同じ意味として現在も使われているかという点については再考を要する。また、この「醜態、痴態」と思しき意味は「フキリヨウ」と読まれている時期の用例のみ見られる。このことが関係しているかということも含めて今後の課題とする。

### おわりに

明治以降の読売新聞、朝日新聞に見られた「ブキヨウ」「フキリヨウ」は、表記の面では似た傾向を示した。しかし、語基の「器用」「器量」は、語義の交代等、歴史的に似た意味や用法を持っているのに対し、「ブキヨウ」と「フキリヨウ」は全く違う意味や用法を持っている。特に、「ブキヨウ」には半ば肯定的と思われるような意味が見られ、先行研究で指摘されていた負の感情等の影響が薄くなった側面があると言いうことができ。また、意味が違うとはいえ「ブキヨウ」と「フキリヨウ」の用例数には圧倒的な差が見られた。これも、先行研究で言われている「器用」と「器量」の口語性の有無などが関係していると思われる。

一方、「ブキョウ」の表記が「不」に統一され直したことの背景や、「フキリョウ」の「醜態」と思しき意味の位置付けなど、課題も山積している。今後も研究を続けていきたい。

## 謝辞

本論文を作成するに際しまして、お忙しい中様々なご指導・ご助言を頂きました郡千寿子先生、山田史生先生、平井吾門先生に深く感謝致します。

脚注

- 1 日本語文法学会編(2014)『日本語文法事典』大修館書店
- 2 野村雅昭(1973)「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」、『国立国語研究所論集(四)』国立国語研究所 p. 46
- 3 他の指摘としては奥野氏(1985)の「無」と「不」は、①否定領域が同じであること、②結合相手は二項対立を許す、という点が共通していること」等がある。
- 4 2)同2) p. 38
- 5 2)同2) p. 34
- 6 サトー・アメリカ 川崎晶子 ソーニア・ロング(1981)「語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素「無・不・未・非」の意味と使われ方」、『日本語と日本文学』笠間書院 p. 2
- 7 吉村氏は、野村氏、サトー氏ら、奥野氏の分析結果について次のようにまとめている。  
野村(一九七三)では、二字漢語の結合語基のみを分析した結果、「不」は用言四十%、相言三十%、体言二十四%、「無」は体言五十二%、用言四十八%、(中略)サト―他(一九八二)は、(中略)「不」は用言四十四%、体言三十二%、相言と二十%、「無」は体言八十四%、用言十%(中略)と分析している。奥野(一九八五)は、(中略)「無」は体言に、「不」は用言・相言に(中略)結合するとし、分布が偏っていることを指摘している。
- 9 8)同2) pp. 38-39
- 10 8)同2) p. 39
- 11 相原林司(1986)「不―無―非―未―」、『日本語学(五二二)』明治書院 p. 69
- 12 11)同2) p. 70
- 13 11)同2) p. 70
- 14 須山名保子(1974)「接辞「不」「無」をめぐる」、『学習院大学国語国文学会誌(十七)』学習院大学
- 15 相原林司(1979)「接辞「不」と「無」の使い分けに関する一考察」、『外国人と日本語』筑波大学文芸 pp. 53-55
- 16 高松氏によると、「無道」を「ブドウ」と読むことについては、『色葉字類抄』では「ムダウ」であるが、『運歩色葉集』並びに『文明本節用集』では「ブダウ」としていることが根拠であるとしている。
- 17 本来の「不」と「無」の用法と、当時の「不」と「無」の用法について、高松氏は松下大三郎(標準漢文法)と『ロドリゲス日本大文典』の「否定の助辞について」からそれぞれ次のように引用している。  
この字(引用者注:不)は、「修飾形式副詞」―副詞として下の詞を修飾し、下の詞の意義に由って自己の意義の実質的欠陥を補充される形式副詞―の1であり、動詞(形容詞を含む)の上に用いて否定を表す  
ものである(否定の形式副詞)となる。

8 吉村弓子(1990)「造語成分「不・無・非」」、『日本語学(九一二)』明治書院 p. 38  
の「帰著形式動詞」―客語に帰著し、客

- 語に依って意義の欠陥を補充される形式  
動詞一となる。  
(松下大三郎(標準漢文法)の引用)
- 26 読売新聞社公式ホームページより(URL:  
<http://www.yomiuri.co.jp/database/faq/>)  
(取得日:2016年十一月十五日)
- 27 伊東整・亀井勝一郎・中村光夫・平野謙・山  
本健吉編(1976)『豪華版 日本現代文学全集  
32 堀辰雄』講談社 p.438
- 28 一般社団法人日本推理作家協会ホームページ  
より  
(<http://mystery.or.jp/magazine/article/196/>)  
(取得日:2017年一月二十五日)
- 29 平野 英史 「阿部七五三吉の手工教育論にお  
ける教科課程の研究」『美術教育学・美術科  
教育学会誌(32)』美術科教育学会  
(2011) p.381
- 30 29 同 p.382
- 31 遠山一行(1991)「河上徹太郎―硬文学と  
歴史」『新潮』新潮社 p.324
- 32 国立国会図書館デジタルコレクションより  
(URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/934549>) (取得日:2016年12月23日)
- 33 CINIi 書誌情報(URL: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA84057751/>) (取得日:2016年12月23日)
- 34 朝日新聞公式ホームページより(URL: <http://www.asahi.com/information/db/>) (取得日:2016年十一月十五日)
- 35 長谷川雅康・廣田拓也(2011)「子どもの手の働きと意欲に関する調査: 鹿児島市の小学生の事例」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育学科学編』鹿児島大学 p.168(URL: <http://hdl.handle.net/10232/11749>) (取得日:2017年一月三十日)
- 36 文化庁国語課監修(1969)『国語表記実務概要』 p.261・59
- 18 高松氏は、日葡辞書から「ふほう(フウ)」の意味を「奉公をしないこと。または奉公を怠る」と引用している。
- 19 高松政雄(1982)「慣用音成立の一の場合―「不」―」『国語國文(五十一―五十二)』中央図書出版 pp.10-11
- 20 19 同 p.9,13
- 21 丹保健一・倪永明(2000)「接頭語「不(フ)」 「無(フ)」の交替を許す語をめぐって」『国語文字史の研究五』和泉書院 pp.233-234
- 22 19 同 p.14
- 23 来田隆(2000)「「器用」と「器量」」『鎌倉時代語研究二十三』鎌倉時代語研究会 p.270,272
- 24 23 同 pp.280-284
- 25 例えば、1875年十一月二十八日の記事は、検索にヒットはしなかったがその記事の訂正記事である同年十一月三十日の記事がヒットしたため、その記事から遡って発見した、等が該当する。



## 引用・参考文献

- ・宮地敦子(1968)「対義語の消長」『國語國文(三十七七七)』中央図書出版社
- ・野村雅昭「否定の接頭語「無・不・未・非」の用法」『国立国語研究所論集(四)』国立国語研究所(1973)
- ・須山名保子(1974)「接辞「不」「無」をめぐる」『学習院大学国語国文学会誌(十七)』学習院大学
- ・相原林司(1979)「接辞「不」と「無」の使い分けに関する一考察」『外国人と日本語』筑波大学文芸
- ・佐藤亨(1980)「近世の漢語についての一考察」『国語語彙史の研究一』和泉書院(国語語彙史研究会編)
- ・サトー・アメリカ 川崎晶子 ソーニア・ロンギ(1981)「語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素「無・不・未・非」の意味と使われ方」『日本語と日本文学』笠間書院
- ・高松政雄(1982)「慣用音成立の一場合―「不ブ」―」『国語国文(五十一―五十二)』中央図書出版
- ・飛田良文(1983)「明治以後の語彙の変遷」『論集日本語研究十五 現代語』有精堂出版
- ・奥野浩子(1985)「否定接頭辞「無・不・非」の用法」『言語(十四一六)』大修館書店
- ・相原林司(1986)「不―無―非―未―」『日本語学(五二二)』明治書院
- ・阪倉篤義(1986)「接辞とは」『日本語学(五二二)』明治書院
- ・丹保健一・倪永明(1986)「辞書間に見られる多義語記述の相違について―音象徴語を中心として―」『国語語彙史の研究七』和泉書院
- ・吉村弓子(1990)「造語成分「不・無・非」」『日本語学(九一十二)』明治書院
- ・遠山一行(1991)「河上徹太郎―12―硬文学と歴史」『新潮』新潮社
- ・前田富祺(1996)「漢字字体の「内省報告」のために」『国語文字史の研究三』和泉書院
- ・土屋信一(2000)「明治・大正・昭和期の漢字使用―東京日日新聞を資料として―」『国語文字史の研究五』和泉書院
- ・来田隆(2000)「「器用」と「器量」―『鎌倉時代語研究二十三』鎌倉時代語研究会
- ・佐竹秀雄(2000)「新聞「家庭面」における漢字」『国語文字史の研究五』和泉書院
- ・丹保健一・倪永明(2000)「接頭語「不(ブ)」「無(ブ)」の交替を許す語をめぐる」『国語文字史の研究五』和泉書院
- ・丹保 健一・倪 永明(2000)「接頭辞「不(ブ)」「無(ブ)」をめぐる」『三重大学教育学部研究紀要 人文・社会科学』三重大学
- ・文化庁国語課監修(1969)『国語表記実務概要』

- ・伊東整・亀井勝一郎・中村光夫・平野謙・山本健吉編(1976)『豪華版 日本現代文学全集』32 堀辰雄集』講談社
- ・森岡健二(2004)『日本語と漢字』明治書院
- ・野村雅昭(2008)『漢字の未来』三元社
- ・長谷川雅康・廣田拓也(2011)「子ども手の働きと意欲に関する調査:鹿児島の小学生の事例」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』鹿児島大学
- ・矢田勉(2012)『国語文字・表記史の研究』汲古書院
- ・高橋五郎編(1989)『和漢雅俗いろは辞典』錦巷堂
- ・大槻文彦編(1891)『言海第四卷』
- ・山田美妙編(1893)『日本大辞書』日本大辞書発行所
- ・物集高見編(1894)『日本大辞林』宮内省
- ・藤井乙男・草野清民編(1896)『帝国大辞典』三省堂
- ・棚橋一郎・林甕臣著(1897)『日本新辞林』三省堂
- ・金沢庄三郎編(1907)『辞林』三省堂書店
- ・上田万年・松井簡治編(1919)『大日本国語辞典第四卷』富山房・金港堂書籍
- ・大槻文彦編(1935)『大言海第四卷』富山房
- ・下中弥三郎編(1936)『大辞典 第二十二卷』平凡社
- ・金沢庄三郎編(1962)『新版広辞林第十三刷』三省堂
- ・見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武編(1988)『三省堂国語辞典第三版』三省堂
- ・『日本国語大辞典 第二版』小学館(2000)
- ・『広辞苑 第六版』岩波書店(2008)
- ・西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編(2009)『岩波国語辞典第七版』岩波書店
- ・電子辞書版(2011)『新漢語林 第二版』新村出版